國文

新制第一版

巻五

375.9
Fu26
資料室

41788
教科書文庫
4
810
41-1931
200030
2009

資料室

文部省檢定濟
昭和六年十月二十日　中學校國語漢文科用

375.9
Fu26

冨山房編輯部編

文國

新制第一版

東京　冨山房　神田

靈山に據る北畠顯家

磯田長秋筆

廣島大學圖書之印

廣島大學
教
47793
図

國文　卷五目次

一　春禽の聲……相馬御風…一
二　井出の玉川（古歌）……四
三　世界の最舊帝國
　　建國の昔と神祇の尊崇（自修文）……芳賀矢一…七
　　芳賀矢一…一三
四　夢殿……高濱虛子…一九
五　人格……高島平三郎…二四
六　建武中興……北畠親房…三〇
七　吉野山……藤岡作太郎…三四
　　楠公の遺蹟（自修文）……田山花袋…三八
八　阿新丸その一……（太平記）…四七

九　阿新丸その二……（太平記）…五二
一〇　海外飛躍の先驅……五九
一一　旅すゞり……岡本綺堂…六六
一　心太……六六
二　天狗……六七
三　唐がらし……六八
四　夜泊の船……六九
五　蟹……六九
六　三條大橋……七〇
七　またゝび……七一
八　雞……七二
博物館だより（自修文）……七三
一二　しひの葉（詩）……木下杢太郎…八一

一三　舟ふな……（狂言記）…八二
一四　松葉仙人……（十訓抄）…八六
一五　金槐集と山家集……八九
一　金槐集……源實朝…八九
二　山家集……西行法師…九一
一六　生物に於ける調和……永井潛…九二
一七　箱王仇に遇ふ……（曾我物語）…九八
一八　夏の自然……南部修太郎…一〇四
山……一〇六
湖……一〇七
川……一〇九
海……一一
瀬戸内海の航路（自修文）……南部修太郎…一一三

一九　樂訓……貝原益軒……一二六
二〇　上杉鷹山と細井平洲……一二九
二一　夕陽の美……高山林次郎……一三六
二二　山より……五十嵐力……一三八
　一　阿蘇山より……一三八
　二　那須より……一四〇
二三　砂丘日記……吉田絃二郎……一四三
二四　ふじの山（狂歌）……一五一
二五　高名の木のぼり……吉田兼好……一五四
二六　廣德寺の門……橘南谿……一五六
　中央氣象臺を見學して（自修文）……一六二
二七　博雅の三位……（今昔物語）……一七三
二八　人生の味……大町桂月……一七七

南京圖書館印

國文　卷五

一　春禽の聲

相馬御風[一]

越後の私たちの住んでゐるあたりでは、雪が消えて春になると、人々はもう次の冬に焚く爲の柴を刈りに山に行く。葉の出ないうちに雜木を刈つて來て、それを一年中乾かして置くのである。

その頃になると、私は何時も良寛和尚の次の樣な詩を思ひ出す。

擔薪下翠岑。　翠岑道不平。
時息老松下。　靜聞春禽聲。

そしてその詩を獨り靜かに口ずさんでゐるうちに、私は何時となしに、さうした場合の良寛の姿を幻に描いてゐるのである。

それぱかりでなく、山の路は平かでないといふこの詩の一句の

（一）詩人、評論家。名は昌治。新潟縣の人。明治十六年生。

翠岑

うちに、私は人の世の勞苦の樣を想ひ、それを詠歎した良寛和尚の心持の深さを想ふと共に、時に老松の下に息うて靜かに春禽の聲に聽入ると歌つた和尚の心持に、一層强く引附けられるのである。

靜聞春禽聲（河内舟人筆）

生の歩みは苦しい。それは恰も薪を擔うて、平かならぬ山の路を歩む樣なものである。しかも何といふ有難さであらう。その路には、時に息ふべき老松の根元があり、また其所には、靜かに聽入るにまかせる樂しい春禽の聲がある。

私はわけてこの詩の最後の一句を愛誦して措かない。「靜聞春禽聲。」といふ一句の奥には、限りない廣さがあり、深さがあるではないか。

しかし、私たちが時にその「老松の下に息うて、靜かに春禽の聲を聞く。」といふ樣な深い心の歡を與へてもらへるのも、一方に、平かならぬ山の路を、薪を擔うて下る樣な勞苦があればこそである。この勞苦なくして、この詩の後の二句に歌はれた樣な歡を得ようとしても、それはだめである。山の泉のうまさを味はふ事の出來る者は、山路の險しさに苦しんだ者の外にはない。

それに就いて思ひ出すのは、私の友人のお母さんが、最期の病床に横たはりながら、頻りに達者な時分薪を採りに行つた山の谷川の水を、飲みたい飲みたいと言つたといふ事である。しかも、親思ひの友人がわざ〳〵山まで行つて、その水を汲んで來て飲ませたにも拘らず、お母さんはそれをどうしても、その谷川の水とは信じなかつたといふ事である。

春が來て、人々が山へ柴刈に行く頃になると、私はあの良寛和尚の詩を思ひ出すと共に、この友人のお母さんの話を思ひ出す。春の山には樂しみが多い。しかし、徒に遊山ばかりを目的に山に行く人に、山は本當の樂しみを與へてはくれないのではなからうか。私は時にそんな事を思つたりする。

二　井出の玉川

二見潟こち吹く風にあけそめて
　かみよのまゝの春は來にけり。

加藤千蔭(一)

春といへば霞みにけりなきのふまで
　なみまに見えしおはぢ島山。

俊惠法師(二)

(一)江戸時代の國學者、歌人。姓は橘。江戸の人。賀茂眞淵の門人。文化五年(一八〇四)歿、年七十五。
(二)歌人。源俊頼の子。崇德天皇の頃の人。

おほ空は梅のにほひに霞みつゝ
　くもりもはてぬ春の夜の月。

藤原定家(一)

初瀬野や里のうなゐに宿とへば
　霞める梅のたちえをぞさす。

契沖(二)

花ぞかり都をみやりて
　見わたせば柳さくらをこきまぜて
　　みやこぞ春のにしきなりける。

素性法師(三)

小澤蘆庵(四)

契沖筆蹟

(一)鎌倉時代の和歌の巨匠。新古今集の撰者の一。世に京極黄門といふ。仁治二年(一二四一)歿、年八十。
(二)江戸時代の國學者、名は空心。俗姓下河。攝津の人。元禄十四年(一七〇一)寂、年六十二。
(三)平安時代の歌僧。俗稱良峰玄利。清和天皇に仕へた。
(四)江戸時代に於ける京都の歌人。名は玄仲。尾張の人。享和元年(一八〇一)

六一年）歿、年七十九。

(一)平安時代末期の歌人。攝津（大阪市住吉區）住吉神社の神主。寛和五年（一七六三年）歿、年八十。

(二)鎌倉時代初期の歌人。千載集の撰者。（一八久元年六四年）歿、年九十一。

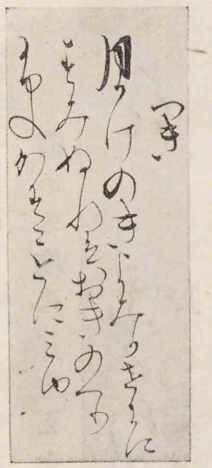
(三)鎌倉時代の歌人。寛元二年（一九〇四年）歿、年七十四。

(四)平安時代末期の歌僧。興福寺別當。天治二年（一七八五年）寂、年七十八。

おほぬ川月と花とのおぼろ夜に
ひとり霞まぬ涙のおとかな。　津守國基

うすずみにかくたまづさと見ゆるかな
霞める空にかへるかりがね。　藤原俊成

駒とめてなほ水
かはん山吹の花の
露そふ井出の玉川。　藤原公經


傳藤原俊成筆蹟

露すがる庭のたまざさうちなびき
ひとむらすぎぬゆふだちの雲。　權僧正永緣

五年）寂、年七十八。

(一)平安時代の歌僧。六歌仙の一。俗名良峰宗貞。寛平二年（一五五〇年）寂、年七十五。

(二)平安時代末期の歌人。金葉集の撰者。河鳥羽、崇德堀の三朝に仕へた。生歿年不詳。

(三)國文學者、文學博士。福井市の人、昭和二年歿、年六十一。

(四)吉野朝の忠臣。北畠氏。伏見一後村上朝に歷仕し、後醍醐天皇を輔佐して天下を經綸し、吉野朝廷の柱石となつた。正平九年（一三〇一四年）歿、年六十三。

きくたびにめづらしければほとゝぎす
いつも初音のこゝちこそすれ。　僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もて
なにかは露を玉とあざむく。　源俊賴

風ふけばはすのうき葉に玉こえて
すゞしくなりぬひぐらしの聲。　芳賀矢一

三　世界の最舊帝國

源親房卿が神皇正統記に、「唯我が國のみ天地開けし始より今の世の今日に至るまで、日嗣をうけ給ふ事よこしまならず。一種姓の中におきても、自ら傍より傳へ給ひしすら、なほ正に歸る道ありて

(五)親房の著。六卷。神系皇統によつてその御事蹟を記したもの。

ぞ、たもちまし〳〵ける。これ、しかしながら神明の御誓あらたにして、餘國に異なるべきいはれなり。」と書かれたのは、今より約五百八十年以前で、親房卿は東洋の國々の歴史をこそ知られたれ、世界各國の樣子は全く知られなかつたのである。今日世界交通の世の中となつて、諸外國の歴史の知得られる樣になつても、この言は依然動かぬのである。萬世一系の天皇上にいまして、千古不易の臣民下に仕へ奉る事は、世界各國に全く類例のない事である。國史の上に多少の波瀾はあり、武家の跳梁した時代には、皇室の式微と申すべき時代もあつたが、(一)八田知紀大人が歌つた樣に、

跳梁式微

(一)江戸時代末期の歌人。薩摩藩士。明治五年御歌道用掛となつた。明治六年歿、年七十五。

いくそたびかき濁してもすみ返る
水や皇國のすがたなるらん。

で、波瀾が一たび靜まれば、また元の樣な清澄濁りのない大御世となるのである。

十數年前
西紀一九一二年（我が大正元年）清朝は滅び支那は共和國となつた。

(一)滿洲族。
(二)蒙古族。
(三)滿洲族。
(四)Charles II.（西紀一六〇〇—一六四九年）
(五)Louis XVI.（西紀一七五四—一七九三年）
(六)Hanover.
(七)George I.（西紀一六六〇—一七二七年）
(八)Francis I.（西紀一八三〇—一九一六年）

凡そ世界の國々を見わたしても、我が國程の舊國はない。支那の國は十數年前までは、世界の最舊帝國と稱せられた。成程、舊國には相違ない。しかし、唯舊いといふばかりで、二十何回も帝室が更代した。支那人種ではない他の民族が、(一)金とか、(二)元とか、(三)清とかいふ朝廷を立てた。幾たびか他人種に征服された帝國は、幾たびか斷絶し復興したのである。殊に近年の革命では、君主國から民主國に代つてしまつた。支那は全く革命を繰返した國である。

まして歐米各國の歴史は、王室と人民との爭の繰返された記錄で、中にも英王のチャールス一世が、(四)人民の公敵として、(五)ルイ十六世など斷頭臺の露と消えた悲慘な歴史は、日本人の夢にも考へ及ばぬ事である。それ故、今の王室は皆新しい。現在の英國皇室は、(六)ハノーバー家と言つて、一七一四年に卽位した(七)ジョージ一世から始つてゐる。墺國皇帝は一八〇六年に(八)フランシス一世が始めて帝と稱したもので、ドイツ帝

國の建設は一八七一年即ち明治四年の事であつたが、何れも亡びた。プロシャ王は二百餘年前、赤穂義士夜討の前年始めて王位に即いたのであつた。イタリー王國も一八六一年ウヰットリオ・エマヌエル二世が始めて統一の事業を擧げて、イタリー王となつたのである。ロシア前帝の家はロマノフ家と言つて、一六一三年ミハイル・フェオドロウヰッチが始めて帝位に即いたので、ピーター大帝などといふ英主もあつたが、全露の前皇帝ニコラス二世も、あはれ先年の革命で難に遭はれたのである。かういふ諸國の歷史を見わたすと、親房卿の言はれた樣に、我が帝國はどうしても餘國と異なつたいはれがある樣に思はれる。とにかく世界中の最も舊い國である事は疑がない。親房卿が正統記を書かれた時分には、イタリー王室も、さきのプロシャ王室も、乃至はオーストリヤ王室も、皆普通の人民の列に居つたのである。

(一)西紀一七〇一年。
(二)Victor Emmanuel II.（西紀一八二〇—一八七八年）
(三)Romanoff.
(四)Michael Feodorovitch.（西紀一五九七—一六四五年）
(五)Peter.（西紀一六七二—一七二五年）
(六)Nicolai II.（西紀一八六八—一九一八年）

我が國が諸外國に異なるいはれは何か。それは我が建國の由來が自ら別であるのに起因し、皇室と國民とが「義ハ君臣ニシテ情ハ父子」であるといふ親密な關係によつて結び附けられてゐるからである。我等は萬世一系の事實を誇るに先だつて、その事實の成立ち得た原因を知らなければならぬ。天照大神が「是吾子孫可王之地。宜爾皇孫就而治焉。行矣。寶祚之隆。當與天壤無窮者矣」と仰せられた神敕のつゆ違はず、眞に他の諸國には比類のない國史を成し得た理由を知らなければならぬ。

昔支那の秦の始皇は六國(一)を平げて皇帝となり、自ら始皇と稱して萬世に至らせようと宣言した。しかし、全くの空想に過ぎず、僅かに二世で漢に亡されたのであつた。彼と此と比較にならない原因を知らなければならぬ。

(一)齊、楚、燕、韓、魏、趙。

溫柔　おとなしいこと。溫厚なこと。
天の長田狹田　高天原の大小の田といふ意。
耕穡　たがやすこととりいれること。耕作。
齋機殿　神に奉る御衣を織るけがれのないはたどの。
新嘗　その年に出來た穀物を諸神に奉り、御自身も召上ること。
寛恕　おほ目に見てゆるすこと。

自修文

建國の昔と神祇の尊崇

芳賀矢一

古典によつて皇祖天照大神の御事蹟を察するに、賢明透徹で、極めて御德が高かつたのである。さうして極めて溫柔で、玉の樣な性質でいらせられたのである。躬ら天の長田狹田を作らせ給ふとあるから、人民と同じく耕穡の業にさへお盡しになつたのである。齋機殿に入つて機を織らせられた事も見えるから、機業をさへおいそしみになつたのである。尊貴の御身を以て、かく下民と同じく農工業をも親らされたのである。またかの新嘗をお營みになつたのを見ても、いかに下民の勞苦に御同情あそばされ、且下民の幸福に懸念せさせられたかゞ窺はれる。御弟の素戔嗚尊が亂暴を飽くまでも御忍耐あそばされ、御寛恕あそばされたのを見ても、その美しい御性質は拜察される。しかし、素戔嗚尊が天上にのぼり來ますと聞かせられて、男裝して弓矢を手挾み、

黑き心　惡い心。邪心。
毅然　强くしつかりしてゐるさま。
三代の間　瓊瓊杵尊、彦火火出見尊、彦鸕鷀草葺不合尊。
昔の人　「ひさかたの」の歌の作者は大伴家持「あきつしま」の歌は作者不詳。
ひさかたの　天の枕詞。
すべらぎ　天下をすべ治め給ふ御方。

「國を奪ふ黑き心あらばゆるさじ。」と決心あそばされた御氣勢に、十分な御勇氣も見えるのである。これ等を總合して考へれば、大神は實に我が日本國民の理想とも見るべき御方であらせられたのである。溫和で、勤勉で、一大事變に際しては毅然たる勇武、一歩も退かない氣象があらせられたのである。

皇孫瓊瓊杵尊は天照大神の嚴かな御言葉を畏んで我が國に降臨された。それから三代の間は共に筑紫に都されて、國土の御經營にいそしまれた。瓊瓊杵尊から第四代目の神日本磐余彦尊即ち神武天皇に至つて、始めて大和國に都されて、皇威が廣く四方に及んだので、この天皇から人皇の世と稱し、この天皇の御即位の年を我が紀元第一年と數へるのである。昔の人の歌に、瓊瓊杵尊をば、

ひさかたの、天の戸開き高千穗の、峰に天降りし　ゝ
すべらぎ。

秋津洲　我が國の美稱。
畝火　高市郡白橿村。
宮柱太知り立てて　宮柱を立派に立てて、宮殿を營んでの意。
古典　古い書籍。
不逞　おごりほしいまゝのこと。まつろはぬもの　服從しないもの。
歸順　朝廷の命にしたがふこと。

といひ、神武天皇をば、

秋津洲、大和の國の橿原の、畝火の宮に宮柱、太知り立てて天の下、知らしめしけるすべらぎ。

と稱へてゐる。かくすべらぎの御名の起りも古く、日本帝國の創業もまた遠い昔の事である事を知らなければならぬ。

建國の創業に與からせられた瓊瓊杵尊にしても、神武天皇にしても、常に天照大神の御教を守つて、その聖德を以て人民を感化された事は、古典に考へて知られる事である。外國の歷史に見える樣に、單に武力一片で暴壓的に服從させたのではなかつたのである。不逞の徒で、皇師にさからふ者はあつた。それを古典には、まつろはぬものと言つてゐる。そのまつろはぬものを平定される事をやはすと言つてゐる。やはすは和かにする事で、これまで頑强に我意を張つて敕命を奉じなかつた者の心を和げて、心底から歸順させるのである。また、ことむくといふ語もある。ことむくとは言を以て諭して、從來他の方面に向つてゐた者を、こちらへ向かせる事である。これ等の語を考へて見ても、我が創業の君が、いかに慈を以て、德治を以て不逞の徒をも心服させられ、慰撫されたかゞ察せられるので、決して無理に力ばかりでおさへられたのではない。これが卽ち大神の大御心で、列聖は常にこの大御心を御繼承あそばされたのである。

德治　德でをさめること。
專制　思のまゝにとりさばくこと。
歷然　あきらか。はつきり。

支那には御民といふ語もあり、牧民といふ語もある。人民を馬や牛に譬へたのである。君主專制の意味がこの語の上にも歷然としてゐる。我が國には決してかういふ語はない。すべらぎはすべてを統べる義で、すべらぎ卽ち天皇が國を治め給ふ事を「御代知ろしめす。」といふ。知ろしめすは「お知りなさる。」といふ意味である。よく下民の事情を知るといふ事である。かく下情に通じて、始めて仁慈の政が行はれるのである。まつろはぬ者に對してはこれをやはし、これをことむけ、さて人民をばおしなべて知ろしめ

宮造　宮殿を造營すること。
(一)奈良縣磯城郡。櫻井町の東南。海拔二四四メートル。
(二)第十代。

したのである。

神武天皇は大和國橿原に宮造して御即位あらせられた年、天神地祇を鳥見山に祭つて、祖先尊崇の大義を明らかにされた。歷代の天皇も常にこの事に御心を注がせられて、今の世に至るまで變りはない。天照大神が皇孫にお授けになつた神鏡は、初めは宮中に床を同じうして安置されたが、それは神威をけがす虞があるといふので、(二)崇神天皇の御代には、始めてこれを大和國笠縫邑に祭らせられ、次の御代垂仁天皇の御時に、今の伊勢の五十鈴川の上にお祭りになつたのである。聖德太子は外國文明を我が國へ輸入して、我が國の進歩をお圖り

鳥見山（伊藤龍涯筆）

杆挌　さはりさからふこと。
神道　我が國固有の教道。神祇を敬ひ、祭祀をつゝしむ道。
神佛混淆　神と佛とを混淆して祀ること。
流布する　あまねくひろめる。
產土神　人の生れた土地を守護する神。氏神。
傳播　つたはりひろまること。

になり、大いに佛教の興隆に力を盡されたが、推古天皇の十五年には文武百官と共に神祇を拜して、神祇崇敬の道を明らかにされた。卽ち神祇を祭るのは、信仰と何等矛盾杆挌するのでない事を示されたのである。爾來佛教の方ではだん〳〵神道に近づいて來て、神佛混淆といふ姿になつたが、これは一面に於て、神祇尊崇の國民の信念が、いかに牢いものであるかを證明するのである。いかに偉大な宗教の力を以てしても、國民の神祇尊敬の念を、根本から拔取つてしまふ事は出來なかつたのである。佛教を流布するに力めた高僧たちにしても、やはり日本國民であるから、國民の信念を離れる事は出來なかつたのであらう。それ故、佛教が大いに興隆して、堂塔伽藍が到る所に聳える樣になつても、神社は神社で、昔のまゝの崇敬を受けたのである。

產土神の鄕社村社が丘陵森林の間に隱見して、日本國體の特色を語つてゐるのもこれが爲で、西洋などでは、耶蘇教の傳播と

共に、かういふ古來の歴史的記念物は全く一掃されたのである。

光仁天皇の寶龜三年の記事に、大和國西大寺の西の塔に雷が落ちた。これを卜つて見ると、近江國滋賀郡小野神社の境内の木を伐つてこの塔を構へたので、その神のたゝりであるとわかつたと書いてある。かういふ話は、佛教興隆の時代に於ても、國民の敬神思想がいかに熾盛であつたかを證明するものである。

國家の大事ある毎に、神にも佛にも祈請されるのが常であつたが、かの蒙古來寇の場合には、天皇は身を以て國難に代らうと伊勢神宮にお祈りになつた。これまでの歴史には龜山上皇とあつたが、新しい史料の發見で、上皇も天皇もお祈りになつた事がわかつた。さうして大風が吹起つて、蒙古の船がさん〴〵にうち破られた時、國民はこれを神風と唱へた。神國を外難から救つた風で、祖宗の神靈の吹起された風と信じたのである。

熱田神宮の御劍を僧某が盜み出して、朝鮮へ渡らうとしたが、

一掃　一度にはらひ去ること。
(一)第四十九代。
(二)生駒郡伏見村。眞言律宗の巨刹。
(三)滋賀縣滋賀郡和邇村。小野臣の氏神。
熾盛　はげしくさかんであること。

途中大暴風で引返して、遂にその意を果さなかつたといふ傳說があるもとよりこれは歴史上の事實ではあるまいが、かういふ傳說の生ずるのを見ても、神の威靈の方を尊んだ國民思想の一端が窺はれる。

四　夢殿

高濱虛子

上宮王院の西門をはいる。夢殿の圓堂が中央に在つて、右には禮堂の長い建物、左には舍利殿繪殿の連續した長い建物がある。寂寞として靜かだ。

此所は法隆寺中、別に一區劃をなしてゐる。この地は昔聖德太子の住居された斑鳩宮の舊跡で、天平年間その跡にこの堂宇を建てたものである。太子世におはす頃、常に三昧に入り、出でては夢に託して未來を語られる、それが必ず事實となつて現れたといふ所か

(一)俳人。名は淸。松山市の人。明治七年生。
(二)一名夢殿。法隆寺内にある。
(三)舍利及び聖德太子二歳の像が安置してある。
(四)聖德太子御一代の傳を描いてある故にこの名がある。
(五)奈良縣生駒郡法隆寺村。聖德太子の建立。飛鳥時代の代表的建築物。
(六)第四十五代聖武天皇の御代。(一三八九—一四〇八年)

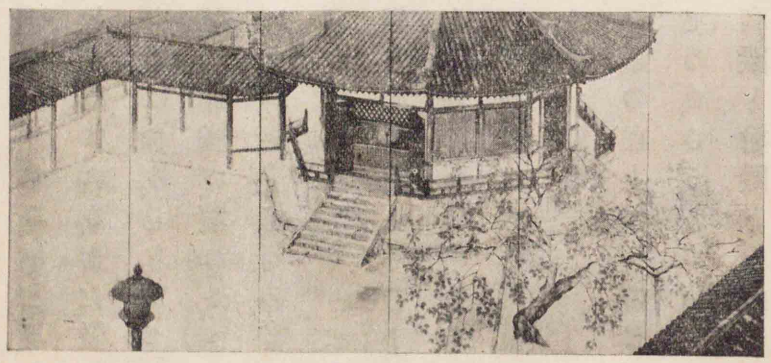
ら、この夢殿といふ名は起つたのである。

禮堂の建物は薄つぺらな物ではない。大きな柱の、稍傾きかゝつてゐながら、餘りあぶなげに感ぜられぬのは、もと〳〵建物全體の安定がよいのに基づくのであらう。舍利殿も繪殿も扉が締つてゐて、中にある物は見る事が出來ぬ。凸凹に踏みへらされた厚い板の廊下の上を下駄で歩く。四邊が靜かなので、この音が際立つて高い。この音は二つの殿堂の中央の折曲つた廊下に入つて、その裏手の奥まつた所にある輪藏の前に止る。中をのぞくと、冷い陰濕な風が顏に當る。輪藏の守護神であらうか、丹碧の色彩の朧氣ながらに見られる佛體がある。下駄の音は再び奥まつたその輪藏の前から起つて、舍利殿、繪殿の間を通つて、明るい先の廊下に出る。その廊下を今一度その音が歩く。かた〳〵と歩く。廊下の長さだけ歩く。さうしてその音が俄にふつと消えた。廊下を下りて庭上に立つてゐた。

輪藏

右に禮堂、左に舍利殿、繪殿を從へて、中央に靜かに立つてゐる八角の御堂が夢殿である。夢殿は圓堂として、天平時代の模範的建物である。殊にその露盤は、美術上の意匠に於て、我が國第一位の物として推奬される所の物である。余は庭上に立つて、浮世繪によくある人物の樣に、がくりと首を後に落して、大空を仰いでこの露盤を見る。

露盤の上には寶珠がある。寶珠を抱いてリング(一)がある。そのリングの上に八つの風鐸が、玉盤を溢れる水の樣に周圍に垂れてゐる。微に風が吹く。この風鐸が搖



夢殿（田村彩天筆）

露盤

(一) ring.

風鐸

れる。音がするかと耳を傾ける。したかとも思はれる。しなかつたかとも思はれる。また微に風が吹く。また風鐸が搖れる。またしたかとも思はれる。しなかつたかとも思はれる。

首が痛い。壞れかゝつた人形の樣に、がくりと首を垂れる。首を垂れて耳を澄す。何の音もない。靜かに庭上を歩く。白い砂の上に春の日が當る。砂が餘りに白い爲に、春の日が黃色い樣に思はれる。砂は銀の如く白い。その上に金の如き春の日が當る。眞鍮の樣な男が一人、力なくその中を歩いてゐる。鳴つた。確かに鳴つた。ちりりんと鳴つた。壞れた人形の首が再びがくり上を向く。風鐸が微に動いてゐる。

銀の庭上に金の日がさしてゐる。眞鍮の樣な人がその中を歩いてゐる。さうして風鐸の音を何と形容したらよからうか。見ると、舍利殿と繪殿との連續した長い屋の棟に、同じ鳥が二羽とまつてゐる。何といふ鳥であらう。色の白い嘴の長い美しい鳥だ。それが初は遠く左右に離れて向合つてゐる。ぴよい〳〵と跳びながら近づいてくる。終に屋の棟の眞中で行合つて、二羽ともぴよこりと向きかはつて背中合せになつて、今度はぴよこ〳〵と跳びながら、左右に遠ざかる。

風鐸の音を何と形容したらよからうか。銀の棒で金の盤を敲いたのよりもよい音で、金の棒で琥珀の玉を敲いたのよりもよい音だ。

余が法隆寺の宿はこの夢殿の南門前にある。歸つて宿の娘に、夢殿の風鐸の音はよい音だと言つたら、娘は法隆寺の塔の風鐸の音もよい音だと言つた。さう言へば、(一)金堂の風鐸の音もよい音だ。山門の風鐸の音もよい音だ。つまり法隆寺靈域內は、この微妙な音に充ち滿ちてゐる事になる。

(一)本尊を安置する殿堂。釋迦三尊、藥師三尊、四天王等が安置してある。

personality　Charactor

五　人格

現時一般日常の談話に、「あの人は人格が高い。」とか、「人格の人。」であるとか言つて、人格を品性、性格の意味に用ひてゐる。しかし、科學的にはこれと少しくその意義を異にし、人格とは、人の人たる所以を言ふのである。故に人類である以上、誰でも人格を具へてゐるものと見なければならぬ。しかし、同じ人として生れて來ても、心の働が未熟であつて、一人前に發達して居らぬもの、即ち子供や精神に缺陷のある者（精神病者、白痴）などは、嚴密な意味で言ふ時には、人格を認められぬ者である。

然らば普通の人として有せねばならぬ者、いはゆる人の人たる所以の者は、いかなる要素から成立してゐるかと言ふに、その第一は自己意識である。自己意識は一に自意識または自覺と稱し、自分で自分の事を考へ識る心の働である。即ち吾人が自ら、今自己は何を思つてゐるか、自己の心はいかに働いてゐるかなどと反省するのは自己意識である。子供に十分な人格がないと言ふのは、反省の力即ち自己意識がないからである。子供には、自己は今何を考へてゐるか、自己のした事は善いか惡いかなどと反省する事は出來ない。精神病者や白痴もまた自己意識をもたぬ。普通の人々にあつても、反省を缺く人は、人格の進歩して居らぬ人であるといふ事が出來る。人格の進んだ人、即ち人の人たる所以の者を十分に具へた人になると、必ずよく自ら自己の事を考へ得る者である。而してこの反省があつて始めて哲學でも、道德でも、宗教でも理解し構成する事が出來る。佛教で見性（けんじやう）といふのは、性即ち自己の心、自己の天性、自己その物を明らかに識る事で、十年も二十年も掛つて禪の修養を積むのは、つまり自己を識る爲である。自らを識る事は斯の如く大

切なものである。

ソクラテス(一)は世界の四聖に數へられる程の偉い人であるが、曾てデルフィ(二)の神殿に詣で、その額に「己を知れ。」といふ語が書いてあるのを見て、深く自己の心を知る事の必要を覺り、爾來內省に怠なく、終に偉大な哲學者となつたのである。また儒教の大學には「明德を明らかにす。」と說いてある。これは、自己の有する明德を明らかにする意で、畢竟自らを知る事になるのである。人はいかに地位が高く、財產が豐かでも、自ら反省して己を知らねばならぬ。たとひ少しの時間でも、每日自己を省ねばならぬ。學校で反省錄を記せと敎師から命令される事があらうが、反省は實に德を成す基であり、自己を知り人格を完成する所以である。故に反省錄を作り日記を記すのは、誠に善い修養である。これ等の事をせず、每日行當りばつたり主義で過してをれば、終には自己の行爲の善惡を知る事が出來なく

(一) Socrates. ギリシャの大哲學者。(西紀前四七〇—前三九九年)

(二) Delphi. ギリシャの古代の神。神前に七賢聖の箴言がある。「己を知れ」はその一。

內省

なる。

第二に、十分な人格として有すべき今一つの働は、自己決定(自決)、卽ち自己の事を自己で決する事である。人は行爲を判斷して、爲すべき事と爲すべからざる事とを自己で決定して行く事の出來る心がなくては、まだ十分な人格を具へた人とは言はれぬ。

第三に、十分な人格を成立させるに甚だ大切な事は、責任の感である。人が廣い世界に唯獨りであるものなら、責任などは不必要である。しかし、苟も社會を成してゐる以上は、これがなければ他人が相手にせぬ。若しも馬か犬であるなら、「あれだけ賴んで置いたのにやつてくれぬ。」と怒る人もあるまい。然るに對手が人であると、「當にならぬ人。」「賴みがひのない人。」と嘲る。故に苟も自己の事を自己で決し、獨立してこれを行ふ人なら、責任を負ふ覺悟がなくてはならぬ。されば(一)こそドイツの哲學者カントも、人格とは

(一) Immanuel Kant. (西紀一七二四—一八〇四年)

責任の主體である。」と言つたのである。この定義は、一般の學者から妥當と信ぜられてゐる。そしてこの定義から推すと、たとひ犬であつても責任の感があれば、人格を有すといふ事が出來、若しまたたとひ人であつても責任を負ふ事が出來ねば、獸類と同樣で、人格者として取りあつかふ事が出來ぬ。子供には責任の感がない。故に法律に於ても道德に於ても、獨立の人格を有せぬ者と看做すのである。精神病者や白痴もまたさうである。されば家庭日常の些事に於ても、「此所は私が掃除致します。」と引受けた以上は、その跡に少しの塵があつても、自己の責任として掃除をし直すといふ樣に、鞏固な責任をもたねばならぬ。實に自己の職責を完全に盡し得る人にして、始めて人格の高い人と言はれるのである。故にその官吏たると實業家たると、男たると女たるとを問はず、一切の人は皆盡く各自の責任を重んぜねばならぬ。これと共に、自らの責任を重んずる人は、他人の責任に對しても敬意を表し、その人が自らの責任を遂行するに就いての妨害をせぬ樣に心掛けねばならぬ。これ卽ち自他の人格を尊重する所以である。

人格は大體上に述べた樣なものであるが、これを養ふには、三要件が間斷なく實行されねばならぬ。かくする間に人格は次第に完成されるのである。人格を養ふとて坐りこんで書物を讀み、何か用事を言ひつけられると、「只今人格修養中であるから動けない。」などと言ふ樣では、却つて修養にはならぬ。人格の修養には讀書も勿論必要であるが、それよりも實行が更に緊要である。些事たりとも忽にせず、日常の事にもその意を以て當れば、人格はおのづと養はれる。

(一)（高島平三郎の文に據る）

(一)心理學者。東洋大學教授。廣島縣の人。慶應元年(二五二五年)生。

六　建武中興

北畠親房(一)

東にも上野の國に源義貞といふ者あり、高氏が一族なり。世の亂に思を起し、幾何ならぬ勢にて鎌倉にうちのぞみけるに、高時等運命窮りにければ、國々の兵つき從ふ事、風の草を靡かすが如くして、五月二十二日にや高時を始めとして、多くの一族皆自滅してければ、鎌倉また平ぎぬ。符契を合する事もなかりしに、筑紫の國々、陸奥、出羽の奥までも、同じ月にぞ鎭まりにける。六七千里の間一時に起りあひにしに、時の至り運の極りぬるはかゝる事にこそと不思議にも侍りしものかな。

君はかくとも知らせ給はず、攝津の國西の宮といふ所にてぞ聞かせましく／けるる。六月四日東寺に入らせ給ふ。都にある人々も(參)りしかば、威儀を整へ本の宮に還幸し給ふ。何時しか賞罰の定めあり。兩院、(二)新院をばなだめ申し給ひて、都に住ませまゐらす。されど新院は僞主の儀にて、正位には用ひられず。年號も本の如く元弘と號せらる。平治より後、平氏世を亂りて二十六年、文治の初頼朝權を專らにせしより、父子相繼ぎて三十七年、承久に義時世を執行ひしより百十三年、すべて百七十餘年の間、おほやけの世を一つに知らせ給ふ事絶えにしに、この天皇の御代に、掌を反すよりも易く一統し給ひぬる事、宗廟の御計らひも時節ありけりと、天下擧りてぞ仰ぎ奉りける。

「同じき年の冬十月に、先づ東の奥を鎭めらるべしとて、參議右近中將源顯家卿を陸奥守になして遣されぬ。代々和漢の稽古をわざとして朝家に仕へ、政務に交る道をのみこそ學びつれ、吏途の方に(も)習はず、武勇の藝に(も)たづさはらぬ事なれば、たびく／いなみ申しゝかど、「公家既に一統しぬ。文武の道二つなるべからず。昔は皇子、

(一)吉野朝の忠臣。正平九年(一三一四年)歿、年六十三。
(二)元弘三年。(一九九三年)

(一)後伏見、花園の兩上皇。
(二)光嚴院。
(三)十六方

藩屏

(一)第九十七代後村上天皇。

(二)義氏

抽賞

皇孫、若しは執政の大臣の子孫のみこそ、多くは軍の大將にもさゝれしか、今より武を兼ねて藩屏たるべし。」と仰せ給ひて、御躬ら旗の銘を書かしめ給ひ、さまゞの兵器をさへ下し賜ひぬ。任國に赴く事も絶えて久しくなりにしかば、古き例をたづねて罷申の儀あり、御前に召し、敕語ありて、御衣、御馬などを賜はりき。尚奥の固めにも(一)と申し受けて、御子を一所伴なひ奉りぬ。かけまくも畏き今上皇帝の御事なれば、こまかには記さず。かの國に著きにければ、誠に奥の方ざま、陸奥、出羽の兩國をかけて、皆靡き從ひにけり。同十二月左馬頭源直義の朝臣、相模守を兼ねて下向せり。これも四品上野太守成良親王を伴なひ奉りぬ。この親王後に暫く征夷大將軍を兼ねさせ給ひき。直義は高氏が弟なり。

抑、かの高氏(二)、御方に參れりしその功は誠に然るべし。ずゝろに寵幸ありて抽賞せられしかば、偏に賴朝卿天下を鎭めしまゝの志に

(一)従二位、權大納言、皇后宮大夫

(二)承久元年十四月廿七日

のみなりにけるにや、何時しか越階して四位に敍し、左兵衞督に任ぜられぬ。拜賀の先にやがて從三位に敍し、程なく參議從二位まで昇せられ、武藏、常陸、下總三箇國の吏務、守護及び數多の郡莊を賜はりぬ。弟直義左馬頭に任じ、後に四位に敍せられぬ。昔賴朝ためしなき勳功ありしかど、高位高官に昇る事は亂政なれば、果してその子孫早く絶えぬとぞ申し傳へたる。かの高氏等の先人は、賴朝、實朝の時に親族なりしかども、優遇せられし事もなく、唯家人の列なりき。實朝の八幡宮に拜賀せし日も、地下前驅二十人の中に加へられけり。たとひ賴朝の後胤なりとも、今更登用すべしとも覺えず。況や久しき家人なれば、さしたる大功もなくてかくやは抽賞せらるべきと、怪しみ申す輩もありけりとぞ。關東の高時天命既に窮りて、君の御運を開き給ひし事は、更に人力と言難し。武士たる輩、言はば數代の朝敵なり。御方に參りてその家を失はぬこそ餘りある皇恩な

理運

(一)國文學者、文學博士。金澤市の人。明治四十三年歿、年四十一。

僻地

れば、更に忠を致し勞を積みてぞ、理運の望をも企てはべるべき。然るを天の功を盜みて己が功と思へり。なげかはしき事にこそ。かくて高氏が一族ならぬ輩も數多昇進し昇殿を許されしもありき。されば或人の申されしは、「公家の御世に復りぬるかと思ひしに、なかなか尙武士の世になりぬ。」とぞありし。

―神皇正統記―

七　吉野山

藤岡作太郎(一)

景色よき地には歷史上のゆかしさなく、歷史上にゆかしき地には景色に風情なきものの世には多かるに、景色と歷史とを兼ね備ふる、これ吉野が天下無雙の名區たる所以なるべし。

抑、大和は人皇以來最も古く開けし國なれば、隨つてこの地も山間の僻地ながらよく世に知られけらし。南和及び紀伊は木材に富みたる所、それを都に運ぶには、先づこの地に集めけん。年々に大宮に參りて、毛の荒物、毛の和物を貢ぎける國栖といふ山人も、このあたりにや住みけん。

世稍降りては、虎を野に放つと謠はれ給ひし飛鳥淨御原の帝が世を避けて風雲に乘ぜん勢を養ひ給ひし所。天女が天降り、袖飜し舞ひて大御心を慰め奉りぬといふ五節の舞の起原は、袖振山にその名を留めたり。葛城の神を役して大峰を開きたりといふ。役行者は熊野より分入り、醍醐寺の開祖たる聖寶僧正は此所より大峰に分入りしなるべし。爾來大峰を奧院とし、吉野を本院として、參詣する者跡を絕たず、金峰山寺の

(一)第四十代天武天皇。天皇の宮を飛鳥の淨御原といつた。
(二)中古十一月常寧殿で行はれた舞。
(三)奈良縣吉野郡。吉野山中の一峰。天武天皇のお琴に合せて天女が羽衣を五たび飜したといふ山。
(四)奈良縣葛城山の一言主神。
(五)吉野の中央を走る山脈。
(六)名は小角。文武天皇の頃の人。葛城山の巖窟にゐること三十餘年。
(七)京都市伏見區醍醐にある。
(八)讃岐の人。延喜九年(一五六九年)七十八歳で寂した。
(九)吉野山にある。天台宗。昔は

山僧は南都、北嶺と肩を比べぬ。

源廷尉が昨日に變る今日の恨、屋島に寵臣の兄を失ひしは傷ましけれど、勝利に誇りし時なり。今その弟を失ふ。失意落膽の時、英雄の涙そもいかなりけん。

その後數世、建武中興の政亂れて、吉野朝五十七年、かゝる山中を都と定め給ひけるよ。花咲き花散る時、聖帝の思、月盈ち月虧くる時、百官の涙。かゝる哀は古に見ざる所、後の世にもまたありなんや。延元の帝の御製に、

都だに寂しかりしを雲晴れぬ
よし野の奥のさみだれの空。

村上義光は大塔宮に代りて骨を櫻の蔭に埋め、楠木正行は君に名殘を惜しみて雲の中より出づ。草木無情、春に榮ゆる事その後幾たびぞ。運命の寵兒豐太閤は將卒妻子を率ゐて此所に豪遊し杯を

(一)奈良(興福寺)。
(二)比叡山(延暦寺)。
(三)檢非違使尉源廷尉。義經。
(四)佐藤繼信。陸奥の人。義經に事へた四天王の一。
(五)佐藤忠信。繼信の弟。四天王の一。
(六)第九十六代後醍醐天皇。
(七)名は彦四郎。信濃の人。吉野朝の忠臣。
(八)後醍醐天皇の第三皇子護良親王。

擧げ花に對して氣を吐く事千丈、古の英雄が失敗の跡をや笑ひけん。

大僧正行尊は「花より外に知る人もなし。」と知己の得難きを恨み、西行法師は「やがて出でじと思ふ身を。」と言ひて妄語の誹をや得けん。獨り天下の名所を探る蕉翁が風流、母に侍して一生の望足れりとする山陽が孝行。その名所を記する事、質にして要を得たるは益軒が筆、鈴の屋が菅笠日記なども永く人に忘れられざらん。一句にして吉野を盡せるもの、名所としては貞室が

これは〳〵とばかり花の吉野山。

舊跡としては支考が

歌書よりは軍書に悲し吉野山。

などありかばかり名だたる地にして、古人の筆の至れり盡せるを、今更に我等が拙き筆にまた何をか言はん、何をか記さん。

(一)天台座主。長承四年(一一七九五年)寂、年七十九。
(二)「もろともにあはれと思へ山櫻、花より外に知る人もなし。」(金葉集)
(三)「吉野山やがて出でじと思ふ身を、花散りなばと人や待つらん。」(新古今集)
(四)和州巡覽記。
(五)本居宣長の號。
(六)安原氏。俳人。延寶元年(一三三三年)歿、年六十四。
(七)名称氏。俳人。蕉門十哲の一。享保十一年(一三八六年)歿、年六十七。

(一)小説家。名は錄彌。群馬縣の人。昭和五年歿、年六十。
(二)兵庫縣神戸市の中央。今は湊川遊園地となつてゐる。
追懷　過ぎた事を思ひかへすこと。
迂して　遠まはりして。
(三)大阪府（河内國）南河内郡赤阪村。
(四)同郡東條村。共に金剛山の西方で、正成の奮戰した城のあつた所。
峻險を攀ぢる　けはしい山を登る。
(五)南河内郡。
(六)金剛山あたりの谷水を合せて大和川に注ぐ川。

自修文

楠公の遺跡

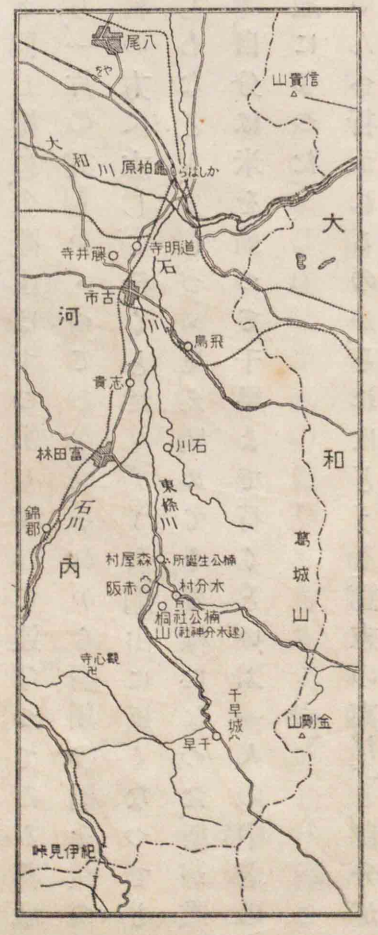
田山花袋(一)

嘗て湊川(二)の古戰場を弔つた時、自分はつく〴〵正成の死を思ひ、義貞の死を思ひ、吉野朝の運命のはかないのを思つて、前の海の暗くなるのも知らずに、長い間追懷に耽つた。追懷の餘り、自分は遂に路を迂して河内に入り、赤阪(三)、千早(四)の遺跡を訪ひ、金剛の峻險を攀ぢて、櫻雲深き吉野山に、吉野朝五十年の悲劇の跡を弔はうと決心した。そして神戸の宿を出た。

始めて懷かしい金剛山の翠色に接したのは、柏原(五)の停車場をおりて、石川の長橋をこれから渡らうとした時であつた。この日はよく晴れてゐて、この頃の空にかゝりがちな霞も、何時もの樣に深くはかゝらず、美しい日の光が、きら〴〵とその山の一面に輝きわたつて、空氣の加減であらうが、どうかすると、秋の初の空ではないかと疑はれる程であつた。じつと見ると、ふは〴〵した

(一)南河内郡道明寺村。眞言宗の尼寺。
絲遊　かげろふのこと。

雲が、半腹よりも少し上かと思ふあたりに、面白くたなびいてゐて、その緣が金色の樣に、美しく日の光に輝いてゐる。けれどこの雲も、歩いて行くうちにだん〴〵形が變つて來て、道明尼(一)寺の前に來た頃には、ちやうど吹流(ふきながし)の旗の樣になつて、今は早その項上近くまで靡いて行つた。風の麥の葉末を動かす程もなくて、絲遊(いとゆう)がぎら〴〵と菜の花の畑の上に漂つてゐる樣は、何とも言へぬ程長閑に感じられた。自分は絶えず金剛山に眼をそゝぎながら、色々な事を考へつゝ歩いた。



(一)南河内郡藤井寺村。正平二年楠木正行が此所の葛井寺で足利方を破つた。
殊勝　けなげ。神妙。
駈悩ます　敵陣に駈入つて敵を苦しめる。
(二)南河内郡富田林町。
黎明　よあけがた。
(三)金剛山の北。
(四)富田林の町を東へ出るとすぐ石川の橋を渡ることになる。
(五)南河内郡。
篤志　よい心がけ。
得々として　いかにも自慢さうに。

藤井寺を過ぎて、正行が殊勝にも兵をこの間に出して、幾たびとなく足利の大軍を駈悩ました事などを思ひ、その夜は有名な古戰場富田林の寂しい旅籠屋に一泊したが、翌日まだ黎明の頃に其所を立つて、次第に金剛山の麓の方へ〳〵と進んで行つた。

昨日と同じ様に、金剛山はすつかり晴れて、連なつてゐる葛城山にすら、一片の雲もかゝつてゐない。それから石川の橋を渡つて、森屋村の方へ志して行くと、だん〳〵金剛山に近くなつて、もう山のしわなども、少しづゝ見え始めてくる様になつた。所が或道の角で、自分は米を擔つて千早まで行くといふ一人の中老の男と道連になつた。

「楠公さんへ行かれるのか。それはどうも篤志の事だ。」と、自分が千早へ行くのであるといふ事を聞いて、彼はさも〳〵嬉しげに口を開いた。そして行く〳〵色々と楠公さんの事を、自分の親でもあるかの様に、得々として語り聞かせた。楠公さんは何でも

(一)赤阪村の大字である二河原邊のなまり。
(二)赤阪村の内。
(三)恩地左近太郎。楠木四天王の一。
たくらむ　くはだてる。

尋常人ぢやない。楠公さんの赤阪の城にゐられる時には、城には水がないからといつて、にからみの城から天狗が水を運んで行つたといふ事だ。それ、こつちを見なさい、煙の立つてゐる山の所に、ちよつと瘤の様な山があらうが、……あれがその、にからみの城と言つて、あすこには楠公さんの使つてゐる天狗が、どれ程ゐたか知れないといふ事だ。……いゝや、今でもまだその天狗殿が殘つてゐて、どうかすると、夜なんどは姿を變へて村へ出て來て、楠公さんの話をして聞かせるさうだ。それからそのそばに少し寄つて、丘見た様になつてゐる所が見えよう。あれは桐山の城と言つて、此所には家來の恩地といふ人を籠めて置いて、三方から敵を圍んでしまふ様にたくらんだといふ事だ。何でも楠公さんは尋常人ではない。」

「今少し行つたら、赤阪の城が見えよう。」と、その男は森屋村の入口の水車の懸つてゐる橋の所でかう言つたが、一二町行くと、果

障壁　かこひのかべ。

(一)和泉と河内。
(二)赤阪村の大字。

地の利　土地の形勢のよいこと。孟子に「天時不如地利、地利不如人和。」とある。

して障壁を立てた様な、いかにも城の址とも思はれる様な高い平な丘が見え始めて、その上には、菜の花が毛氈をかけた様に、幾段にも美しく階段を作つてゐる。自分はそれが赤阪の城址だといふ事を聞いて、非常に懷かしい心地がしたが、その城址に登つて、遙かに泉河二州の平野を見わたしたのは、それから水分の楠公社に詣で、楠公生誕所の址を尋ねて、板を立てた様な坂を尙一登りした後である。城址といふのは、さして廣い所でもないが、流石は名將の眼識で選んだ程あつて、その地の利に富んでゐる事は、自分等が見ても成程とうなづかれるばかりである。前は一望千里と言はれる廣々とした平原で、後は金剛山の峻嶺が幾重ともなく重り合つてゐて、その中を千早に通ふ一筋の道が、山を越えつ川をめぐりつして、遙々とついてゐる。であるから、にからみ、桐山の二城と壘を連ねて、互に相應援したならば、敵は容易にこの赤阪の城下に押寄せる事は出來なかつたに相違ない。けれど

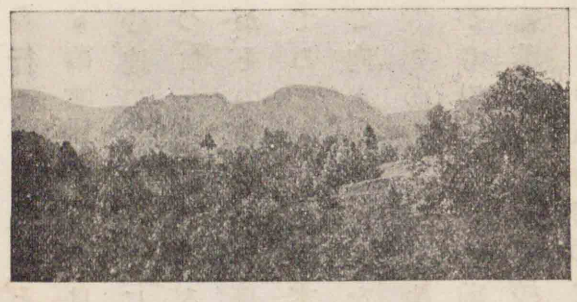
本丸　城郭の一部で、全城郭中最も主要な箇所。

奇兵　敵の不意に乘じておそひかかる兵。

孤城　一つだけで援けのない城。

大義を唱へる　君國に對する臣民の義理を唱へる。

も開いてゐるだけに、ことによると攻落される憂はないでもないから、正成はそれを慮つて、本丸を千早の山奥にと築いたのであらう。千早は其所から五十町程山奥で、道といつてはほんの一筋道で、右も左も仰ぐばかりの高山に圍まれて、それは〳〵谷間の奥の奥と言つた様な、極めて險しい所であるから、どれ程多人數で攻圍んでも、何の功をも奏する事が出來なかつたのである。



赤阪城址

自分は赤阪の城址に立つて、正成が屢、奇兵を出して敵の大軍を惱ました様やら、城の遂に支へられぬのを覺つて、火を城に放つて千早の山奥に隱れた事やら、天下の兵をこの一孤城に引受けて、孤立大義を唱へた様の、どんなに雄々しかつたかといふ事

やらを、久しくなるまで思ひやつたが、遂に思ひきつて、そのまゝ千早の古址へと向つた。

行つて見ると、その村は、これが有名な千早かと驚かれるばかりの寒村で、自分はなんだか、秩父(一)の山奥へでも迷ひ入つた樣な心地がした。村中には一道の清溪が潺湲と流れてゐて、水車やばつたりなどが到る所に掛けられて、さも面白げにめぐつてゐるが、その兩岸に茅葺屋根の粗末な家が、四五十軒許歷落と連なつてゐて、所々には木挽小屋などもまじつてゐるのが見える。そして向ふの山で木を伐る音が、丁々と雲中に響いて聞える。

この樣な所で、よくも八十萬の兵を拒ぐ事が出來たと思ひながら、駄菓子屋の前の土橋を渡つて、少し前に教へられた村人の言葉通りに、小學校の前から、麥畑や菜畑の段をなしてゐる間を、てく〳〵と登つて行つた。すると、間もなく一輪の塔の立つてゐる坂の登口の所へ出て、尙其所を一町程登ると、山の半腹に少し

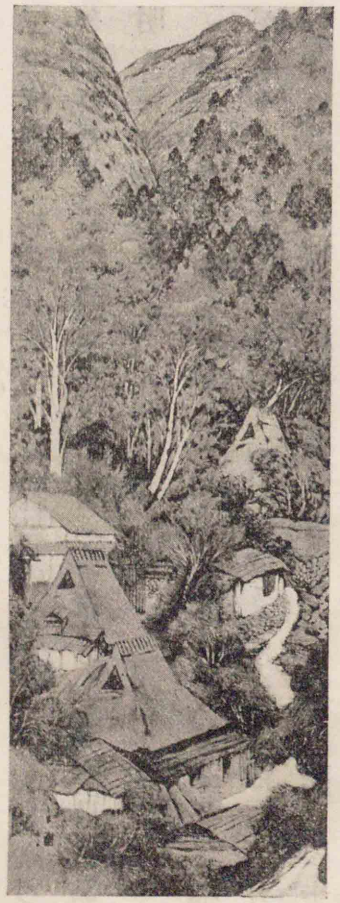
(一)埼玉縣秩父郡にある一帶の連山。

ばつたり　水車の一種。

歷落　入りまじつてならぶこと。

一輪の塔　基石の上に一つの圓い石を置いて上に笠石をのせたもの。

く廣々とした所があつて、其所が卽ち有名な千早の城の址であつた。自分はこの傍に祀られてある楠公祠の前に禮拜して後、その城址を彼方此方とさまよひ歩いた。誠に天險と言つてもこれ程天險の所はあるまいと思はれる程で、これではいくら大兵が攻寄せても、容易に攻落す事が出來なかつたのも無理ではないと思つた。けれども地理の上から考へて見ると、正成が此所に籠つたのは、ちやうど土龍が穴の中に引つこんだのと同じ事であるが、それも據なかつた事であらうと自分は思つた。



千早村（本多貞翠筆）

天險　自然の要害。

據ない　いたし方がない。

首塚　首を埋めた場所のしるしの塚。
榛莽　亂れ繁つた草木。
(一)正成の第三子。正行の弟。元中年中歿。
末葉　末孫。
(二)和田氏。男山の戰に利なくて募兵の爲歸國したが、遂に病死した。

首塚やら、屋敷址やらを普く探つて、また更に一歩二歩登つて行くと、非常に風情のある老松が幾本となく茂つてゐて、道はその間を金剛山へと登つてゐる。自分はこの道を少し曲らうとして、それとなく、傍の榛莽の中に埋められた樣になつて、古い石の玉垣で圍まれた一基の圓い墓石の、しよんぼりと立つてゐるのを認めたから、誰の墓かと近寄つて見ると、其所には「楠(一)正儀墓。」と明らかに記されてある。

自分は急に悲しくなつた。それは、今この墓を見て、楠氏の末葉が微々たる有樣になつてからも、どんなに吉野朝に力を致したかといふ事に想ひ到つたからで、日本全國の勤王の士が、大方敵軍に降つてしまつた後までも、正儀、正忠(二)等が纔かにこの千早を保つて、始終正義の爲に節を變へなかつたのを思ふと、自分は殆ど涙をこぼさずにはゐられなかつた。殊に歴史ではこの正儀が一度敵軍に降つたといふ事を惡しざまに記して、父祖の志を辱

おとしめる　見くだす。
苦肉の計　自分の身をくるしめて敵をあざむくはかりごと。
幾百年を閲した老松　幾百年を經た老松。
(一)全三卷。東京博文館發行。
(二)第九十六代後醍醐天皇。
(三)權中納言。元弘二年(一九九二年)北條氏の臣に殺された。
(四)藤原氏。才學があつたが、元弘二年北條氏に害せられた。
(五)藤原氏。また才學があつたが、元弘二年害せられた。
一途

しめた者であるなど、一概におとしめて論じてあるが、しかし、それは眞の心ではなくて、吉野朝の振はぬのを慨歎した餘り、色々と思案した結果、唯ほんの一時の方便に、敵軍に降つたのではあるまいか。そして若しそれが果して一時の方便であつたのに、その志も行へず、その苦肉の計も遂げられず、徒に不忠不孝の者と後に嘲けられたのであつたなら、正儀の口惜しさはどんなであらう。自分の涙は愈、溢れた。

頭上では幾百年を閲した老松が、冬の初の時雨の樣な寂しい音を立ててゐる。自分はその悲しい寂しい音を聞きながら、つくづくと六百年前の事に思ひ耽つた。

——花袋紀行集(一)——

八　阿新丸　その一

日野中納言資朝(五)なり。各死罪に行はるべしと評定一途に定まつて、さる程に、君の御企(二)を申し勸めけるは、源中納言具行(三)、右少辨俊基(四)、

(一)正中二年。(一九八五年)
(二)本間宗忠。
(三)京都市右京區御室。眞言宗御室派の本山。
冥途

先づ去年より佐渡國へ流されておはする資朝卿を斬り奉るべし。(一)と、その國の守護本間山城入道(二)に下知せらる。この事京都に聞えければ、この資朝の子息邦光の中納言、その頃は阿新殿とて歳十三にておはしけるが父の卿囚人になり給ひしより、仁和寺邊に隠れて(三)をられけるが、父誅せられ給ふべき由を聞いて、「今は何事にか命を惜しむべき。父と共に斬られて冥途の旅の伴をもし、また最後の御有様をも見奉るべし。」とて、母に御暇をぞ乞はれける。

母御頻りに諫めて、「佐渡とやらんは人も通はぬ怖しき島とこそ聞ゆれ。日數を經る路なれば、いかんとしてか下るべき。その上、汝にさへ離れては、一日片時も命存ふべしとも覺えず。」と、泣悲しみて止めければ、「よしや伴なひ行く人なくば、いかなる淵瀬にも身を投げて死なん。」と申しける間、母、いたくとゞめば、また目の前に憂き別れもありぬべしと思ひわびて、力なく、今まで唯一人附添ひたる中間

を相添へて、遙々佐渡國へぞ下されける。

「路遠けれども乘るべき馬もなければ、履きも習はぬ草鞋に、菅の小笠を傾けて、露分けわくる越路の旅、思ひやるこそ哀なれ。都を出でて十日餘りと申すに、(一)越前の敦賀の津に著きにけり。これより商人船に乘りて、程なく佐渡國にぞ著きにける。人してかうと言ふべき便りもなければ、自ら本間が館に至つて、中門の前にぞ立ちたりける。をりふし僧のありけるが立出でて、「この内への御用にて御立ち候か。またいかなる用にて候ぞ。」と問ひければ、「阿新殿」これは日野中納言の一子にて候が、この頃斬られさせ給ふべしと承つて、その最後の様をも見候はん爲に、都より遙々と尋ね下りて候。」と言ひもあへず、涙をはら〳〵と流しければ、この僧心ありける人にて、急ぎこの由を本間に語るに、本間も岩木ならねば、さすがに哀にや思ひけん、やがてこの僧を以て持佛堂へ誘ひ入れて、踏皮、はゞきぬがせ、

(一)福井縣敦賀郡敦賀町。日本海岸第一の良港。

おろそかならぬ體

足洗ひて、おろそかならぬ體にてぞ置きたりける。

「阿新殿これを嬉しと思ふにつけても、同じくは父の卿を疾く見奉らばや。」と言ひけれども、今日明日斬らるべき人にこれを見せては、なかなか冥途の障ともなりぬべし。また關東への聞えも如何あらんずらんとて、父子の對面を許さず、四五町隔てたる所に置きたれば、父の卿はこれを聞きて、行方も知らぬ都に如何あらんと思ひやるよりも尙悲し。子はその方を見やりて、浪路遙かに隔たりし鄙の住居を思ひやつて、心苦しく思しつる涙は更に數ならずと、袂の乾くひまもなし。これこそ中納言のおはします牢の中よとて見やれば、竹の一むら茂りたる所に堀掘廻らし、塀塗つて、行通ふ人も稀なり。情なの本間が心や。父は禁牢せられ、子は未だ幼し。たとひ一所に置きたりとも、何程の怖かあるべきに、對面をだに許さで、まだ同じ世の中ながら生を隔てたる如くにて、亡からん後の苔の下思寢

うたてし

に見ん夢ならでは、相見ん事も有難しと、互に悲しむ恩愛の父子の道こそ哀なれ。

五月二十九日の暮程に、資朝卿を牢より出し奉りて、「遙かに御湯も召され候はぬに、御行水候へ。」と申せば、はや斬らるべき時になりけりと思ひ給ひて、「嗚呼、うたてしき事かな。我が最後の樣を見ん爲に遙々と尋ね下りたる幼き者を、一目も見ずして果てぬる事よ。」とばかり宣ひて、その後は曾て諸事につけて言葉をも出し給はず。今朝までは氣色しをれて、常には涙を押拭ひ給ひけるが、人間の事に於ては、頭燃を拂ふ如くになりぬと悟つて、唯綿密の工夫の外は、餘念ありとも見え給はず。夜に入れば、輿さし寄せて乘せ奉り、此所より十町許ある河原へ出し奉り、輿

日野資朝（菊池容齋筆）

頌

かき据ゑたれば、少しも臆したる氣色もなく、敷皮の上に居直つて、辭世の頌を書き、筆をさしおき給へば、斬手後へ廻るとぞ見えし、御首は敷皮の上に落ちて、むくろは猶坐せるが如し。この程常に法談なんどし給ひける僧來りて、葬禮形の如く取營み、空しき骨を拾ひて阿新に奉りければ、阿新これを一目見て、取る手もたゆく倒れ伏し、「今生の對面終にかなはずして、變れる白骨を見る事よ。」と、泣悲しむも理なり。

(一)和歌山縣伊都郡。紀ノ川の南岸。眞言宗古義派の總本山金剛峰寺の別稱。

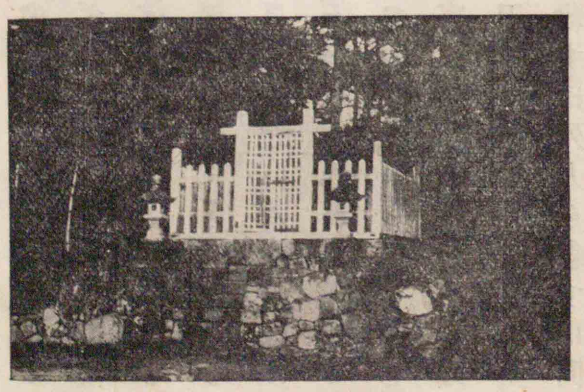
九　阿新丸　その二

阿新未だ幼稚なれども健氣なる所存ありければ、父の遺骨をば唯一人召使ひける中間に持たせて、「先づ我より先に高野山(一)に參りて、奥の院とかやに納めよ。」とて、都へ歸し上せ、我が身は勞る事ある由にて、尙本間が館にぞ留りける。これは本間が情なく父を今生に

遠侍

て我に見せざりつる鬱憤を散ぜんと思ふ故なり。かくて四五日經ける程に、阿新晝は病の由にて終日に臥し、夜は忍びやかにぬけ出でて、本間が寢所なんどこまぐに窺うて、隙あらばかの入道父子が間中に一人刺殺して、腹切らんずるものをと、思ひ定めてぞ狙ひける。

或夜雨風烈しく吹いて、宿直する郎等どもも皆遠侍に臥したりければ、今こそ待つ所の幸よと思ひて、本間が寢所の方を忍びて窺ふに、本間が運や强かりけん、今夜は常の寢所を變へて、いづくにありとも見えず。また二間なる所に燈の影の見えけるを、これは若し本間入道が子息にてやあるらん、それなりとも討ちて恨を散ぜんと、



資朝の墓

左右なく

究竟の事

ぬけ入りてこれを見るに、それさへ此所にはなくして、中納言殿を斬り奉りし本間三郎といふ者ぞ、唯一人臥したりける。よしやこれも時にとつては親の敵なり、山城入道に劣るまじと思ひて、走り掛らんとするに、我は元來太刀も刀も持たず、唯人の太刀を我が物と頼みたるに、燈殊に明らかなれば、立寄らばやがて驚き合ふ事もやあらんずらんと危みて、左右なく寄り得ず、如何せんと案じ煩うて立ちたるに、をりふし夏なれば、燈の影を見て、蛾といふ蟲の數多明障子に取附きたるを、すはや究竟の事こそあれと思ひて、障子を少し引きあけたれば、この蟲數多内へ入りて、やがて燈をうち消しぬ。今はかうと嬉しくて、本間三郎が枕に立寄りて探るに、太刀も刀も枕にあつて、主はいたく寝入りたり。先づ刀を取つて腰にさし、太刀を抜いて胸元にさし當てて、寝たる者を殺すは死人を殺すに同じければ、驚かさんと思ひて、先づ足にて枕をはたとぞ蹴たりける。蹴

素意

られて驚く所を、一の太刀に臍の上を疊までつと突通し、返す太刀に喉笛刺斬つて、心靜かに後の竹原の中にぞ隠れける。

本間三郎が一の太刀に胸を通されてあつといふ聲に、番衆ども驚き騒ぎて、火を點してこれを見るに、血のつきたる小さき足跡あり。「さては阿新殿の仕業なり。堀の水深ければ、木戸より外へはよも出でじ。捜し出でて打殺せ。」とて、手に〳〵松明を點し、木の下、草の蔭まで、残る所なくぞ捜しける。

阿新は竹原の中に隠れながら、今はいづくへか遁るべき。人手に掛らんよりは、自害をせばやと思はれけるが、憎しと思ふ親の敵をば討ちつ。今はいかにもして命を全うして、君の御用にも立ち、父の素意をも達したちんこそ、忠臣、孝子の義にてもあらんずれ。若しやと一先づ落ちて見ばやと思ひ返して、堀を飛越えんとしけるが、幅二丈、深さ一丈に餘りたる堀なれば、越ゆべき様もなかりけり。さら

ばこれを橋にして渡らんよと思ひて、堀の上に末靡きたる吳竹の梢へさら〳〵と登りたれば、竹の末堀の向ふへ靡き伏して、やすやすと堀をば越えてけり。夜は未だ深し、湊の方へ行きて、船に乘つてこそ陸へは著かめと思ひて、たどる〳〵浦の方へ行く程に、夜もはや次第に明放れて、忍ぶべき路もなければ、身を隱さんとて日を暮し、麻や蓬の生茂りたる中に隱れゐたれば、追手どもと思しき者ども、百四五十騎馳散つて、「若し十二三許なる兒や通りつる。」と、路に行會ふ人毎に問ふ音してぞ過行きける。

阿新その日は麻の中にて日を暮し、夜になれば湊へと志して、其所とも知らず行く程に、孝行の志を感じて、佛神擁護の眸をやめぐらされけん、年老いたる山伏一人行會ひたり。この兒の有樣を見て傷ましくや思ひけん、「これはいづくよりいづくをさして御渡り候ぞ。」と問ひければ、阿新事の樣をありのまゝにぞ語りける。山伏これ

擁護

を聞いて、我この人を助けずば、只今の程にかはゆき目を見るべしと思ひければ、「み心安く思し召され候へ。湊に商人船ども多く候へば、乘せ奉りて、越後、越中の方まで送りつけ參らすべし。」と言ひて、足たゆめばこの兒を肩に乘せ背に負うて、程なく湊にぞ行著きける。

夜明けて、便船やあると尋ねけるに、をりふし湊の內には船一艘もなかりけり。如何せんと求むる所に、遙かの沖に乘りうかべたる大船、順風になりぬと悅びて、檣を立て、とまを捲く。山伏手を擧げて、「その船これへ寄せてたび給へ、便船申さん。」と呼ばはりけれども、曾て耳にも聞入れず、船人聲を帆に上げて、湊の外へ漕出す。山伏大きに腹を立て、柿の衣の露を結んで肩にかけ、沖行く船に立向つて、いらたか珠數をさら〳〵と押揉みて、『一持祕密咒、生々而加護、奉仕修行者、猶如薄伽梵。』といへり。況や多年の勤行に於てをや。明王の本誓誤らずば、權現、金剛童子、天龍夜叉、八大龍王、その船此方へ漕返して

聲を帆に上ぐ

肝膽を碎く

たばせ給へ。」と、跳り上り〳〵、肝膽を碎いてぞ祈りける。行者の祈神に通じて、明王擁護やし給ひけん、沖の方より俄に惡風吹來つて、この船忽ちに覆らんとしける間、船人どもあわてて、「山伏の御坊先づ我等を御助け候へ。」と、手を合せ膝を屈め、手に〳〵船を漕戻す。汀近くなりければ、船頭船より飛下りて、兒を肩に乘せ、山伏の手を引いて、屋形の内に入りたれば、風はまた元の如くに直りて、船は湊を出でにけり。

阿新（伊勢寛一筆）

その後、追手ども百四五十騎馳來り、遠淺に馬を控へて、「あの船止れ。」と招けども、船人これを見ぬ由にて、順風に帆を揚げたれば、船はその日の暮程に、越後の府にぞ著きにける。阿新山伏に助けられて、

(一)越後の國府。今の新潟縣直江津町の近くにあつた。

鰐の口の死

鰐の口の死を遁れしも、明王加護の御誓、いちじるしかりけるしるしなり。

——太平記——

一〇　海外飛躍の先驅

「圖南鵬翼何日振、空待扶搖萬里風。」と詠はれた英雄伊達政宗、彼の豪邁な氣魄を以てしては、徒に東北の小天地に跼蹐するを屑しとしなかつたであらう。東北の雄藩仙臺藩の主としての政宗は、近代ロシアの開發者であるペテロ大帝、プロシャ國家の建設者であるフレデリック大王にも比すべき創業の英傑であつた。しかも太閤秀吉の優越な勢力に壓迫されて、彼は一歩關を越える事すらも出來なかつた。しかしながら大鵬は空を翔ける。彼は眼を轉じて雄志を海外に張らうとした。蓋し孤島日本の飛躍は、海外發展の一途あるのみである。秀吉も此所に著眼した。政宗もまた驥足を海の彼方に伸

(一)仙臺伊達家藩祖。輝宗の子。毎年兵を出して四隣を經略した。東北に蟠居して豐臣、德川二氏の脅威であつたが、志を得ずして歿した。時に寛永十三年（一六三六年）、年七十二。

(二)Peter. ロシヤ勃興の英主。（西紀一六七二—一七二五年）

(三)Frederick. プロシャの文武兼備の名主。（西紀一七一二—一七八六年）

べようとしたのである。政宗の臣支倉六右衞門常長は、その重大な使命を依託された傑物であつた。かくして彼は日本人の海外雄飛の尖端に立つた。

伊達政宗

常長は仙臺藩内伊達郡の生れで、支倉家は同地方の名家で、常長はその分家の出であつた。政宗に仕へて固より顯要の地位を擁してゐた人ではなかつた。

政宗が(一)イスパニヤの宣教師ルイス・ソテロの勸告に從ひ、イスパニヤ國王及びローマ法王に向けて使節を派遣しようとした時、彼は擢でられてその任に當つた。抑、政宗遣使の目的が那邊にあつたか、詳細は固より明白でないが、修好、通商、更に基督教の布教及び信仰の問題、これ等が表面の理由であつた事は言ふまで

(一)Espania.（西班牙）
(二)Louis Sotelo.

もない。それぱかりでなく、海外の事情を知り、見聞を廣めようとする必要もあつたであらう。何れにせよ、殆ど當時の日本人に取つて未知の世界に足を踏入れる事は、確かに重大な使命であつた。その大任を託せられた支倉は、一世の異材であつたに相違ない。

慶長十八年(一)九月十五日、仙臺の東北海岸月浦(二)に新造の大船は艤裝された。使節の從臣や南蠻人等一行はすべて百八十名であつた。そして東道の役は宣教師ソテロであつた。

船は太平洋を横斷して(三)メキシコに到著し、(四)アカプルコの港に上陸した。當時メキシコはイスパニヤの領であつた。日本人はこれを「のひすはんや」と呼んでゐた。一行は更に便船に依り大西洋を航して、一六一四年九月イスパニヤに安著し、陸路首府(五)マドリードに入り、イスパニア王に謁して、大いに歡待された。

一行は暫くイスパニヤに滯在した後、翌年八月マドリードを出

(一)一六一三年。（西紀一六一三年）
(二)宮城縣（陸前國）牡鹿郡荻の濱村の大字。石卷附近。
(三)Mexico.（墨亞哥）
(四)Acapulco. 北メキシコ西岸の港市。
(五)Madrid.

發して海路ローマに向ひ、同年十月ローマに入城した。そして十一月三日盛大な謁見の式は開かれた。常長は法王パウロ五世(一)に政宗からの書狀や數多の贈品を呈した。法王は常長に對して、法王自身の肖像畫、法服、珠數等の類を頒ち、更に畫家をして常長の像を描かしめて、これを贈つた。法王としては、宣教の新範圍として新たに日本を開拓し得た事を非常に悅んだのであらう。またローマ市の元老院は常長に壯麗な市民權特許狀を贈つて、これを優遇した。東方異風の使節一行に對して、ローマの上下の士民は、好奇の眼をみはつて歡迎したのであつた。

當時の記錄には、支倉一行のローマ市中を通過した有樣が眼に看る樣に記されてある。

「サン・ピエトロ寺(二)の附近の家の階上の緣では、太鼓や笛の樂を奏し、サン・ピエトロ寺を過ぎる際には、二十八發の祝砲を放つた。次

(一) Paul. V.（西紀一六〇五—一六二一年）

(二) St. Peter's Cathedral. ローマカトリック教の大本山。法王卽位の寺。

に某カルヂナル(一)の家を過ぎた時、カルヂナルや他の僧侶が窓から見物して居つた。これは曾て他に例のない事である。……人の言に依れば、法王も宮中の窓より硝子越にこの行列を見、屢〻『見事なり、見事なり。』と言つて歡喜の情を示し、また天を仰いで、遠邦から異敎徒を導き來つた事に就いて神に謝したといふ。全市の民もまた大いに喜んだ……カルヂナルやその他上流の人人は大使を訪問せしめ、大使の談話は甚だ好評で、皆その事理を解し、能力のある人である事を認めた。……」

支倉六右衞門（ボルゲーゼ家藏）

かくて使節一行は一六一六年ローマを辭して、再び前路を經てイスパニヤに出で、便船を得てメキシコを橫ぎり、フィリッピン(二)に到著

(一) Cardinal. 君牧師。樞機官。ローマ法王の最高顧問。

(二) Philippine.（比律賓）。當時呂宋と呼んでゐた。

(一)二二八〇年。(西紀一六二〇年)

し、其所で便船を待合せて、遂に無事日本に歸著した。元和六年(一)八月廿六日の事である。この支倉常長の前後八年にわたる長途の旅は、當時の日本人に取つて非常な驚異であつた。伊達家の公記錄たる「伊達治家記錄」には、「六右衞門物語の趣、奇怪最も多し。」と記されてある。誠に奇怪最も多しとされた事は、想像するに餘りあるのである。

されどこの海外飛躍の先驅者も、移り變つた時代に容れられなかつた。支倉一行が歸朝した頃から、日本では基督教信仰に對する壓迫が加り、その結果、海外渡航も禁止されるに至つたので、支倉等に依つて開かれた海外的氣運も一頓挫を來し、この遣使の使命も全く水泡に歸したかの觀がある。そして伊達家にも、支倉關係の記錄は何も傳へる所がない。唯彼が將來した繪畫、器具の類が、若干保存されてゐるに過ぎないのである。けれども何等の文獻は留めなくとも、ローマで描かれた支倉自身の肖像畫は、法王パウロ五世の

(一)Borghese. ローマの名家。ボール五世もこの家から出た。

(二)天正十年。(一二四二年)
(三)肥前(長崎縣)の城主。
(四)豐後(大分縣)の城主。
(五)肥前(長崎縣)の城主。
(六)仙臺市の北部なる通町にある。

畫像と共に、立派に後世に殘された。またローマの舊貴族ボルゲーゼ(一)家には、等身大の堂々たる日本武士の肖像畫が飾られてゐる。この像が支倉常長である事は殆ど疑ないといふ。常長は旅中に熱病に惱まされたが、歸朝後僅か二年で病歿した。常長の事蹟は海外渡航以外には餘り傳へられてゐないが、以上の肖像畫が保存されて、三百年前の武士の俤が生き〳〵として今日に傳はつてゐる。その畫像だけでも、海外未知の異域に敢然として赴いた武士の意氣を窺ふ事が出來る。彼よりも約三十年(二)以前に等しくローマに使した有馬(三)、大友(四)、大村(五)三諸侯の使節と共に、一は九州を代表し、他は東北の天地を負うて、我等同胞の爲に萬丈の氣を吐くものである。

今、仙臺市内光明寺(六)の一隅に苔むした一基の墳墓が、支倉常長の墓として傳へられるが、確かな根據がない。一說に、彼は信仰の疑を懸けられて刑戮されたとも言はれ、その晩年は、華やかだつた彼の

生涯を飾るものではなかつた。しかし、勇士多恨の夢は何時かは弔はれる。大正五年ローマ法王の特使は駕を枉げて光明寺を訪れた。想ひ起すのは三世紀前、波濤萬里を隔てた異邦人が堅く握手した當時の壯觀である。かくして歴史に於ける常長の存在は、一層のかがやきを加へた。また大正十三年には贈正五位の光榮に浴し、徒に埋れようとした枯骨は、永遠の生命に蘇つたのである。

(一)劇作家。名は敬二。東京市の人。明治五年生。
(二)埼玉縣の一商工市。
(三)川越市にある天台宗の古寺。天海僧正が住持となつてゐた。作者の訪れたのは明治三十二年の頃。

一一　旅すゞり

岡本綺堂(一)

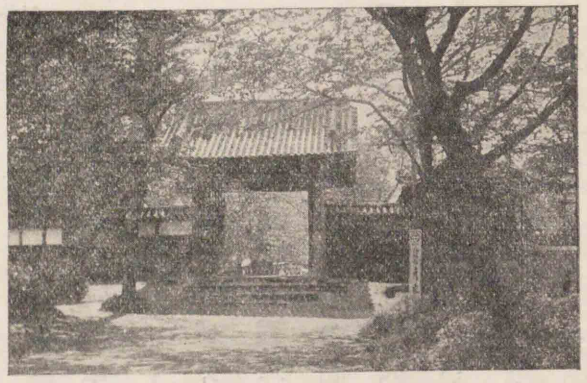
一　心太

川越の喜多院(二)に櫻を觀る。ひとへはもう盛を過ぎた。紫衣の僧は落花の雪を袖に拂ひつゝ行く。

境内の掛茶屋(三)にはいつて休む。何か食べる物はないかと婆さんにきくと、心太ばかりだといふ。試みに一皿を買へば、價八厘。

心太とかしまに銀河三千丈　無名
旅人や山にてしみけて心太(一茶)
心太洗ひて咽喉を走るかな　鐵舟

(一)江戸時代の高僧、慈眼大師。東京上野の寛永寺の開祖。寛永二十年(一六四三年)寂、年百餘歳。
(二)陰暦十月上の亥の日。この日の亥の刻(今の午後十時)に餅を食へば萬病を除くといふ。



喜多院

花をさそふ風は梢を騷がして、茶店の軒も葦簾も一面に白い。わたしは悠然として心太をすゝる。

二　天狗

天海僧正(一)の墓の前で、わたしは少年の昔にかへつた。

廣島の町を行く。冬の日はかげつて寒い。

忽ちに横町から天狗が現れた。足駄を穿いて、矛をついて、どこへ行くでもなく、迷ふが如くに徘徊してゐる。一人ならず、其所からも此所からも現れた。皆十二三歳の子供である。

宿に歸つてきけば、今日は亥(二)の子の祭だといふ。數多の小天狗は

それが爲に出現したらしい。

空はやがて時雨となつた。神通力のない天狗どもは、雨の中を右往左往に逃げて行く。

その父か叔父であらう、四十前後の大男が、ひとりの天狗を小脇にひつ抱へて駈出した。

三　唐がらし

日光の秋八月、中禪寺をさして舊道をたどる。

紅い鳥が青い樹の間から不意に飛出した。形は山鳩に似て、翼も嘴も皆深紅である。案内者に問へば、それは俗に唐がらしといひ、鳴けば必ず雨が降るといふ。

鳥は忽ち隱れて見えず、谷を隔てて二聲、三聲。私たちは恐れて路を急いだ。

仲の茶屋に著く頃には、山も崩れるばかりの大雨となつた。

四　夜泊の船

船は門司にかゝる。小春の海は浪驚かず、風も寒くない。

酒を賣る船、菓子を賣る船、うろ〳〵と漕ぎまはる。石炭を積む女の手拭が白い。

向河岸の下關はもう暮れた。壽永(一)の陵はどの邊であらう。

何を呼ぶか、人の聲が水に響いて遠近に聞える。四面のかゝり船は追々に灯を掲げた。すべて源氏の船ではあるまいか。

わたしは敵に圍まれた樣に感じた。

五　蟹

遼陽(二)城外すべて綠楊の村である。

秋雨の晴れた夕に宿舍の門を出ると、斜陽は城樓の壁に一抹の餘紅をとゞめ、水の如き雲は喇嘛塔を掠めて流れて行く。

南門外は一面の畑で、馬も隱れるばかりの高粱が、俯しつ仰ぎつ

(一) 第八十一代安德天皇の御陵。赤間宮の隣。

阿彌陀寺御陵

(二) 滿洲太子河の左岸にある農産物の集散地。市街には城壁をめぐらしてある。

秋風に亂れてゐる。

村落には石の井があつて、その邊には殊に楊が多い。楊の下には支那人が籃を開いて蟹を賣つてゐる。蟹の大きなのには尺を超えたのもある。

「半江紅樹賣鱸魚。」(一)は王漁洋(二)の詩である。夕陽村落、楊の深い所に蟹を賣つてゐるのも、一種の詩料になりさうな情趣で、今も忘れない。

(一)「江千多是釣人居。柳陌菱塘一帶疎。好是日斜風定後。半江紅樹賣鱸魚。」(眞州雜詩)

(二)清代の詩人。康熙五十年(西紀一七一一年)歿した。

遼陽の柳ちりけり蟹の殼

岡本綺堂筆蹟

遼陽にて

遼陽の柳ちりけり蟹の殼

綺堂

六　三條大橋

京は三條の邊に宿つた。六月初の朝日は賀茂川の流に落ちて、雨後の東山は、青いといふよりも寧ろ黑く眠つてゐる。

この邊で名物といふ大津の牛が柴車を牽いて、今や大橋を渡つてゐる。その柴の上には、誰が風流ぞ、紫の露の滴る菖蒲の花が挾んである。

紅い日傘をさした小娘が橋を渡つて來て、恰も柴車とすれ違つて行く。

所は三條大橋、前には東山、見る物は大津牛、柴車、花菖蒲、繪日傘——京の景物はすべて此所に集つた。

七　またゝび

信濃の奥に踏迷つて、おぼつかなくも山路をたどる夏の夕暮に、路端の草木の深い間に、白點々、さながら梅の花の如きを見た。

後に聞けば、それはまたゝびの花だといふ。猫にまたゝびの諺は

三條大橋（近藤浩一路筆）

豫て聞いてゐたが、その花を見るのは今が初めてであつた。天地蒼茫として暮れんとする夏の山路に、蕭然として白く咲いてゐるこの花を見た時に、わたしはいひ知れぬ寂しさを覺えた。

八　雞

秋雨を衝いて箱根の舊道を下る。笈の平の茶店に休むと、(一)神崎與五郎が博勞の丑五郎に詫證文を書いた古跡といふ立札が見える。

五六日まへに修學旅行の學生の一隊が其所に休んで、一羽の飼雞を盜んで行つたと、店の主婦が甘酒を汲みながら、口惜しさうに語つた。「あいつどろばうだ。」と、三つばかりの男の兒が母のあとに附いて、まはらぬ舌で罵つた。この兒に始めて「どろばう。」といふ言葉を敎へた學生たちは、今頃どこの學校で勉强してゐるであらう。

赤穗義士の立札は雨にぬれてゐた。

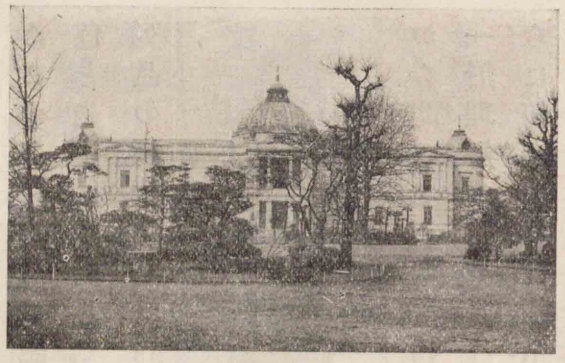
——十番隨筆——

(一)赤穗四十七士の一人。名は則休。

自修文

博物館だより

修學旅行の日程もだん〳〵はかどつて、東京見物も餘す所二日になりました。今日は松本先生に引率されて、上野公園にある帝室博物館の見學を致しました。



表慶館

正門は昔風な大名門の造りで、今では珍しくもあり、貴い門の一つです。門を入ると、其所が大きな廣場になつてゐて、(一)ジェンナーの立像があります。左手の方に見える白い石造の洋館は表慶館と稱へられ、大正天皇がまだ東宮であらせられた頃の御慶事を祝して、その記念の爲に建てられたもので、陳列館になつてゐます。

私どもは、館内の陳列品を順次に見て廻りました。それ〴〵の陳

正門　もと輪王寺本坊の門であつた。

(一)Edward Jenner. イギリスの醫者。種痘法を發明した。(西紀一七四九—一八二三年)

御慶事　明治三十三年の九條節子姫(今の皇太后陛下)との御成婚をいふ。

列品には、要領を得た説明書が添へられてありますので、それだけを見ても、その陳列品がどんな物かゞ、大體わかる樣になつてゐますから、それに記してない事がらで、疑問に思ふ點だけを、色色と先生に説明して戴いて、隨分得る所が多う御座いました。陳列品の區分は、歴史的方面と美術的方面との二部門に大別してあり、各時代別に分類され、學術的に系統立てて並べてありました。平素教室内で先生から聞いてゐる事物でも、かうして直接實物に接して見ますと、一層理解が深められるばかりでなく、自分たちは自分たちながらに、何か新しい暗示を得た樣に思ひました。陳列品の一つ〳〵を申し上げる事は、お便りとしては煩はしいと存じますから、あらましを申し上げる事に致しますが、陳列室は全體で九室、衣服

男子埴輪土偶（東京帝室博物館陳列）

暗示　それとなく與へられる刺戟。

調度　手まはりの道具。

明器　支那古墳の内部に近く置かれた假器で、人物を模したものが多い。

御物　帝室の御藏品。

家什　家の道具。家具。

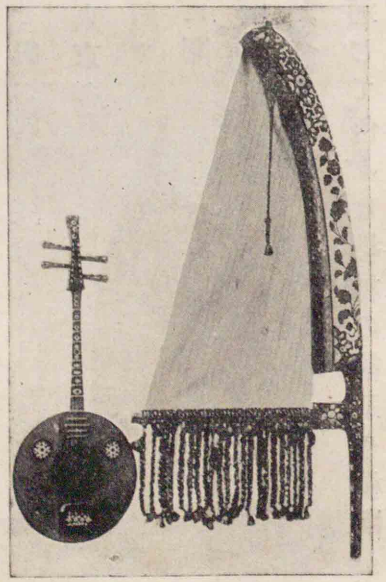
原始土偶　原始信仰に用ひられた偶像。

銅鐸　形は鐘に似て、表面には幾何學的模樣や人物の像を鑄出してある。

圓筒室　二階以上をうち拔いた圓形の廣間。

鳳輦　御即位、大嘗會、行幸などに天皇の乘らせ給ふ輿の一種。

飾調度、繪畫、漆器金石木竹器、陶磁器彫刻、古代遺物（土偶、明器、古鏡、經筒、銅鉾、銅劍、古錢）等の類を、本邦、漢土、古今に類從し、御物あり、國寶あり、個人出品あり、館有品と合體して珍しい陳列品で充されて居りました。中でも第八室、第九室には、日本石器時代の武器、家什、原始土偶、身體裝身品などを陳べ、古鏡類、銅鐸なども見られました。階下中央の圓筒室には、鳳輦が置かれてありました。博物館の藏品はまだ數多くあるのですが、倉庫に收藏されてゐて、必要のある場合に時々陳列替がされるのださうです。館を出ますと、六窓庵や校倉があり、明治天皇や昭憲皇太后の御大葬儀に使用された御轜車や諸具を收めた二棟もありました。



奈良時代樂器（同上）

六窓庵　金森宗和作の名茶席。もと奈良興福寺慈眼院にあつた。
校倉　古代建築の一。三角の木を横に組上げて造つた倉庫。
轜車　葬式の時棺をのせる車。
(一)上野公園内にある。帝室博物館の南。
機構　仕組。組織。
(二)Tunnel.（隧道）
操作　はたらき。仕事をすること。

私どもは館内を一巡してから、廣場に集つて、博物館といふものに就いての御講話を、先生から伺ひました。

この東京帝室博物館には主に古い物が多いのですが、博物館といふものは、必ずしも古い物ばかりを展覽するとは限りません。新しい時代の知識を與へる方面の參考館として、東京(一)科學博物館があります。其所では現代の理化、農工、衛生等に關する説明圖解や、發明品、工藝品などを一目瞭然に示し、ちよつとボタンを押せば電流が通じて、色々な機械の構造や機構が、實物通りに動く樣な部分々々の説明模型が置いてあります。また東京驛近くの鐵道博物館では、(二)トンネルの内部の斷面圖解とか、機關車の構造や操作を示す實物大の模型だとか、信號裝置の模

文官束帶（同上）

(一)東京市麴町區富士見町五丁目。
(二)東京市外戸塚町早稲田大學内。
(三)京都市東山通妙法院前。
(四)奈良市奈良公園内。
(五)三重縣宇治山田市。
(六)大阪市天王寺公園内。
(七)岐阜市岐阜公園内。
中世　四世紀ゲルマン民族の移動の始から十四世紀文藝復興時代まで約一千年間をいふ。

型だとか、その他鐵道業務に關する一切の知識を盡してあります。この外、東京には遞信事務の現狀を示す遞信博物館だの、古今東西の演劇に關する資料を集めた(一)演劇博物館だのがあつて、それ〴〵特色のある設備が施されてあります。京都の恩賜(二)博物館、奈良の帝室(四)博物館、伊勢の徵古館(五)、大阪の市(六)民博物館なども有名です。また岐阜の名和(七)昆蟲研究所の樣に、一學科に專門的なのもあります。

博物館はもと遺物や記念物的性質を帶びた資料を保存する目的から始つたもので、ヨーロッパでは單に工藝品の蒐集所とか、公の場所の裝飾くらゐにしか考へられなかつたものですが、中世の終から近世の初にかけては、古い物の研究が盛に試みられる事になり、十八世紀からは、廣く

武官束帶（同上）

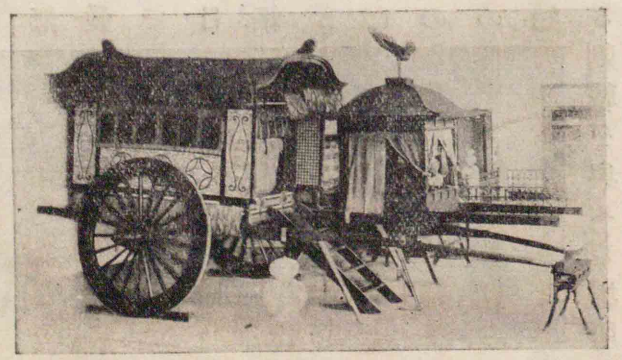
博物館(一ミユージアム)といふ名稱も行はれる樣になりました。國立博物館が始めて出來たのは、佛國のルイ十四世(二)時代で、その後英國でも創められました。それが十九世紀になりましてから次第に擴張され、組織立てられ、各國にも行はれて、今日では色々な部門を分けて、系統的に陳列される事になりました。そして一般に公開して學術研究の資とし、社會教育に裨補(ひほ)する事になりました。內容の上からは、廣く文科理科の區別も立ち、百科の學術工藝、大は天文地理から、小は日用の器財に至るまで、人間文化のすべてを網羅するのです。個人の事蹟を示す目的の物も多く、米國などでは、子供博物館の施設も試みられてゐます。

明智光春の甲冑及び陣羽織(同上)

(一) museum.
(二) Louis XIV. フランス王政の絶頂期を現出し、その文化を世界に誇つた。ベルサイユ宮殿もこの時代に出來た。(西紀一六七一—一七一三八年)

裨補　たすけおぎなふこと。

世界で有名な大きい博物館は、英國のブリチッシュ・ミュージアム(一)、佛國のルーブル(二)、米國のボストン(三)博物館、ドイツのベルリン(四)博物館などです。その他、ドイツのミュンヘン(五)にあるドイツ科學博物館が、暗い地下室に炭坑と同大の模型で石炭採掘の順序を示してあつたり、望遠鏡をのぞいて模型の月や太陽を觀測する仕掛になつてゐたり、その他種々な工夫を凝し、現代科學の萃(すゐ)を集めて社會教育に資し、ベルリンにある人種博物館(六)、工藝博物館(七)、海洋博物館等が一科目にそれぞれ專門の參考品を集め、米國のニューヨーク自然科學博物館が珍しい標本資料と用意周到な陳列方法とで一般知識の向上に貢獻するなど、各國とも異色ある博物館



鳳輦(右)及び唐車(左)(同上)

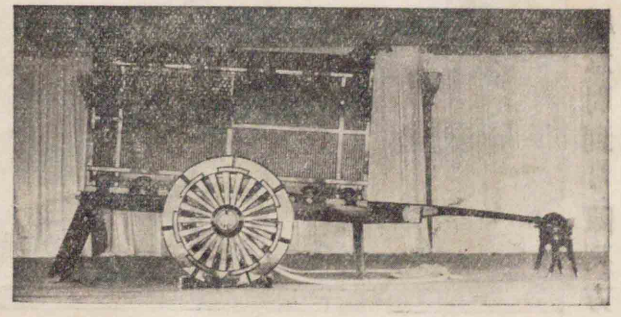
(一) British Museum.
(二) Louvre.
(三) Boston.
(四) Berlin.
(五) Munchen.

萃を集める　最もすぐれた物のみを集める。

(六) 世界の人情、風俗に關する材料を集めてある。
(七) 世界の工藝品を集めてある。
(八) 船、港、海中の動植物等海に關する物を集めてある。

が百を以て數へる程出來てゐます。ブリチッシュ・ミュージアムなどは、一年に百萬人以上の入場者があり、此所の博物館では入場料を徵しますが、其所は無料で入場が出來、英國民はこの博物館を愛し親しみながら、絶えず入場するばかりではなく、入場者の多くは、朝から夕まで終日研究に餘念なく、同一陳列品に就いて、巨細（こさい）にわたつて、時には數日、數週、數箇月に跨がつて熱心にその研究を續け、この博物館に出入しただけで立派な學者になつた人の例も多いのです。博物館は單に過去の物のみを知る場所ではなくて、現在に於ける知識の集積であり、將來の知識向上に對する刺戟を與へる場所なのですから、我が國でも、博物館を利用する事がもつと盛になれば、文化の發達には一層貢獻する所が多くなるのではないかと思はれるのです。外國ではどこの博物館でも、館員に專門の學者を擧げ、普通の陳列室の外に數多の研究室、標本室を設け、部門部門で出版も試み、また幻燈や、映畫、講演などで一般市民に知識を傳へ、社會教育に資する所が多いさうですが、これ等は我が國でも大いに學ぶべき事と思ひます。

巨細にわたる　大きな事から小さな事にまで至ること。



明治天皇御大喪儀用輻車（同上）

先生の御說明は成程と私どもにはうなづかれました。このお話が終つてから、私どもは殘り惜しくも館に別れを告げました。

◎一二　しひの葉

木下杢太郎[一]

しひの葉の雨にぬれたる一枝へ、
せきれいが來て鳴くこゝろ。
山のさ綠、日なた雨。

（一）歌人、醫學博士。本名は太田正雄。東北帝國大學教授。靜岡縣の人。明治十八年生。（椎）

（どこか狐の嫁いりさうな。）
はや鐘の音もたそがれて
すくと飛立つちさき鳥。
そのあとに小枝はゆれて、
一つ〳〵の雨の珠。
その靜かなるしひの葉に、
しめやかに音もたてず
降る雨の細き心よ――
わが庭よ。

せきれい（横山大觀筆）

一三　舟ふな

との「罷り出でたるはこのあたりの者で御座る。このぢゆういづかたへも慰に參らぬ。今日はいづかたへぞ遊山に出ようと存ずる。

遊山

太郎冠者を呼出し申しつけませう。あるかやい。冠者「は。との「誰かある。冠者「お前に。との「念なう早かつた。汝を呼出すは餘の儀でない。今日は遊山に出ようと思ふが、何とあらう。冠者「内々は御意なうても申し上げうと存ずる所に、一段で御座りませう。との「されば西山東山は何時もの事ぢや。どこぞ樣子の違うた所へ行きたい。冠者「されば(一)どこもとがよう御座りませう。あゝ、思ひつきまして御座りまする。西の宮へ參らつしやれませい。との「これが一段の所であらう程に、供の用意を仕れ。冠者「もはや用意致して御座りまする。との「一段ういい奴ぢや。來い、〳〵。して西の宮といふ所は面白い所か。冠者「いやはや、浦山をかゝへまして、上り下りの船などを眺め、殊のほか景の多い所で御座りまする。との「こりや面白からう。やい、此所にいかい川がある。冠者「これは殿樣御存じ御座りませぬか。との「いや知らぬ。冠者「これは神崎(二)の渡と申す。はこれで御座りまする。との「これは徒

(一)兵庫縣（攝津國）武庫郡。大阪と神戸との中間。西宮神社がある。

(二)神崎川の渡。大阪府（攝津國）河邊郡。西の宮の東。

歩渡りにはなるまいが、渡守はないか。冠者「いや御座りまする。」との「あらば急いで呼べ。冠者「畏まつて御座る。」や、何時も此所にをるが。」は、上に見ゆる。ほうい、ふなやい。」との「やい、そこな者。渡ならばなぜにふねと言うて呼ばぬ。冠者「いや、殿様の御合點の參る事では御座らぬ。ふなやあい。」との「や、さ様に呼うだぶんでは來ないぞ。ふねと言うて呼べ。冠者「いや、殿様に申し上げたい事が御座る。あなたの著場とこなたの著場とを、何と申しまするぞ。」との「それな、ふねつきと言ふは。冠者「さ様で御座るによつて、御合點が參らぬ事で御座る。ふなつきなどとは申せ、ふねつきと申す事は御座るまい。それにつきまして、ふななどとは古歌にも御座れ、ふねと申す古歌は御座りますまい。」との「いらぬおのれが古歌だてではあるまいか。さりながらあらば申せ。冠者「畏まつて御座る。」(一)『ふなでしてあとは何時しか遠ざかる、須磨の上野に秋風ぞ吹く。』と申す時には、ふなでは御座りますまい

(一)出所不明。

か。」との「やい、そこな奴。汝が方にあれば、それがしが方にもある。『ほのぼのと明石の浦の朝霧に、島がくれ行くふねをしぞ思ふ。』とあれば、おのれふねではあるまいか。冠者「いや、こなたにはまだ御座りまする。」との「あらば詠め。冠者「『ふな人は誰をこふとかおほしまの、うら悲しげに聲の聞ゆる。』と申す時は、ふなでは御座りますまいか。」との「やい、そこな奴。まだこなたにはある。冠者「あらば詠まつしやれませい。」との「『ほの〴〵と明石の浦の朝霧に、島がくれ行くふねをしぞ思ふ。』冠者「申し殿様。いや、それは最前の御歌で御座りまする。」との「最前のは人丸のあそばした歌、只今のは猿丸大夫の早歌ぢや。冠者「いや、申し殿様。まだこなたには御座りまする。」との「もおじやるまいがの。冠者「いや御座りまする。」との「あらば詠め。冠者「『ふなぎほふ堀江の川のみなぎはに、きぬつゝ鳴くは都鳥かも。』と申す時は、ふなでは御座りますまいか。」との「それは、ふねぎほふであらうがな。冠者「いや、殿様

(一)古今集。傳柿本人麿作。
(二)源氏物語玉鬘の卷。但し、初句「ふな人も」とある。
(三)柿本人麿。藤原朝の歌人。生歿年不詳。
(四)平安時代初期の歌人。生歿年不詳。
(五)萬葉集。

の古歌をなほさつしやれまする事、なりにくう御座りませう。との「それに待ちをろ。」冠者「殿の早つまらせたと見えました。」との「やれさて、いらぬ冠者と古歌だてを申して、殊のほか迷惑を致す事で御座る。や、思ひつけた事が御座る。やい冠者、汝が方にふなといふ古歌が數多なれば、それがしが方にはふねといふ事を謠にまで作りて置かつしやれた。」冠者「御座りませうば、うたはしやれませい。」との「(一)山田やばせの渡船(二)の、夜は通ふ人なくとも、月のさそはばおのづから、ふねもこがれて出づらん、ふなびともこがれ出づらん。」とはないか。

冠者「申し殿様。」との「何ぢや。」冠者「その末は、『ふなびともこがれ出づらん。』とは御座りませぬか。」との「何でもない事、すさりをろ。えゝ。」冠者「は。

―狂言記―

(一)滋賀縣栗田郡。草津の西約四キロメートル。大津への渡航のある所。

(二)同郡老上村。大津への渡航五キロメートル。近江八景の一。この句は謠曲「三井寺」中の句である。

一四　松葉仙人

河内國金剛寺(一)とかやいふ山寺に侍りける僧の、「松の葉を食ふ人は、五穀を食はねども苦しみなし。よく食ひおほせつれば、仙人ともなりて飛びありく。」と言ふ人ありけるを聞きて、松の葉を好き食ふ。誠に食ひやおほせたりけん、五穀の類食ひのきて、やう〳〵兩三年に成りにけるに、げにも身も輕くなる心地しければ、弟子どもにも、「我は仙人になりなんとするなり。」と常は言ひて、今々とて、内々にて身を飛びならひなどしけり。既に飛びて登りなんと言ひて、坊も何も弟子どもに分ち讓りて、「登りなば仙衣を著るべし。」とて、かたの如く、腰に物をひとへ卷きて立出づるに、「我が身にこれより外はいるべき物なし。」とて、年比祕藏して持ちたりける水瓶ばかりを腰に附けて、既に出でにけり。弟子、同朋、名殘を惜しみて悲しび、聞及ぶ人遠近市の如くに集りて、仙に登る人見んとてつどひたりけるに、この僧、片山のそばにさし出でたる巖の上に登りぬ。一度に空へ昇りな

そば

(一)南河内郡（今大阪府）天野村。行基の開基。

とかくして

んと思へども、「先づ近く遊びて、事の様人々に見せ奉らん。」とて、かの巖の上より、「下に生ひたりける松の枝にゐて遊ばん。」と言ひて、谷より生ひのぼりたる松の上四五丈許ありけるに、さかさまに飛ぶ。人人目を澄し、哀を浮べたるに、いかがしつらん、心や臆したりけん、かねて思ひしよりも身重く、力うきく〳〵として弱りにければ、飛びはづして、谷へ落入りぬ。人々あさましく見れども、「これ程の事なれば様あらん。定めて飛揚らんずらん。」と見る程に、谷の底の巖に當りて、水瓶もわれ、我が身も散々に打損じて、唯死にに死ぬれば、弟子、眷屬騒ぎ寄りて、「いかに。」と言へば、いらへもせず、纔かに息の通ふばかりなりけれど、とかくして坊へかき入れつ。此所に集れる人、笑ひのゝしりて歸りけり。さてこの僧、あるにもあらぬやうにて痛み臥せり。とかく言ふばかりなくて、弟子も恥づかしながらあつかふ間、松の葉ばかりにては命生くべくも見えねば、年比いみじく食ひのきつかゞまりゐたり

る五穀をもて、様々いたはり養へば、命ばかりは生くれども、足、手、腰も打折りて、起居もえせず。今は松の葉食ふには及ばず、本の如く五穀貪り食ひて、弟子どもにゆゝしく讓りたりし坊も寶も取返して、かゞまりゐたり。仙道に至る人、たやすからぬ事なり。――十訓抄――

一五　金槐集と山家集

源(一)實朝

一　金槐集

正月一日詠める。

けさ見れば山も霞みてひさかたの
天の原より春は來にけり。

夏の始の歌

春過ぎていくかもあらねどわが宿の
いけの藤浪うつろひにけり。

(一)鎌倉幕府の第三代將軍。承久元年（一八七九年）公曉に弑せられた。年二十八。歌人として名高い。

吹く風の涼しくもあるかおのづから
　山の蟬鳴きて秋は來にけり。

春といひ夏とすごして秋風の
　ふきあげの濱に冬は來にけり。

(一)和歌山縣紀の川口の西南にあたる海濱。風光明媚、歌枕として知られてゐる。

大海の磯もとゞろによる波の
　われてくだけてさけて散るかも。

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や
　沖の小島に波のよる見ゆ。

八大龍王雨やめたまへ。
　おしなべて花のさかりになりにけり
　山の端ごとにかゝるしら雲。

五月雨に水まさるらし宇治橋や
　くも手にかゝる波のしら絲。

晴れやらぬみ山の霧のたえ〴〵に
　ほのかに鹿の聲きこゆなり。

深くいりて神路の奥を尋ぬれば
　またうへもなき峰のまつ風。

西行法師(一)

(一)歌僧。俗名佐藤義清。鳥羽上皇に仕へて北面の武士となつたが、二十三歳の時出家して四方を周遊した。建久元年(一一八〇)寂、年七十三。

心なき身にも哀は知られけり
しぎたつ澤の秋のゆふぐれ。

月前の戀

歎けとて月やはものを思はする
かこちがほなるわが涙かな。

ほとけには櫻の花をたてまつれ
わが後の世を人とぶらはば。

一六　生物に於ける調和

永井潛[一]

金槐集に

世の中は鏡にうつる影なれや
あるにもあらずなきにもあらず。

(一)生理學者、醫學博士。東京帝國大學教授。廣島縣の人。明治九年生。

述懷

うたかた

流轉

(一)「世の中は三日見ぬ間に櫻かな。」(大島蓼太)

といふ歌が載つてゐる。流石は實朝卿の述懷で、非常に面白いと思ふ。詩人が斯樣な考を持つのも無理はないのである。すべて世の中の事物は、時々刻々に移り變るものである。流に浮ぶうたかたの、かつ消えかつ結びて、あるかと見ればなく、なきかと思へばあり、何れか眞、何れか假、實に取止めのない、はかない、たよりない浮世である。この事は昔から宗教家も觀じ、哲學者も論じ、はた詩人も歌つてゐる。或はさ程深い考のない人々でも、をりに觸れて、非常に深く感ずる事がある。佛家のいはゆる流轉といふ語で示されてある樣に、春になると美しい櫻の花が咲く。けれども、咲いたかと思へば、また暫くにして散つてしまふ。散つたかと思へば、何時しか青葉が繁つて紅い實を結ぶが、秋になれば、それもまた落ちつくして跡方もない。いはゆる「三日見ぬ間に櫻かな。」(一)で、唯一つ櫻の花に就いて見ても、實にその榮枯盛衰の常なく、變遷流轉の限りないのに驚かざるを得

造次

ないのである。

かく世相はたよりないもの、取止めのないものではあるが、しかもその無常の裡に自ら有常のあり、動かすべからざる原則のあり、曲ぐべからざる眞理のある事は、吾等の造次も忘れてはならない事である。これは學者も、詩人も、宗教家も皆一齊に認めてゐる所である。然らばこの不動の原則、不易の眞理とは何であるか。これを佛語で言へば因果の理で、科學的に表せば原因結果の法則である。

この原因結果の法則に就いては、少しく説明を要する。單にかういふ原因があつたからかういふ結果が起つたと言へば、極めて簡單である。例へば、今自分が斯樣な問題に就いて此所に述べてゐるが、その原因は何であるかと言ふと、この書物を刊行せんが爲であるといふ樣に考へれば、極めて簡單であつて、成程それに相違ないのである。けれども、一歩進んで更に深く考へて見ると、なか〳〵さ

う簡單なものではない。

自分が今此所に自分の思ふ事を書記すのは、成程書物を著す事が直接の原因であるには相違ないが、しかし、それには先づ自分といふ者がなければならない。その自分が出來る爲には、自分の父母がなければならないし、自分の父母がある爲には、祖父母がなければならない、その祖父母がある爲には、またその祖先がなければならないといふ樣に、唯自分の出生といふ事だけに就いて考へて見ても、斯樣に多くの者に關聯してゐる。況や自分がつまらぬなりにも、斯樣な事を述べ得る樣になつた次第を考へて見ると、子供の時から、多くの先生に就いたり、種々の書物を讀んだりして、それ等の事が相寄つて自分に一定の考を起さしめるに至つたのであつて、斯樣な事をも勘定に入れて見ると、殆ど際限がないのである。更にまたこの書物が出版される爲には、製紙や、印刷や、製本や、其所に無

數の原因が具備されなければならない。かく考へて見ると、實は幾十萬、幾百萬といふ數限りなき原因が相待つて、始めてこの書物を著すに至つたのである。

斯樣に何事によらず、それが成立つ事を深く調べて見ると、原因結果の法則によるものであつて、しかもその原因結果の法則は、極めて紛糾複雜してゐるのである。例へて言へば、恰も張られた網の樣な物で、絲と絲とが互に連絡して、それからそれへと繫がつて居り、一つの目からはまた新しい繫ぎ目が出來て、次第に廣く長く連絡して、數多くの目が出來てゐる。卽ち第一の結目が原因となつて第二の結目が出來、次に第二の結目が新たな原因となつて第三の結目が出來るといふ樣に、因は果となり、果は因となつて、互に離るべからざる密接の關係が成立つてゐるのである。「袖振合ふも他生の緣。」といふ諺は、この點に於て意味深長と言はなければならない。

紛糾

かうした考を以て、宇宙間に於ける現象を觀察して見ると、いはゆる「落花水面皆文章。」(一)で、雲行き水流れ、花散り鳥啼くといふ樣な偶然な出來事であつても、その事の起る爲には、無數の條件が、時と場所とに關して、一定の順序を追つて寄集らなければならない。それ故に、苟もそれ等無數の條件の中、唯一つ缺けても、唯一つ順序が狂つても、最早その事がらは起らないのである。例へば、時計が時々刻刻時を吾等に報ずる爲には、種々な機械が集つて秩序よく働かなければならないのであつて、その機械の齒車の齒が一本缺けても、最早時計は止つてしまふのである。

かく宇宙間に於ける諸の現象は、變遷流轉止む時はないが、しかも、一つとして原因結果の關係に支配されてゐない者はない。卽ち一定の條件が一定の序列を追うて働く事によつて、始めて出來上るもので、更に言を換へて言へば、無數の條件の釣合、卽ち調和の結

(一)朱熹「春日讀書樂」中の句。

果である。

かく觀じ來ると、大宇宙間に行はれる諸現象には、變遷流轉して窮り止む事ない裡に、自ら確乎として動かす事の出來ない原則、易りない眞理の存在してゐる事を、悟る事が出來るのである。これは學問の立場から出立しても、宗教の方面から進んでも、詩人の眼孔を以て見ても、何れにせよ、最後に到達すべき究極の境地でなければならない。有爲轉變の世相に於て、常住不斷の光明を認めるといふのは、畢竟こゝであらうと思ふ。得喪によつて心を惱まさず、形骸を以て思を勞せず、孟子(一)のいはゆる「富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈」といふ事も、かくの如くにして始めて心胸に浮んでくる。

——生物學と哲學との境——

(一)儒者。支那鄒の人。業を孔子の孫子思の門に受けた。周赧王の二十六年(西紀前二八九年)歿、年八十四。

一七　箱王仇に遇ふ

(一)河津祐泰の子曾我五郎時致の小字。祐泰は工藤祐經に殺され、母は曾我の太郎祐信に再嫁した。五郎は當時箱根權現の僧行實の弟子となつてゐた。

(二)工藤祐經。叔父伊東祐親に怨を含み、その子河津祐泰を殺した。

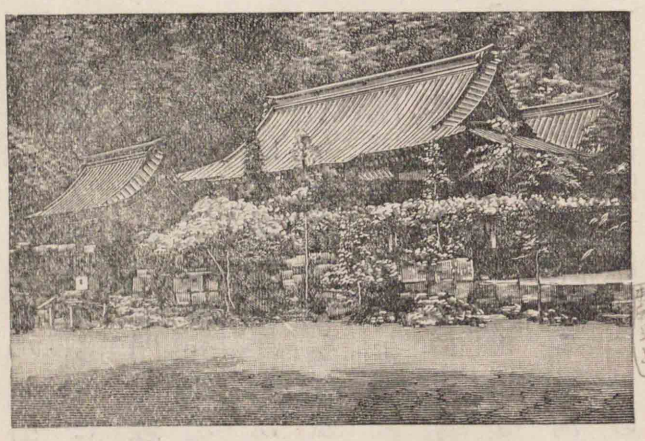
(三)源頼朝。

(四)畠山重忠。武藏國秩父の豪族。

(五)和田義盛。相模國三浦の豪族。

(六)里見義成。

かくて箱王(一)は、御奉幣の時までも人一人も連れず、介錯の僧一人相具し、御座所のうしろに隱れゐて、御供の人々を「彼はたぞ。此はいかに。」と委しく問ひければ、この僧鎌倉の案内者にて、大名、小名の名よく知りたれば、教へけり。されども未だ祐經(二)をばあかさず。あはれ問はばやと思へども、怪しく思はれじとて、のこりの人を問ひまはす。「君(三)の左の一の座はたぞ。」「彼こそ秩父(四)の重忠よ。」「右の一の座はいかに。」「これぞ三浦(五)の義盛なる。」「さてその次は誰人ぞ。」「里見(六)の源太といふ人よ。」「さてその次は。」



箱根神社

「豐島の冠者といふ人なり。」「只今もの仰せらるゝは誰やらん。」「これこ

そは當時聞ゆる梶原平三景時とて、さぶらひどもの鬼神に思ふ者よ。「まためての方に少し引きのきて、半裝束の珠數を持ちて香の直垂著たるは、いかなる人にてあるやらん。」「彼こそ御分たちの一門、伊東のぬし、工藤左衞門祐經よ。御分の父河津殿とは從兄弟なり。御前さらぬ切者。」とぞ教へける。

(一)祐泰は伊豆の河津を領してゐたのでこれを姓とした。

「さてはそれにてありけるよ。この事思ひ寄らで言ふやらん、知りぬれども何事かあらんと、思ひこなして言ふやらんと、何時しか胸うち騷ぎけれど、思ひ寄らざる樣にて、「この者はよきをのこにてありけるや。三十二三にぞなるらん。みづからが父にや似たる。」と問ふ。「少しも似給はず。まさしき兄弟さへ似たるは少し。まして從兄弟に似たる者はなし。年こそ河津殿の討たれ給ひし程なれ。その人のましまさば、四十餘りにてあるべし。これより遙かに丈高く骨太くして、前より見れば胸そり、うしろより見ればうつぶき、側より見れば四角なる大の男にてまし〳〵しが、馬の上、かちだち並ぶ人なし。殊にしゝの上手にて、力の強き事四五箇國にはならびなき大力なり。されば相模の國の住人大庭の三郎が弟、俣野の五郎景久とて、相撲に負けざる大力を、伊豆の奥野の狩場にて、片手を放ちてすまふに、三番勝ちてこそ、いとゞ名を揚げ給ひしが、それを最後にて、歸りざまにあへなく討たれ給ひき。大力と申せども、死の途には力及ばず。」とぞ語りける。箱王は父が昔をつく〴〵と聽きて、今更なる心地して、しのびの涙に咽びける。

(一)大庭景親。
(二)天城山の麓。狩場

やゝありて、我このあひだ祈りし願のかなふにこそあるべけれ。うかゞひよりて、便宜よくば一刀刺し、いかにもならんと思ひ定めて、「御坊はこれにましませ。法師こそ寄らね、わらんべは近く寄りても苦しからず。山寺に住めばとて、人を見知らぬはむげなり。近くよりて見知らん。」とて、赤地の錦にて柄鞘卷きたる守刀を脇にさし隱

かちだち
しゝ
むげ

冥加

まぼる

し、大衆の中をぬけ出でて、祐經がうしろ近くぞ狙ひ寄りける。祐經もしばしの冥加やありけん、梶原三郎兵衛を隔てて、箱王を見つけて、これなるわらんべのまなこざし、河津の三郎に似たるものかな。誠やこの御山には、伊東が孫のありと聞けば、若しこれにてやあるらんと、目を放さずまぼりければ。さうなく寄らざりけり。

祐經尚よく〳〵見れば、まなこの見返し、面だましひ、少しも違ふ所なし。祐經は念誦はててのの後、大衆の中へ立入つて、「伊東入道の孫この御山に候と聞く。いづくの坊に候や。名をば何と申し候ぞ。」と問ひければ、或僧申す様、「御名をば箱王殿と申して、別當の坊にましまし候。」「この頃は里に候か。これに候か。」と問ひければ、「これにこそ。」とて、東西を見めぐらし、「長絹の直垂に、松に藤を縫うて、萌葱の絲にて菊綴して、こなた向に立ち給ふこそ。」と教へければ、されば こそと思ひ、もとの座に歸り、箱王を招きければ、願ふ所と喜びて、祐經が膝近く

方人

寄添ひけり。左の手にて箱王が肩を抑へ、右の手にては髪を搔撫でて、「あつぱれ父に似給ふものかな。今まで見奉らざる事の本意なさよ。わ殿は河津殿の子息と聞くは誠か。兄は男になり給ふか。曾我の太郎はいとほしくあたり奉るか。知らざる者の剛々しく斯様に申すとばし思ひ給ふな。御分の父河津殿とは從兄弟なり。殿ばらにも親しき者とては祐經ばかりなり。見奉れば昔の思ひ出でられて、今更哀に存ずるぞ。急ぎ法師になり、別當につぎ給へ。弟子多しといふとも、祐經程の方人持ちたる人あらじ。便宜をもつて上様へもよき様に申し、師門の訴訟あらば申し立つべし。今より後はいかなる大事なりとも、心をおかず仰せられよ。かなへて奉るべし。わ殿の兄にも斯様に申すと傳へ給へ。父にも添はで、いかに便なくましますらん。むかばき、乘馬などの用の時は承るべし。身貧にして他人に交らんよりは、親しければ常に訪ひ給へ。誠や古き語に、貴きは賤しきが

嫉み、智者をば愚人が憎む。罪障は千載に消えず、報は千劫に絶えず。と申し傳へたり。さても見參の初に、をりふし引出物こそなけれ。また空しからんも無念なり。これを。」とて、懷より赤木の柄に胴金入つたる刀一腰取出し、箱王にこそ取らせけれ。何となく受取れども、箱王は涙に咽びけり。便宜よくば一刀刺さんと思へども、目を放さず、その上大の男の、常に肩に手を置きければ、なまじひなる事をしいだして、こがひな取られて、人に笑はれじと思ひ止りぬ。唯言ふ事とては、「さん候。」とばかりなり。「率爾の見參こそ所存の外なれ。さりながら喜び入り存じ候。里下りのついでには、わ殿の兄十郎殿とうち連れて來り候へ。返す〳〵。」と言ひて立ちにけり。箱王力及ばず止りぬ。

—曾我物語—

引出物

こがひな

率爾

一八　夏の自然

南部修太郎[一]

[一] 小説家。明治二十五年仙臺市に生れた。

景情

よしそれが長閑な春であるにせよ、蕭條たる秋であるにせよ、或は荒涼たる冬であるにせよ、それ〴〵に特色ある自然の景情を求め訪ねるならば、私は其所に幾多の美を見出す事が出來よう。そしてその美に對して、輕重、上下、優劣を附けられない事は、また言ふまでもあるまい。が、その熱情に於て、快活さに於て、雄健な事に於て、私は夏の自然の美を最も好ましく思ふ。

山もいゝ。海もいゝ。川もいゝ。湖もいゝ。また單なる綠蔭もいゝ。夏はすべてに自然の美の豐熟する時である。春の自然を幼年時代に、秋を中年時代に、冬を老年時代に譬へるならば、夏はまさしく自然が若々しい青年時代だと言得られるであらう。あのさえ〴〵と輝きわたる空、あの燃える樣な日光、あの生き〳〵とした草木の綠、あの燒盡す樣な暑さ、あの白く光る浮雲、それ等はすべて青年時代の熱情を、意氣を、快活さを、勇躍を、純眞さを、いかにもふさはしく象徴

理知的

してゐるではないか。

私は明るく潑剌とした夏の自然の景情が好きだ。暑さも厭ふ所ではない。寧ろさういふ中にその特色を思のまゝに發揮する夏の自然の美を訪ねる事は、私に取つては最も好ましく樂しい事である。私はさういふ意味で夏の旅をした。何れも眞夏の、燒きつく樣な暑熱の中の身輕な一人旅であつた。

山

夏の山。不幸にして健康の許さない私は、日本アルプスといふ樣な深山高嶽の旅を試みた事はない。しかし、それでも幾つかは攀登つたが、一番忘れ難いのは淺間山である。一體、夏の自然の中でも、山嶽の美は靜的で、嚴かで、海の熱情的なのに反して理知的である。明るく若々しい青年の感じよりも、一生の酸苦を嘗盡した老の靜けさに落著いた、聖者の姿と言つた感じである。

(一) lava.

大どか

(二) 北海道膽振國樽前岳の北麓にある。

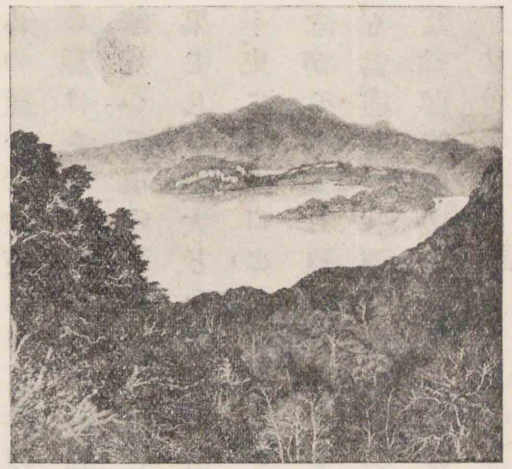
(三) 島根縣（出雲國八束郡。周囲約五二キロメートル。湖畔に松江市がある。

それはもう十年程前の八月の眞晝だつたが、私は友と案内者も連れずに、青年らしい意氣に任せて、淺間登山を試みたのであつた。あの麓から中腹へかけての落葉松や白かばの林の美しさと、底深い靜けさとに強く胸を打たれた二人は熔岩(一)の斜面に惱みながら攀登つて、頂の一角に取附いた時、そして澄みわたつた大氣の中の、果てしなく大どかな眺を擅にした時、その快さと歡ばしさとは……。更に噴火口にたどり著いて、轟きわたる噴煙の響に胸を躍らせながら、底知れぬ火口の奥をのぞきこんだ時、その不安とも恐怖とも言盡せぬ一種の力强い感動は……。二人唯々、自然の偉大で莊重な神祕的の美に、心より敬虔の情を致すより外はなかつた。

湖

夏の湖。私は日本の湖は、北は膽振の支笏湖(二)から、南は山陰の宍道湖(三)まで、殆ど名ある者のすべてを訪ね盡したと言つてもいゝ。湖の

美もどことなく山の美の様に靜的であるが、其所には冷さや、嚴がさや、堅苦しさはない。どこまでも優しく、また何となく濃やかな感がする。そして支笏湖はその幽遠さに於て、濱名(一)湖はその明澄さに於て、十和田湖(奈良麓僊筆)琵琶湖はその廣闊さに於て、宍道湖はその閑雅さに於て、とり〴〵の景情特色を持つてゐるが、私は十和田(二)湖の美を最とする者である。



あの三本木(三)から、路を翠綠したゝる奥入瀬(四)川の溪谷に取つてたどつて行くのも、木曾川や保津(五)川の溪流の美に勝る樣に思はれたが、一歩々々爪先上りのその路がやがて湖畔に出た時、美しい樹間にぱつと開けて見えた十和田湖の姿は、

(一)靜岡縣(遠江國)引佐、濱名の兩郡に跨がつてゐる。周囲約九二キロメートル。
(二)青森縣上北郡奥澤村なる十和田山中にある。周囲約六四キロメートル。
(三)青森縣上北郡。
(四)十和田湖から出て相坂川に合する川。
(五)京都府(丹波國)北桑田郡の山谷から出て、嵐山の麓で大堰川となり、末は桂川となつて淀川に合する。

長きあこがれを醫すのに十分であつた。それは八月の初の、雲といふ程の雲さへ見えない晴れあがつた眞晝であつたが、發動機船に乘つてさへ、小波も立たない、凄いまでに深くたゝへた靜かな湖面を横ぎつた時の、何とも言へぬ朗かさ。澄みわたつた空の紺青と、水の濃藍と、湖岸の木々の鮮かな綠と、それ等が強い午後の日光の中に映え輝く眺は、何といふ美しさであつたであらう。東の湖から中の湖へ、その間に赤松を戴いた山水畫の樣に突兀(一)とした岩石が重り合つて、切つたつた斷崖となつて聳えてゐる千丈幕があるそれは嘗て失望した耶馬溪などに優る美の豐かな景趣であつた。

川

夏の川。その美しさで私の記憶に殘る者は、自然の直中を流れる川よりも、寧ろ都會の中を流れる川に多い。例へば、信濃川にしても、大阪の安治(二)川にしても、とりわけ灯ともし頃から宵のうちにかけ

突兀
(一)十和田湖岸の景勝の名。
(二)淀川の下流。

夜の帳

ての、夜風涼しい都會の川が、その美しさに於て勝れてゐる。

一體、夏の都會といふ者は、晝の燒けつく樣な日光の中に眺める時には、その都會らしい騷音と混雜とが、いかにも荒みきつてゐる樣な感じを與へる。が、夜の帳は、その上の夜氣に露の潤ひさへも持たせて、晝の炎熱を消し、景情の堅さを和げ、暗さの中に濃やかな陰影さへも配合して、その姿を美化してしまふ。そして川がさういふ都會の夜を流れるもので、その川面に人工の美しい灯が映り輝くものなら、好ましい景情の一つではなからうか。

或八月の夜、私は一人で京都の賀茂川べりをそゞろあるいたが、をりから東山の頂には白銀の月が玲瓏と照り、夜風涼しい中に戰ぐ柳の垂葉、兩岸の旗亭の軒に飜る紅提燈、涼船の絃歌、潺湲たる流の音、それ等はいかにも夏の都會らしい夜の風色を作りあげて、川の美としては忘れ難い者の一つであつた。

海

山、湖、川。しかし、夏の自然の美を、最もふさはしく力强く示す者は、やつぱり何と言つても海であらう。その雄健さに於て、その快活さに於て、その熱情的なのに於て、私は夏の海の美を最も好み、最も讃美する。恐らく夏の海程鮮かな變化と、多樣な色彩と、濃やかな陰影とに富む者はないであらう。それは例へば、海峽の朝に、大洋の眞晝に、海水浴場の夕方に、寂しい海邊の村落の夜に、また晴、曇、雨、風、それぞれによつてとり〴〵の美を表現する。實際夏の海程色々の表情を持つ者はない。そして私はまた夏の旅には、海に就いて色々の印象と追憶とを持つてゐる。その中でも、私の最も近い經驗で、夏の海の偉大さに打たれたのは、下關から大連(一)に渡つた、ちやうど二百十日頃の東支那(二)海の航路であつた。あの間の二日は、全く陸影から緣が切れてしまふ。そして船は果の見えぬ海上を、孤影寂しくたどつ

(一)關東州大連市。神戸から海路八六〇海里。
(二)我が琉球列島と支那との間に横たはる海。

て行くのであつた。

晴れてはゐながらも、海は流石に荒模様であつた。でも船は搖られながらも、渺々たる紺碧の波をかき分けて、恰も勇敢な自然の征服者の樣に突進んで行く。が、二千餘噸の船の小さに對して、空は、海は、いかに廣々と偉大な感じを私の眼に與へた事であらう。しかも、明日は大連に著くといふ前日の晝頃から、白波は牙の樣に躍り立ち逆立つて、風は荒み、雨はつぶてを打つといふ劇しい嵐が襲ひかゝつた。刹那に船は波底に吸ひこまれるかと思ふと、次の刹那には白波の牙の頂に躍りあがる。船舷に碎ける轟々たる波の音。マスト(mast.)や張綱に叫ぶ風。空には暗澹とした雨雲が飛んで、見えわかぬ水平線の彼方には、波と雲とが亂舞する。何といふ自然の暴威であらう。凄じき力。怖しき狂亂——。

つぶて

自然は偉大である。しかし、人間も偉大だと私は感じた。思へば自然は、その美を以て我々人間に限りない慰樂を與へる身方である。と共に、その力を以て我々人間を鼓舞激勵する勇ましい敵手である。我々はこの自然と親しみ融合ふと共に、それと戰ひ爭ふ事を忘れてはならないのである。雄々しく勇敢な自然との戰を……。

自修文

瀬戸内海の航路

南部修太郎

ちやうど十二時十五分前、どらがけたゝましく鳴り始めた。

風通しのいゝ甲板の日陰に籐椅子を寄せて、私は見送に來てくれた三人の友だちと靜かに話し合つてゐたのだつたが、その音に私たちはふと詞をとぎつて、互に顏を見合せた。

「さあ、愈、お別れですね。」

何となく氣持の緊張(きんちやう)を感じながら私は言つた。微笑を含んで ゐた三人の顏も不意に改つた。そして殆ど無意識な樣に私たちは同時に立上つた。

緊張(きんちやう)

「ぢや、道中お大事に……。」

「有難う。」

頭をさげ合ひながら交すさういふ詞も、何時になくぎごちなかつた。三人はそのまゝ船梯の方へ歩き出した。

「元氣で行つていらつしやい。」

「大丈夫、十月の末頃にはまた此所へ歸つて來ますよ。」

友にさう答へながらも、見知らぬ異境の支那への旅の行く手を思ひ、暫く懷かしい日本の土を離れる事を考へると、好き好んで企てた旅とはいへ、私は流石に心細かつた。

スクリュー[一]の回轉につれて、船尾に白い泡が立ち始めたかと思ふと、二つ三つ寂しい餘韻を引いた汽笛が、胸底にしみ入る樣に聞えた。

「さよなら……。」

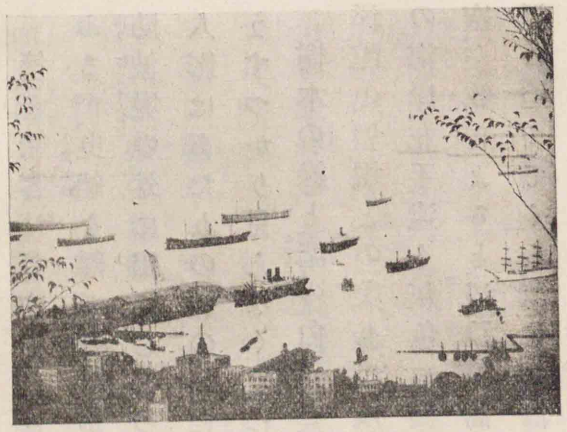
「御機嫌好う……。」

ぎごちない　かくばつてゐる。窮屈を感する。

(一)screw.（推進機）

「ばんざい……。」

向ふに並び立つ人も、手摺に並び立つ人もさういふ詞を呼交し、ハンケチをひらめかせ、帽子を振り、パラソル[一]を頭上高く搖動かした。



神戸港

船は半町、一町と隔つて行く。寂しいバス[二]の餘韻を長く〳〵引いた鈍い汽笛が、また三聲、四聲、海面を掠めて鳴響いた。

眩しいばかりに晴れた眞夏の午後だつた。藍の色深く澄みわたつた空からさし輝く强い日光、その下に織重つた神戸[三]の町は、刻一刻に遠ざかつて行く。別れを惜しむ人たちは、岸壁を端から端へと歩み寄りながら、手や、ハンケチや、帽子や、パラソルなどを振つてゐる。私

(一)parasol.（日傘）

(二)bass.音樂での最低音部。低い聲。

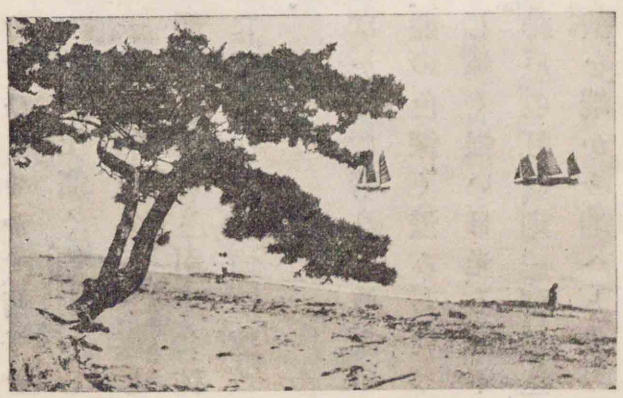
(三)兵庫縣神戸市。岸壁　船を陸地に接近させ、水陸の連絡をよくする爲に設けたもの。

も船尾へ〳〵と歩み寄りながら、手を擧げ、帽子を振つた。

「さよなら……。」

傍の船客たちはまださう繰返してゐるが、曳船を離した船が、何時となく防波堤の外に出てしまつた時、岸壁の人影はあたりの船の影に遮られて、もうすつかり見えなくなつた。

樹木の綠と、渚の白砂と、所々に赤い洋館の屋根との美しい須磨、舞子、明石の海岸、左手遠く灰色に濁つた大阪の空。左舷によると、淡路の島影が漸く間近に迫つてくる。涼しい海風に小波だつてはゐるが、船は小搖ぎもせずに、綠鮮かな內海の波をかき分けながら快走して行つた。



舞子の濱

(一)神戸市の西部。
(二)兵庫縣（播磨國）明石郡の海濱。
(三)兵庫縣明石市。何れも瀨戸內海沿岸の名勝地。
(四)兵庫縣の一部。播磨灘と大阪灣との間に横たはる。周圍一五二キロメートル。

曳船　自分の船をひいてゐた船。
防波堤　波よけのつゝみ。

「ほんとにいゝ航海ですね。」

「全く何とも言へませんな。」

私は左舷の手摺に肩を並べながら、さつき偶然船中で識合つたばかりのTさんと、さうさゝやき合つた。

ばいかる丸(一)——大連までの四日三晩の船路を託すこの船は、新造の氣持のいゝ客船だつた。船には强かつたが、始めて日本の土を離れるといふ私の氣持は、やつぱり何となく寂しいものだつた。唯一人五號といふ船室へはいつて、旅の恙(二)なさを念じながら、私は鞄三つの手荷物を整理した。船窓のカーテンを開いて見ると、淡路の島影がすれ〳〵に見える。靜かな機關の響、舷を掠める波音、それに耳を傾けながら、暫くぼんやり煙草を吸つてゐた。

と、間もなく晝飯の合圖のどらが聞えて來た。

「どう、お出でになりませんか。」

廊下から船室の入口の青いカーテンを引きあげながら、Tさ

(一)大阪商船株式會社の所有船。
恙なさ　無事。
(二)curtain.

(一)徳島縣。
(二)香川縣の一部。瀬戸内海で最も大きな島。寒霞渓の名勝地がある。

んが聲をかけた。

私はTさんと一緒にすぐ前部中甲板の食堂へはいつて行つた。

食堂から上甲板に出て見ると、もう淡路島もうしろに、船は何時となく波靜かな播磨灘に差しかゝつてゐる。右舷に薄紫色に折重つた中國の連山、左舷には遙かに淡路と阿波(一)との綠深い山山、行く手にはくつきり浮んだ小豆島(二)。眞晝の日光は頭上からぎらぎら照りつけてゐるが、涼しい海風に夏服の肌も寒い程だ。

Tさんと籐椅子を並べて暫く話し合つた。が、東京を立つてから幾日かをあわたゞしく過した疲れが出て來たのだらう、何となく眠くなつて來たので、Tさんと別れて、私は船室へ入つた。そして背廣を脱ぎゆるめて、扇風機をかけながら横になると、すぐに眠に落ちてしまつた。

ボーイが午後のお茶を運んで來た物音に眼を覺すと、もう四

(一)bath.(風呂)
(二)香川縣仲多度郡多度津町。

時過だつた。お茶を飲み、バス(一)をこしらへてもらつて一風呂浴びた。流石にすが〳〵しい氣持になる。洋服を著直してすぐ甲板へ出た。船員に聞くと多度津(二)沖だといふ。日は船の行く手、西の方の山々の頂に傾きかけて、なぎ澄んだ海面がきら〳〵と輝いてゐる。その間に二三十艘の帆船が一樣に帆を擧げて、靜かな夕風に乘りながら歸路を急いでゐる。船は絶えず警戒の汽笛を吹鳴しながら、唯波上を滑る樣に帆船の群をよけて進んで行くのだつた。

飛魚（川端龍子筆）

「あら飛魚よ、〳〵……。」

左舷の手摺によつてゐた若い婦人が、五つばかりの男の子の手を引きながら、傍の姉らしい婦人に呼びかけた。

「まあ、どこに、〳〵……。」

姉は洋服姿の子供を抱き上げながら、手摺により添つて、まだ殘光の明るい波上を眺めおろした。

あたりにたゝずみ、或は籐椅子によつてゐた船客たちは、婦人の聲にさそはれて、同時に手摺に駈寄つた。私も同じ様にしてすぐ波上に視線を注いだ。と、その刹那に、船から四五間とは離れてゐない船の蹴波の搖ぐ間に、一匹の飛魚がついと身を飜して飛びあがつた。

「あら〳〵……。」姉らしい婦人は聲高くつぶやいた。

飛魚は大きな尾鰭を翼の様にぴんと開いたまゝ、何の羽ばたきもなく、波上を滑る様に、船の進みと早さを爭ふ様に、鮮かに六七間と飛續けて、すぐ波間に隱れた。が、隱れたあとの白泡が、うしろにすさりながら消えるか消えない間に、飛魚は私たちの眼の前に再び飛びあがつた。小一尺程のぬれた體が、夕日をまともに

すさる　しりぞく。

受けてきら〳〵光る。かと思ふと、それは二度波間に消えた。それが四五回續いたが、船を追ひあぐんだのか、何時かその姿は見えなくなつてしまつた。船客たちは顏になごやかな微笑を浮べたまゝ、尙も波間に眺め入つてゐた。

行く手の岬の上に傾きかけてゐた赤い夕日の光は、だん〳〵に弱くかげつて來た。薄赤いその殘光の中に群がつてゐた歸帆の影も疎になつた。そして船は黑煙を引殘しながら、蒼茫と暮れかけて來た海の上を、機關のリズム(一)も柔かに滑つて行くのであつた。

ふと船橋の方で六時の點鐘が鳴つた。

冷かな夕方の海風に、甲板は肌寒くなつて來たので、私は後部の喫煙室へ入つた。そして備附の蓄音機を掛けたり、新聞雜誌を讀みあさつたりした。傍ではアメリカ人らしい若い夫婦が、テーブルを挾みながら、トランプ(二)に興じてゐる。Tさんはこれも實業

追ひあぐむ　追ひつかれる。

蒼茫　あをくひろびろとしたさま。

(一) rhythm.（韻律。調子）

點鐘　時間を知らせる鐘。

(二) trump.　かるたの一種。

家らしい中年の紳士と談笑し合つてゐる。さつきの姉妹がピア(一)ノに向つて、姉らしいのが馴れた指先で輕いマーチ(二)を彈いてゐる。窓外を見ると、すつかり暮落ちた空には、幾つかの星影が仰がれた。

七時半、晩餐を濟してから、私はまた喫煙室に入つた。そして葉書の旅信を四五枚書いたり、旅日記をつけたりしてゐると、

「四坂島(三)が見えますよ。」

九時近く、Tさんがさう言つて、呼びに來た。

「四坂島。」

私は尋ねかけた。

「えゝ、御存じでせう、銅山のある島……。」

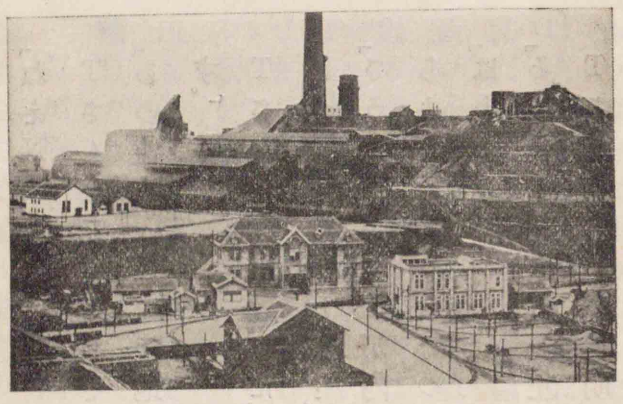
「いゝえ……。」

答へ返しながら、私はTさんのあとから甲板へ出て行つた。

眞暗な備後灘、その直中、船の左舷遙かに段になつて折重つた

(一) piano.
(二) march. (行進曲)
(三) 愛媛縣新居濱町の北方。燧灘にある。別子銅山の精錬所がある。

家々の燈火を美しくきらめかせてゐるのが、その四坂島だつた。ちやうど光の浮島――そんな感じだつた。



四坂島精錬所

「綺麗ですね。」

私はTさんを見返りながらつぶやいた。

「えゝ、私はもう何度も此所を通りますが、こんな綺麗な夜景は初めてです。」

相槌打ちながら、Tさんは薫のいゝ葉卷の煙を吐いた。

ふと振返ると、後部の船柱に七八日頃らしい弦月が掛つてゐる。そして何時出始めたのか、白い浮雲がその銀面を撫でる樣に掠めて行く。その度毎に光を映した波

相槌打つ　他の話に調子を合せる。

頭が、明るくなり、暗くなりする。私は煙草を吸ひつゞけながら、その明暗の變化をぼんやり眺めてゐた。

「ねえNさん……。」

Tさんは私を促して、船の行く手を指さした。

「あの遠く向ふに陸地が迫つてゐませう。あれが來島(一)の瀬戸です。」

Tさんは詞を續けた。

「あゝ、來島の瀬戸……。」

「さうです。あすこが内海で一番狹いんですが、潮流の工合では、ちよつと鳴戸(二)といつた景ですよ。」

「はあ……。」

「それから、そらあの左手の明り、あれが今治(三)の町です。」

Tさんは快活に説明の詞を重ねた。

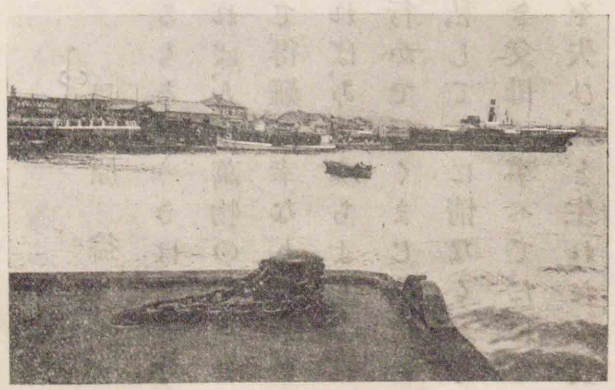
やがてTさんが外の船客と何かを話し始めたので、私はあた

(一)今治の海岸と大島との間の海峽。來島はその海中にある小島。

(二)鳴門海峽。淡路の門崎と阿波の孫崎との間にあつて世界に類のない壯觀。

(三)愛媛縣の港市。

りの人群を遁れて、後部甲板の方へ歩いて行つた。船客の大方はもう船室に眠りついたらしく、其所には人影もなかつた。あたりには何時の間にかしつとりと夜露が降りて、月が淡い光を落してゐる。舷に青白く碎け散る蹴波の音と、柔かな機關の響と、それのみさえて、夜はだん〳〵に更けしづまつて行く。私は吹くともなく口笛の歌を吹きながら、時々燐光を浮せて走り過ぎる暗い海面を、ぼんやり眺め續けてゐた。



今治港埠頭

氣が附くと、今治の町は左舷のまともになつて、船は來島の瀬戸に差掛つてゐた。暗い陸影がすぐ間近に立つてゐる。海面が何となく荒れさわいでゐる。船は行違ふ

漁船らしいのに寂しい汽笛の警戒を與へながら進んで行く。蹴波の音は高まり、船は微に動搖し始めた。

一九　樂訓

貝原益軒[一]

あめつちの惠を受けて、生きとし生けるもろ〳〵きはまりなきうちに、人ばかり貴き者なし。いかんとなれば、人は萬物の靈なればなり。されば人とかく生れ來ぬる事、至りて得難き幸なり。然るに我がともがら愚かにして人の道を知らざれば、あめつちより生れ得たる人の心を失ひ、人の行くべき道をば行かで行くまじき道に迷ひ、あさゆふ心を苦しめ、その上、我が身に私して人に情なく、おもんぱかりなくて人の憂を知らず。至りて近き父母に事へてだにその心にかなはず。およその人倫に交りて道を失ひ、人と生れたる貴き身をいたづらになし、鳥けだものと同じく生き、くさ木と共に朽ちなんこそほいなけれ。顏之推が「人身は得難し。空しく過す事なかれ。」と言ひけん事、心に留むべし。この故に、人はいとけなきよりいにしへの聖の道を學び、我が心にあめつちより生れ得たる仁を行ひて自ら樂しみ、人に仁を施して樂しましむべし。仁とは何ぞや。あはれみの心をもととして行ひ出せるもろ〳〵の善をすべて仁といふ。仁とは善の總名なり。仁を行ふは、これあめつちの御心に從へるなり。これ卽ちいにしへの聖人の教へ行ふ人の道なり。この道に從ひて自ら樂しみ人を樂しましめて人の道を行はんこそ、人と生れたるかひありて、顏之推が言ひけん空しく過す憾なかるべけれ。

○

つく〳〵と思へば、樂しみ多きこの世なるを、道を知らざれば我と心を苦しめ、天[二]をうらみ、人をとがむ。かく道を知らで憂多き人は、くれまどふ心の闇こそむげに愚かなりと言ふべけれ。人の身金石

(一)江戸時代の儒者、博物學者。筑前の人。名は篤信。正德四年(一七一三)歿、年八十五。

ほいなし

(一)支那南北朝時代の儒者。字は介。臨沂の人。歿年不詳。

(二)「子曰、不レ怨レ天。不レ尤レ人。」(論語憲問篇)

にあらず、生ける者終に死なざるはなし。また二たび生れくる身にしあらざれば、この世なる間は、樂しみてこそありぬべけれ。悔しく過ぎしむかしの事は、すべき樣なし。いくばくならぬ齡なれば、今より後一日も早く日月を惜しみ、先のひがごとを悔いて、飛驛たくみうつ墨繩にあらねども、唯一すぢに善を好み、道を樂しみてすぐさんこそ、この世に生けるかひあるべけれ。年老いては、同じ事するならひなれば、あまのたくなはくりかへし、かく言ひくして、たまくしげあけくれ自ら心をいましめ、また人に樂しみを勸むるなかだちとするならし。かへすがへす我も人もかく生れつる樂しみを知らで、身をいたづらになし、さてもかひなく世に朽ちなん事憾むべし。若しあしたに道を聞きなば、人となれるかひありて、ゆふべに死ぬとも、また何をかうらみんや。

飛驛たくみ

あまのたくなは

(一)子曰、朝聞道、夕死可矣。(論語里仁篇)

——樂訓——

和衷協同

(一)第十代將軍德川家治から諱を賜はつて治憲と稱し、後老を請うて鷹山と號した。文政五年(一八二二年)歿、年七十二。

(二)本姓は紀。名は德民。尾張の人。享和元年(一八〇一年)歿、年七十四。

(三)長尾政景の子。上杉謙信の養嗣子となつた。元和九年(一六二三年)歿、年六十九。

(四)岐阜縣(美濃國)不破郡。慶長五年(一六〇〇年)九月德川家康は石田三成等(西軍)と此所に戰つて大いに破り、これを天下の霸權を握るに至つた。

二〇　上杉鷹山と細井平洲

興國の歷史は壯快で明るい美談に充ち滿ちてゐるが、亡國の歷史は誠に暗澹として陰鬱な氣分に覆はれてゐる。而して興廢の岐れる所は、多く人心の和合すると否とに關する事を知らねばならぬ。東鄕元帥の有名な日本海大海戰の信號中にある「各員一層奮勵努力せよ。」といふ一句の中にも、全員の和衷協同が要望してある。近世の賢諸侯と仰がれ、明君と謳はれた米澤藩主上杉鷹山(一)が、渺たる町儒者細井平洲(二)を聘して、遇するに師賓の禮を以てし、藩政の大改革を完うして芳名をたゝへられたのも、君臣合體、眞に水魚の關係にあつたからである事を忘れてはならぬ。

上杉氏はもと越後、佐渡、越中等の諸國を領して非常な勢力であつたが、景勝(三)の時に會津百二十萬石に移されて、石高がずつと減つた。その後、關ヶ原(四)の役に西軍に屬したので、德川家康はこれを僅か三

十萬石に減じて、米澤に移した。その後、事によつて領地が更に半減され、僅かに十五萬石の大名になつてしまつた。然るに上杉氏には大祿を食んでゐた越後以來の家臣が多く、その祿高は合計十三萬石にも及んでゐた。それ故當時の上杉氏は財政が極度に窮迫し、親戚間の附合もろく〳〵出來ない程であつたから、心ある人々の間には、藩政上の革新を企て、以て上杉家の再興を謀らねばならぬといふ氣運が頻りに動いてゐた。ちやうどかういふ時に當つて、尾張の儒者細井平洲が鷹山の師範に迎へられた。

鷹山はもと日向高鍋藩(一)主秋月種美の次男で、十歳の時米澤藩主上杉重定の養子になつたのであるが、末賴もしい少年として期待された。時に鷹山は漸く十四歳であつたが、よく平洲の教訓を守り、修身、齊家、治國の事に力を入れ、專ら實學を學び、十七歳の時に家を繼いだ。その日鷹山は

(一)宮崎縣兒湯郡高鍋町。

實學

うけつぎて國のつかさの身となれば
わするまじきは民のちゝ母。

といふ歌を作つて、領民の安泰を祈る心を寓した。

鷹山の改革は何よりも先づ儉約令を藩内に布いて、財政上の基礎を立てるにあつた。鷹山がこれに就いて當時の有司に「かくまで衰微せる藩を維持する見こみはないか。」ときくと、何れも「存立の見こみがない。」といふ答であつた。しかし、鷹山は居ながら亡びるのを待つよりは、君臣一致心力の盡きるまで及ぶ限りの大儉約を斷行すれば、或は立行く事もあらうと猛然と覺悟を極め、平洲の教訓を嚴守し、普く領内に儉約を令し、自ら率先して朝夕の食膳は一汁一菜とし、五十餘人の奥女中を九人に減ずるなど、實踐躬行して範を垂れた。一方富

上杉鷹山

殖産興業
道路の言

國策として漆や桑樹を植ゑ、百工を招いて鋭意殖産興業に努めた。

鷹山はまた有司をして廻村せしめ、道路の言に聽いて民益を興し、百姓の力を協せて農事に勵ましたから、改革の事は著々として功を奏した。その事の多くは平洲の意見に基づいたのであるが、鷹山は是非とも平洲を米澤に招いて根本的の改革を全うし、一藩再興の夙志を遂げたいものと思ひ、明和八年四月江戸から歸國する

夙志
(一)二四三一年。
下向

に先だち、自ら平洲の僑居を訪ひ、米澤下向の事を懇請した。平洲はこれに感激して五月米澤に赴き、親しく教化に從ひ、藩校興讓館を興して、藩士の子弟の教育に努めて江戸に歸つた。越えて安永五年

(二)二四三六年。

秋平洲は再び米澤に下り、學を講じて人倫の大本を示したが、その講筵には、足輕以下工商の輩に至るまで連署して、これを聽聞せん事を請ひ、領内各地の巡回講釋に當つては、をりから降りしきる雪の中に七八百人も平伏して平洲を送迎し、婦女子もまたその孝經

講筵
(三)一卷。曾子の門人が孔子の言を錄したもの。

の講義を聽いて、仁治の本意を知り、涙を流して感謝したといふ事である。かくて一藩が爲に學問の重んずべき事を知り、平洲の德化が普く及んだので、その江戸に歸る時には、雪中をも厭はず、遠近傳へ聞いて平洲を見送り、或はこれを途に迎へて教化を請ひ、中には離別の情に堪へかねて、泣きに泣いた者も少くなかつたと言はれる。されば米澤藩の施政は宜しきを得て治績が大いに擧り、松平定信が老中となるに及んで、鷹山は幕府の賞賜を受けた。而して米澤藩の秀才で江戸に遊學する者は、皆平洲の嚶鳴館に入つて學び、藩の重臣は何れも平洲を以て政教上の宗師としてこれを景仰し、鷹山自身すら平洲を呼ぶに先生を以てした。

然るにこの後平洲は米澤に致仕して生國尾張に歸り、藩主德川宗睦に仕へ、此所にもまた著々として改革の實を擧げたが、かゝる次第で、鷹山も平洲と相見ない事が十餘年の久しきに及んだので、

(一)田安宗武の第七子。白河城主松平定邦の養嗣子となり、後幕府の老中となつた。退隱して樂翁と號した。文政十二年(二四八九年)歿、年七十二。

(二)父宗勝の後を襲ぐ。承けて封を仁政を布き、産業を興し、また學問を尚び、藩校明倫堂を創設して平洲を總裁とした。寛政十一年(二四五九年)歿、年六十七。

朝暮欽慕の情に堪へず、平洲もまたこれを懷ふ事切なるものがあつたけれども、仕官の身としてその術もなかつた。そこで上杉家から尾州家に對し、平洲の爲に賜暇を請うて、これを米澤に招いた。寛政八年秋の事であつた。(一)

時に平洲は齡既に古稀に近く、名聲籍甚、海内に洽かつたから、利根川以東でも往々「米澤聖君樣の御師匠樣。」と稱へて、道途これを迎へる者も少くなかつた。當時鷹山は國を子治廣に讓り、米澤に老してゐたのであるが、自ら平洲を米澤の南郊一里餘の羽黑堂(三)といふ所に迎へ、その相對するや、兩者感極つて暫しは言葉もなく、老涙滿顏。やがて鷹山は僅かに「先生御安泰。」とばかりで、手を取るばかりにして寺に入り、漸く言葉を交へ、而して近傍の村民は田畝に伏してこの光景を仰ぎ見て、唯落涙、飲泣の聲啾々たるのみであつたといふ事である。しかも平洲はこれを以て、皆鷹山の德、民心感戴の致す

(一)二四五六年。
古稀　名聲籍甚
(二)治憲の嗣子。
(三)山形縣（羽前國）南置賜郡。

所であるとして、その實、平洲自身の德化の及んだのである事を知らなかつたのである。やがて平洲が米澤に著くや、鷹山は左右を退けて國事を談じ、或は學問上の事に及び、眞に師賓の待遇を極めた。その講席に列する者は、皆々落涙疊を潤し、平洲もまたこの光景に老涙を禁じ得なかつた。而して平洲は米澤藩の孝悌力田の美風の篤いのに驚き、有司は唯安然として慰勞するのみと激賞し、また國老以下有司の輯睦を極めてゐる事は、やがて治績の大いに擧れる所以である事を賞揚した。かくて平洲は滯在五十二日の久しきに及び、寒天降雪の候にも近づいたので、十月二十八日米澤を辭し、江戸に向つて出發したが、この時も鷹山はまた羽黑堂までこれを送り、送る者送られる者、皆一統に愛別離苦を分ち合つたが、平洲はこの光景を「別離の態御想像可被成候。」と、門人に與へた書狀中に千萬無量の意を寓してゐる。あゝ、君臣の合體茲に至つて極れりと言ふ

力田
輯睦

べく、米澤藩の治績の擧つたのも、また眞に偶然でないのを知るのである。

二一　夕陽の美

高山林次郎[一]

夕陽の美は、西洋では、あらゆる美中の最も美なる物の一つとして數へられてゐる。それで苟も自然の美に興味を持つてゐる詩人は、皆口を極めてその美を歎美してゐる。ベイン[二]の樣な學者ですら、その心理學書で、美しい物の例に、夕陽と、星と、百合の花との三つを擧げてゐる。我が國の文學にも、夕日影とか、夕映とかいふ文字は見えてゐるが、その崇大な光景を想はしめるに足る名篇玉什の極めて少いのは、聊か不滿足に感じられる。

夕陽は麗しいが、その中でも、海の夕陽程麗しいものはあるまい。自分は奥州[三]の西海岸に育つた者であるから、海の日没の景色は、自

(一)評論家、思想家、文學博士。號を樗牛といつた。山形縣の人。明治三十五年歿、年三十二。
(二)Alexander Bain. イギリスの哲學者。(西紀一八一八—一九〇三年)
(三)山形縣鶴岡市。

牢固
障碍
凱旋
憊れる

分には牢固たる印象を留めてゐる。あの夕の雲の色々なたゝずまひ、それに映えうつれる夕陽の光の濃き淡き、それに伴なつて大海原の色々に彩られたる、これ等の一切が、日の傾くに連れて形も色もそれ〴〵變り行く有樣、殊に大空の色の暮行く工合などは、繪にも筆にもあらはし盡し難い。

高山林次郎

海の夕陽に對して自分の起す感情は、常に「平和」である。譬へば、世界のあらゆる障碍にうち勝つた大勇者が、今方にその最後の戰鬪を後にして、榮光と平和とに擁せられながら、靜かにその墓門に凱旋するといふ樣な趣がある。夕陽の景色はいかにも崇大光明ではあるが、その全體の上に、どこ

となく疲れ憊れた老衰な趣のある事は、自分にはどうしても爭はれない感情である。これを譬へば、朝日の景色の萬づ生き〴〵とし

て、今將に戰場に上らうとする初陣の勇士の概あるに較べれば、兩相對して、さながら人生の兩極端を現示してゐる趣があるではないか。

あゝ、人や、その青年は朝日の如く、その晩年は夕陽の如くありたいものではないか。爭を經ない平和には、平和たる價はない。我等は一生の戰鬪にうち勝ち、榮光の雲に包まれて、靜かに西方の天に入りたいものではないか。あゝ、海の夕陽は麗しいが、海の夕陽に似た人生の晩年は、更に麗しからうではないか。

二三　山より

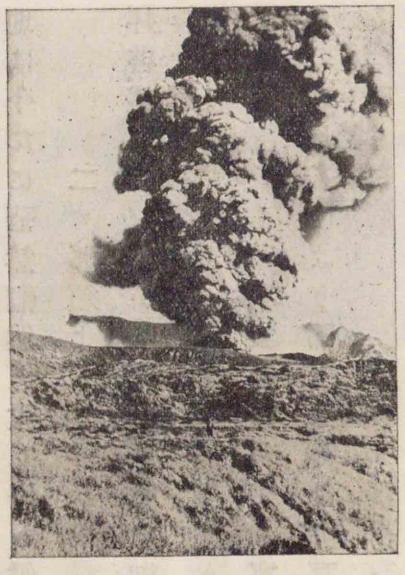
五十嵐力(一)

一　阿蘇山より

今日愈、阿蘇(二)登山致し候。朝の六時に栃(三)の木温泉を發ち、十一時少し過に山上なる阿蘇大權現の社前に著し候。それより上ること

(一)國文學者、文學博士、早稻田大學教授。山形縣の人。明治七年生。
(二)熊本縣阿蘇郡。活火山。海拔一〇〇〇メートル以上の諸峰から成る。最高峰高岳は一五九二メートル。
(三)山麓立野の西方。高森線長陽驛から約一六〇〇メートル。

二十餘町にして、世界一の大噴火口の懸崖の縁に立つべく候。この大噴火口を護りて周圍に立てる外輪の山々は、概ね綠の矮草を纏うて、撫肩麗しく見え候へども、その間を通り過ぎて大火口の縁に立ち候へば、光景俄然として一變致し候。磊々たる赭色の火口壁に、白ちやけたる筋の幾つとなく通れる所は、地球といふ大いなる動物の身を切れる横斷面とも申すべく、徑十餘町、深さ六十幾間といふ大火口の底に、色異なる五つの熱湯湖の横たはれる趣は、地獄の庖廚とも申すべきか。



阿蘇山

私はこの大噴火口を見て、天地の實に大きく、人間の實に小さき

事を覺り候。今まで見たる事なき「恐しき尊さ」といふものに接したる心地致し候。やがて下山の途につきて無事に栃の木に著き候は、午後五時頃にて候ひき。非常に偉大なる者に接し候後の心地は、今だに茫然惘然と致し居り候。　頓首

二　那須より

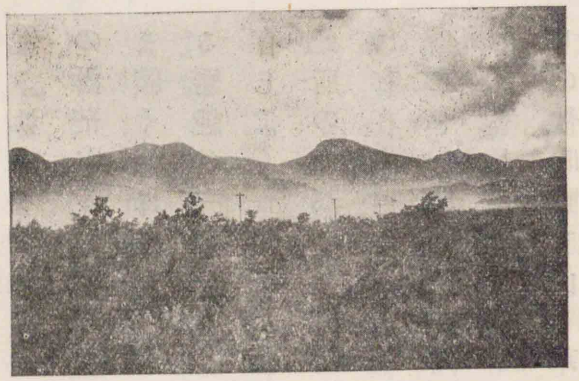
拜啓。盛夏のをりから、愈〻御健勝に御すぐしあそばされ候や。小生兩三日前、當(一)溫泉に參り候。青葉をわたりくる山風冷え〳〵として、眞夏といふに單衣を重ねても寒きくらゐ、それに杜鵑、鶯、閑古鳥、るり鳥、未明より啼ききそひて、耳の極樂は此所にやと疑はるるばかりに候。

今朝はまた快晴にそゝのかされ、朝日に先だちて起き、一浴して山路を散策致し候。日蓮上人の喰初庵(二)を左に見、綠樹に挾まれ、露に濕れるだら〳〵坂を登りて旭橋に至り、清き空氣を擅に呼吸

(一)栃木縣那須郡那須村新那須溫泉。東北本線黑磯驛から北方約一五キロメートル。

(二)新那須溫泉にある。湯本溫泉より約一キロメートル南。

して、爽快の氣分を存分に味はひ候が、更に靜觀樓(一)の上なる山見新道にさしかゝりて、俯仰の壯觀に打たれ候。仰げば北の空には、大笠を冠れる如き活火山の那須嶽(二)(一名茶臼嶽、舊名月山)を盟主として、大鋸の刃を刻める朝日嶽(三)(一名毘沙門山)、筑波に似たる雙峰の南月山(四)、美しく片裾を曳きたる黑尾谷山(五)、右より左に蜒々として變化ある輪郭に空を劃し、朝ざめの颯爽たる雄姿を横たへをるには候はずや。南には大那須野のしもと原、綠渺茫としてはるかに展開しをるには大那須野のしもと原、綠渺茫としてはるかに展開しをるには候はずや。小生此所に來れる初には、山に富士の如き美容なを、彼所此所に朝霧をあしらひつゝ、繪の如く遙かに展開しをる



那須五峰

(一)新那須溫泉にある旅館。

(二)那須郡。海拔一九一七メートル。

(三)那須嶽の東北方。一九〇三メートル。

(四)那須嶽の南方。一七七五メートル。

(五)南月山の稍西南方。一五八三メートル。いづれも湯本より見て東北から西北に連なつてゐる。

(楷)

く、野に瀬戸内の如き色彩なきを見て、いかにも單調平凡なる樣に感じ候ひしが、今朝の山野の眺望によりて、すつかり迷の夢を覺されたる心地致し候。この那須の野の渺茫たる青木が原、何時までこのまま續くかは知らず候へども、原始的なる野趣の一部分だけは、何時までも保存したく存じ候。五嶽雲際の美、これは此所の名高き七湯(一)の溫泉と共に永へに存在すべく、憂ふるに足らず候。

今二十七日(二)は正午間近に聖駕御用邸に行幸あらせらるとの事にて、久しぶりの快晴、野も山も、草も木も、御迎へ心に裝を凝し候さま、嬉しき限りに候。また晝のうちの晴天が夕方

那須高原の展望

(一)湯本、高雄股、辨天、北、大丸(おほまる)、板室、三斗小屋。
(二)昭和三年七月。

よりうち時雨れて、風なき雨しと〳〵とうち煙り候が、思ふに行宮(かりみや)におちつかせ給へる大君、なごやかに御寢(しづ)りませとの、那須の野の神の美しき心づかひにも候べし。曉より夜にかけて、美しさ面白さの限りを盡せる那須の一日の消息、走筆匆々御知らせ申し上げ候。

不盡。

—純正國語讀本—

二三　砂丘日記

吉田絃二郎(一)

三保(二)までは二十町、龍華寺(三)までは一里、久能(四)までは十五六町。しかし、日中はまだ焦(や)く樣な暑さですから、三保へも龍華寺へも行きません。

お天氣續きで、かけひの水が涸れかゝつてゐますので、水だけは心細い樣ですが、少し山を下ると、いゝはねつるべの井戸があります。毎朝寺のお住持さんが、手桶で汲んでは運んでくれます。そのう

(桔槔)

(一)小説家。名は源次郎。佐賀縣の人。明治十九年生。
(二)靜岡縣(駿河國)安倍郡。三保の松原。
(三)同郡不二見村。日蓮宗。
(四)同郡久能山。

ちには私自身で汲む積りでゐます。

朝五時か五時半には起きます。冷い水で顏を洗ふと、私たちは眞先に庭のすぐ下の海を眺めます。そして白い波頭が立つてゐるかゐないかを氣をつけて見ます。波の高い日はきつと涼しいからです。駿河灣の面が鏡の樣な朝もあるし、また朝から白い波が高く立つてゐる時もあります。濱を洗ふ白い波の音は、四六時中絶間もありません。

妻が土釜で飯を焚いてゐる間に、私は濱を歩いて歸ります。地引網を手繰つてゐる男や女の聲が、靄の中から響いて來ます。御前崎(一)や伊豆の半島が、水煙縹渺の間に微に流れて見える事もあります。

伊良湖崎(二)は此所からは見えません。御前崎を一つ越えれば、伊良湖崎になるのでせうが。

私は此所から微に御前崎を見るたんびに、伊良湖崎を思ひ出します。更に世を憚つて伊良湖崎に寂しい生活を送つてゐた若い天才の杜國(一)や、路を枉げてわざ〳〵杜國を尋ねて行つた芭蕉の事を思ひます。

(一)駿河灣口の西南端。伊豆の突端石廊崎に對する。

(二)愛知縣（三河國）の南部渥美半島の突端。

(一)坪井氏。尾張の俳人。萬菊丸と號し芭蕉の門人。事によつて伊良湖崎に流され、元祿三年（二三五〇年）此所で歿した。

鷹一つ見つけてうれし伊良湖崎。

海を渡つてくる鳥を水天髣髴の間に見出し得た師と、薄命な弟子の當時の心情とが、色々に想像されます。

七時に朝の食事を濟します。地引網を引く人々の聲が、濱から高く聞えて來ます。

此所に來て一番驚く事は、土地の人々の勤勉な事です。今では大抵三時には起きて、四時少しまはると畑に出てゐます。十三四の娘たちすら、手桶を擔いで、いちご畑に水を注いでゐます。草をむしつてゐます。朝寢をしてゐるのが、すまない樣な氣になります。私たちが朝の食事を始める頃までに、村の人たちは一仕事濟してゐます。

（苺）

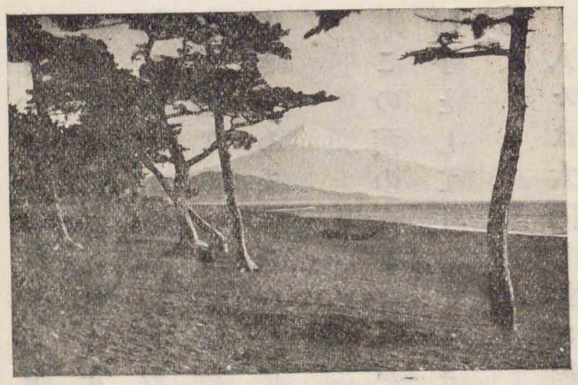
手甲、脚絆を著けて手拭を冠つた娘たちが、鎌を持ちくはを握つて終日働いてゐる姿を見ると、白い手の都會人たちの怠惰な生活が、すぐ聯想されて來ます。全く田舍の人たちは、終日休む暇なく働いてゐます。日の出る前から日が落ちてしまふまで働いてゐます、焦く樣な太陽の下で。

人々は夜が明けるのを待ちかねた樣にして野らに出ます。田園の人々程よく自然を感じ、自然を知つてゐる人はありますまい。朝の空の美しさ、微風の快さ、小鳥の啼く音の樂しさ、それ等の自然のあらはれに對して、人々は最もデリケートな感受性をもつてゐます。

都會の人々が富の上に、社會的地位の上に、名譽の上に生活慾の刺衝を見出してゐる間に、田園の人々は、寧ろ自然その物に藏せられた蠱惑のうちに、生活を享樂しつゝある樣に思はれます。

(一) delicate.

恐らく都會の人に取つては、單調過ぎる程の同じ波、同じ島影、同じ空を眺めつゝも、田園の人々は飽かず一生を自然のうちに送つてゐます。私たちが想像してゐる以上に、人々は自然の單調な表現のうちに、深い複雜な蠱惑を見出してゐる樣に思はれます。



三保の海岸

私は日が暮れかゝる頃から濱邊を歩きます。三保から御前崎までの山の裾を縫うて、白い波の帶がうねりうねつてゐます。

夜釣の男たちが砂の上にしやがんで、白い波頭を見詰めてゐます。濱に夜釣する男の焚火は、迎火の樣な哀さをもつてゐます。此所では都會生活に於けるよりは、ずつと人

對象
戰々兢々

と人とが本當に仲間といふ感じを抱く事が出來る樣です。都會人が殆ど共通にもつてゐるえらがりや、利己的な考が、濱の人たちにはないからだと思ひます。

此所では誰も彼も正直に、大膽に働いてゐます。此所では働きさへすれば、最も正直な收穫の報酬が與へられるのです。官廳に行つて御覽なさい。會社に行つて御覽なさい。彼等は人間を對象として生きてゐます。それ故にそれ等の人々の恐れる所は人間であります。

この濱の人々は海を生活の對象として生きてゐます。山を、畑を對手として生きてゐます。此所の人々の恐れる所は自然であります。

人々は太陽と共に起き、太陽と共に働き、思ひ、生き、太陽と共に眠ります。人々は太陽が何時も一つの軌道を走る樣に、何時も單調な

（鮠）

生活の軌道を歩いてゐます。人々は太陽の如く大膽に、太陽の如く赤裸々に生きてゐます。太陽の如く絶えず燃えてゐます。働いてゐます。そして太陽の如く深く夜と共に眠ります。

今夜は濱の人たちにぐち釣に誘はれました。

空には星が瞬き始めました。秋近い空には銀河が大海を横切つて、沖の涯まで流れてゐます。

絲を指頭に感じて海の中に佇んでゐる私は、空に對し、海に對し、無限に對して永遠に解け難き或不思議な謎を聽かうとしてゐる事に氣づきます。

其所には社會もない。人類もない。憎しみもない。愛もない。唯私は波の中に佇立して、無限の扉に指を觸れてゐる事を感じます。

晝日中沖を通る船を見出してすら、懷かしさを感ずる程にものの寂しい此所の濱邊では、夜たまに沖に唯一點の灯を發見した時な

ど、私たちは灯が水平線の下に隱れてしまふまで、飽かず眺めてゐます。それ程此所では私たちは灯といふ物に飢ゑてゐます。日が暮れると共に、殆ど燈火一つ見出す事が出來ません。濱を歩いて偶〻遠い波の上に灯を見出した刹那に、私たちは珍しい物でも發見した樣な喜を感じて、人を呼びます。

人間がこの世界に生きてゐるといふ事、そして夜になれば灯を點ずるといふ事だけでも、それは立派な尊い仕事なんだといふ感じが湧いて來ます。燈臺守だけが灯を點して人々に喜を與へるのではありません。岬の見も知らぬ人々の一つ〳〵の窓の灯は、どんなにか旅人の心に慰を與へてくれるか知れません。

二十六夜の月を待つ濱の女たちが、宵から御堂に集つてゐたが、今朝方の二時頃であつたらうか、それまでお月樣を待つて、海から出たお月樣を拜んで、濱の方へ山を下つて歸りました。

(一)江戸時代の狂歌師。本名榎並善八。油煙齋と號した。大阪の人。享保二十年(一七三九年)歿。

(二)江戸時代の狂歌師。幕臣。本名大田覃。南畝また蜀山人と號した。文政六年(一八二四年)歿、年七十五。

あの人たちこそ本當に詩の心に生きてゐる。私はさう思ひました。

二四　ふじの山

ふじの山夢に見るこそ果報なれ
　路銀もいらずくたびれもせず。　鯛屋貞柳(一)

さわらびが握拳をふり上げて
　山の横つらはる風ぞ吹く。　四方赤良(二)

ほとゝぎす啼きつるあとにあきれたる
　後德大寺のありあけのかほ。　同

(一)江戸時代の文學者。本名石川雅望。天保元年の人。(二四七九年)歿、年七十〇八。

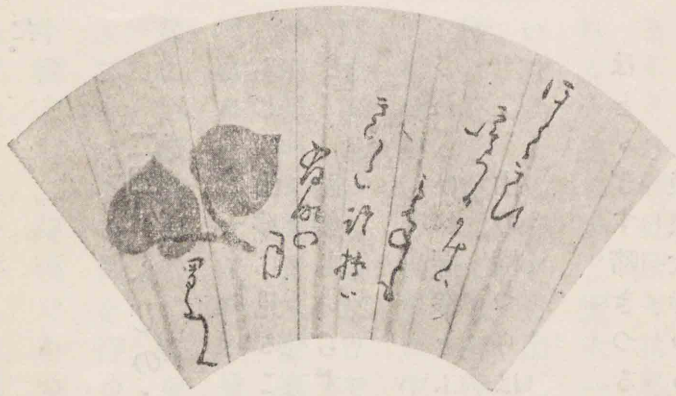
(二)江戸時代の狂歌師。本名山崎景貫。幕臣。寛政十二年(二四六〇年)歿、年六十三。

ほとゝきす鳴つるかけはみえねとも きいた證は有明の月

(三)江戸時代の歌師。本名北川喜兵衛。狂歌堂と號した。

(四)江戸時代の狂歌師。田安家の士。本名小島源之助。享和二年(二四六十二年)歿、年七十七。

蜀山人



四方赤良筆蹟

宿屋飯盛

歌よみは下手こそよけれ天地の
うごきいだしてたまるものかは。

朱樂菅江

あまのはら月すむ秋をま二つに
ふりわけ見ればちやうど仲麿。

鹿津部眞顏

あらそはぬ風の柳の絲にこそ
堪忍ぶくろ縫ふべかりけれ。

唐衣橘洲

菜もなき膳にあはれは知られけり
しぎやき茄子の秋のゆふぐれ。

平秩東作

(五)江戸時代の儒者。本名立松東蒙。江戸の人。寛政元年(二四九年)歿、年六十四。

(一)京都清水寺。

(二)江戸時代の狂歌師。本名久須美孫兵衛。文化七年(二四七〇年)歿、年七十七。

(三)江戸時代の狂歌師。本名岸宇右衛門。江戸の人。寛政八年(二四五六年)歿、年七十。

(四)江戸時代の狂歌師。俗稱大坂屋甚兵衛。江戸の人。文化四年(二四六七年)歿。

ゆく春を思ひきれとや舞臺から
飛んで見せたる清水のはな。(一)

大屋裏住

うぐひすも蛙もおなじ歌なかま
經よむもあり歌よむもあり。

つむり光(三)

ほとゝぎす自由自在にきく里は
酒屋へ三里豆腐屋へ二里。

馬場金埒(四)

雪ならばいくら酒手をねだられん
はなのふゞきの志賀のやまかご。

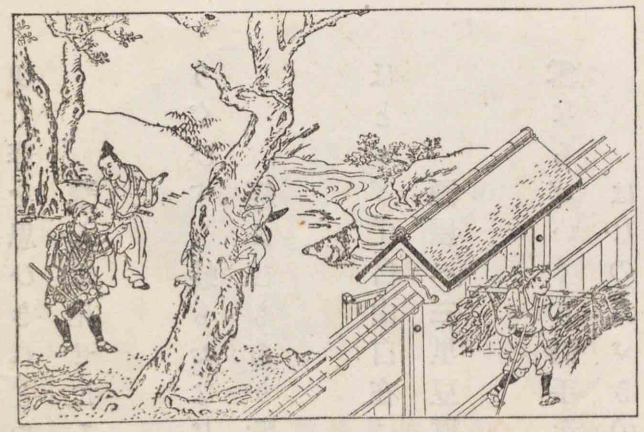
(一)鎌倉時代の文學者、歌人。正平五年(一二〇一年)寂、年六十八。

あやしき下臈

二五　高名の木のぼり

吉田兼好(一)

高名の木のぼりといひし男、人をおきてて、高き木に昇せて梢をきらせしに、いと危く見えし程は言ふ事もなくて、おるゝ時に、軒たけばかりになりて、「過すな。心しておりよ。」と言葉をかけはべりしを、「かばかりになりては、飛びおるともおりなん。いかにかく言ふぞ。」と申しはべりしかば、「その事に候。目くるめき、枝危き程は、おのれが恐れはべれば申さず。過は安き所になりて、必ず仕る事に候。」と言ふ。あやしき下臈なれど



高名の木のぼり

もろ矢

けたいの心

も、聖人のいましめにかなへり。鞠も難き所を蹴いだして後易く思へば、必ず落つとはべるやらん。

或人弓射る事を習ふに、もろ矢をたばさみて的に向ふ。師の曰く、「初心の人、二つの矢を持つ事なかれ。後の矢を頼みて、初の矢になほざりの心あり。毎度唯得失なく、このひと矢に定むべしと思へ。」といふ。僅かに二つの矢、師の前にて一つをおろかにせんと思はんやけたいの心自ら知らずと雖も、師これを知る。このいましめ萬事にわたるべし。道を學する人、夕には旦あらん事を思ひ、旦には夕あらん事を思ひて、重ねて懇に修せん事を期す。いはんや一刹那のうちに於て、けたいの心ある事を知らんや。何ぞ只今の一念において、直ちにする事の甚だ難き。

○

人の心すなほならねば、いつはりなきにしもあらず。されど、自らむは世の常なり。至りて愚かなる人は、偶、賢なる人を見てこれを憎む。大きなる利を得んが爲に少しきの利を受けず、いつはり飾りて名を立てんとす。「とそしる。おのれが心に違へるによりて、この嘲をなすにて知りぬ。この人は下愚の性うつるべからず。いつはりて小利をも辭すべからず。假にも愚をまなぶべからず。狂人のまねとて大路を走らば卽ち狂人なり。惡人のまねとて人を殺さば惡人なり。

驥を學ぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。いつはりても賢を學ばんを賢と言ふべし。

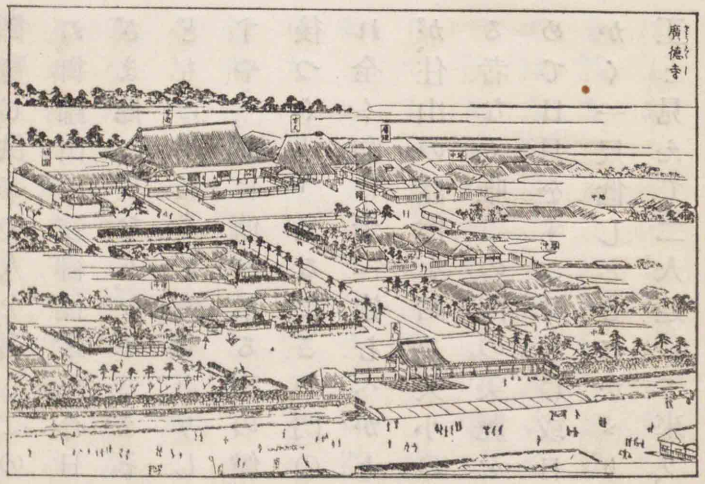
—徒然草—

二六　廣德寺の門

東都下谷に廣德寺[三]といへる禪院あり。この門格別に大いなる門

橘南谿[二]

驥
(一)支那古代の聖天子。有虞氏。
(二)江戸時代の國學者。宮川氏。名は春暉。伊勢の人。文化三年(一二四六六年)歿、年五十三。
(三)今東京市下谷區北稻荷町にある。



廣德寺（江戸名所圖會所載）

にもあらず、また彫琢の工を極めしと言ふにもあらざるに、甚だ名高く、東都の人やゝもすれば、口ぐせにも廣德寺の門、廣德寺の門と言ふ。余も行きて見るに、京都などの寺門に比すれば質素狹小にして、寺町の寺々の門にもこれ程の門は多し。何故と問ふに、上手の大工の作なりと言ふ。その後、梅隴[一]主人の書きし新齋夜語を見しに、この門の事を載せたり。珍しき事なれば今また此所に書寫す。

過ぎし元祿年中、東叡山[二]一品法親王或日淺草觀音へ詣でさせ給

彫琢

(一)江戸の人。姓氏傳記共に詳かでない。新齋夜語(五卷)は見聞傳說によつて批評諷刺の物語を集めたもの。
(二)上野の寬永寺。

啓す

檀越

ふとて、廣德寺の前を過ぎさせ給ふに、御輿の内よりこの寺の門を御覽じ、供奉の人を召しこの寺の名を問はせ給ふ。しか〳〵と啓しぬ。御歸山の後御側衆に、「今日路傍に見たりし廣德寺の大門は、建てざま他に異なり。いかさまその故あるべし。我が山に出入する大工どもに尋ねよ。」と仰せありしまゝ彼此問ひたりしに、一人の大工申すやう、「誠に傳へ承る事の候。往時この門建てたりし大工の、成就の後つく〴〵見るに、この門の高さ幅に應じては一尺低しと見ゆ。これ全く初に考へ定むべかりしに、今更せん方なしと後悔しゐける」が、住山の諸僧を始め、大小の檀越及び同職の工匠まで、誰一人難ずる者なく、唯この門の美麗をのみ稱しぬれば、獨り我が心にのみ籠めて日月をすごせしに、或日この門前を過ぎし時またも顧れば、とかく一尺低しと心にかゝりて佇むに、あとより誰ならん、これも大工と見えて二人連にて來り、『この大門の手を盡して出來たるは、誠

いしばり

規範

に工ある匠のしわざと見ゆるに、門の大きさに應じては高さ一尺を誤りたるはいかに。』と語る。かの造りし大工肝にいしばりして、さては人の目にも見えぬる事よと、背中に汗し甚だ慚愧し、宿に歸りて後も、濛々として心の中に快からず、終に病となり、既に死せんとして、しか〳〵の由妻子に語り、死後も尙この事殘念なりと言ひて終りぬとぞ。それ故大工仲間にても、誤の規範として語り傳へ申す事なり。近世はその誤を恐れ、何事も珍しき作事、或は堂塔、或は樓閣、皆他所にあり來たるを手本としはべるなり。」と語りけるを、具にかくと啓しければ、法親王聞し召し、「さにこそありけるよ。我思ふ所ありて尋ねつるに、それとは異にして、しかも奇談を聞きつる事なり。その故いかんとなれば、むかし京都の大内裏造られたる時、朱雀の南に羅城門(一)を建てられしを柏原院(二)叡覽ありて、『この門一尺高し。必ず風にあたりて破損あるべし。柱一尺を切りつめよ。』と敕諚ありて

(一)今の下京區東寺の西南にその址がある。
(二)第五十代桓武天皇。

歸らせ給ふ。さてかの門造り果てて、遷都近くなりてまた御覽じて、『朕初め惡しく見て、一尺切れと言うてけり。一尺五寸切らすべかりしを、今五寸切るべし。高く見ゆる。』と仰ありければ、大工等大いに恐怖して申す樣『この門はもとの門の樣に建合せ候を、一尺切れとの敕諚ながら、仰のまゝに切り候ひては無下に低くなり、遠く見上ぐるに高やかなるこそきら〳〵と候へ、かゝる離家の平かに見えたらんは見苦しと思ひて、五寸を切りて候を、今五寸と仰あるは、初に御覽じたがへるにあらず、五寸隱して切り候はぬを、御目の程恐れ感じ奉りぬ。』と申し上げぬ。帝『今切らば遷都の間にもあはじ。さらばその通りにてあるべし。但し風にても荒くば吹倒さるゝ事もあるものぞ。』と敕諚なりぬ。大工等『いみじく強く造り候上に、尙また五寸切りて候へば、更に危き事候はじ。』と申しけり。さて都遷りの後、末の世に至り三たびばかり吹倒されたりとぞ。門閣の高低、尺寸を爭ふ事かくの如し。今東都は南に海を受け、北に山嶽遠く、東西も尙平原の國にして、風行高からざる地なり。且また年々まさる繁榮、一寸の空地もなくいらかを連ね檐を並ぶれば、偶〻失火ある時に救ひ難くして、大火に及ぶもうべなり。然るにかの寺門高さ一尺を減じて建てたる事、風の患を避け火の災を逃るゝ事、土地に應じて大幸の指圖と覺えつるまゝ、いかなる宏智の者の好みなりけると思ひしに、却つてかの大工これを憂ひて死せる事、唯眼前の好否になづみて、大利の得失を知らざりしなり。恨むらくは我來る事おそく、彼が去る事早くして、その愁死を救はざりし事をこそ。」と仰ありしが、果してこの寺門今に至りて風火の災を遁れ來れるこそ不思議なれ。

——東遊記——

自修文

中央氣象臺を見學して

この間のあらしは大分ひどかつたが、君の方はたいして被害もなかつたさうで安心した。漸く秋らしい時候になつて來た。君も相變らず元氣に勉強して居る事だらう。僕も例によつて頑健その物と言ひたいくらゐだ。今日の土曜日、僕等の學年全部で中央氣象臺の見學に行つた。不斷新聞を讀んで、氣象臺といふと、天氣豫報を出す事と、地震を調べる事だけをする所の樣に思つてゐたが、實際行つて見ると、中々どうしてそれ所ではなく、實に色々の仕事をやつて居るのでびつくりした。百聞は一見に若かず、平素の蒙を啓く事が出來て嬉しかつたまゝ、茲に見學の次第を一報するから、何かの參考にしてくれ給へ。

朝九時門に入つて、玄關前に整列して待つ。建物は震災後假建築のまゝのバラックだが、若い臺員の人たちが、元氣潑剌たる面持で

(一)東京市麴町區竹平町。

蒙を啓く　知らなかつた事を敎へられる。蒙昧を啓發する。

行交ふのを見ても、何となく臺內に漲る生氣に胸を打たれる樣な氣がする。やがて一人の臺員が現れて、諸所見る前に、一應この氣象臺でやつてゐる仕事に就いて說明して下さる。仕事は各掛に分れて、臺員が手分してやつてゐるのであるが、その掛を列擧すると、豫報掛、無線電信掛、測候掛、地震掛、雨量掛、雷雨掛、統計掛、航空氣象掛、農業氣象掛、檢定掛等があり、尙その他に附屬の工場がある。そして各掛でどんな仕事をしてゐるかといふ事も、大體お話があつたのだが、それは後廻しにして、すぐ參觀記を書く事にする。

皆二十人くらゐづゝの組に分れ、各組に一人づゝ臺員の方が附いて說明して下さる。僕等の組が第一に案內されたのは豫報掛。部屋の南側の窓側に並んだテーブルの上には、卓上一面の大きな天氣圖用の白地圖が擴げられ、これに隣る一隅は電信掛で、各地測候所で定まつた時刻に觀測した氣壓、氣溫、風力、風向、天氣等

を知らせる氣象電報は、中央電信局から此所へ電送される。それが片端から天氣圖に書きこまれ、これを基にして天氣豫報が出されるのだが、その操作は非常に敏速で、日本內地は勿論、樺太、朝鮮、滿洲、臺灣に於ける朝六時の觀測材料が、八時半頃にはもう集つて發表になるさうである。每朝九時にラヂオで放送されるのがこれである。尙天氣豫報は、この外、正午及び午後六時の材料によるものとで都合三回發表になる。しかし、此所の一番の仕事は暴風警報を出す事で、海上の船とか、飛行機とかが、暴風雨の被害を出來るだけ避け得られる樣に、やはり天氣圖を基として、風が强いだらうとか、暴風雨の虞があるだらうとか思はれる所へ前以て警報を出す。先日の颱風の時などは、隨分忙しい目に會つたといふ事であつた。あの時の天氣圖を見せてもらふ。颱風が四國の南の方の沖合から、伊豆半島目がけて進んで來て、關東地方の南を荒して鹿島灘(一)に去つた有樣が、手に取る樣に見えて面白か

操作　仕事をすること。

颱風　低氣壓の一種。熱帶性低氣壓ともいふ。夏から秋にかけて南洋方面に發生し、初めは北西に進み、後北東に進路を變へて本邦を襲ふものが多い。

(一)茨城縣の東部の海洋。

つた。かう說明を聞いてゐる間にも、電話はしきりなしにかゝつて來て、掛の人は「明日の天氣は北西の風、晴一時曇です。」と答へてゐる。日曜日の天氣の問合せで、土曜日は格別忙しいのださうだ。尙この室の一部では、雷雨の警報をやつてゐる。これは關東各府縣やその近縣の高壓送電線の落雷等の被害を、豫防輕減する爲にしてゐるので、送電線沿線その他の雷雨觀測所からくる報告を此所でまとめて、雷雨の發達程度や進む方向を豫報する。さうすると、電力會社や鐵道では、落雷の危險ある送電線を警戒する。この警報が始つてから、落雷による停電は非常に少くなつたさうである。しかし、秋風の立ち初めたこの頃では、雷雨の發生も非常に少いといふ事で、仕事は閑散の樣であつた。

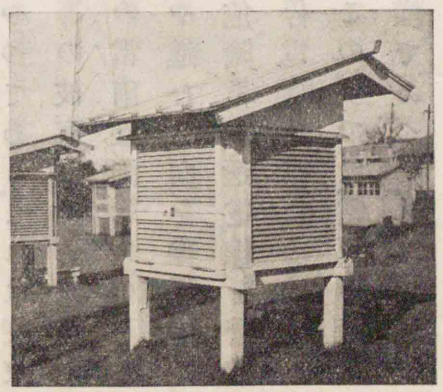
次に案內されたのは、廊下を隔てて向側の部屋にある無線電信掛で、太い針金で直徑三尺もある大きな渦卷を作つたものや、ラヂオの眞空管や受信器などが先づ眼を引く。無線の機械はこみ

高壓送電線　高電壓の電氣を送る電線。

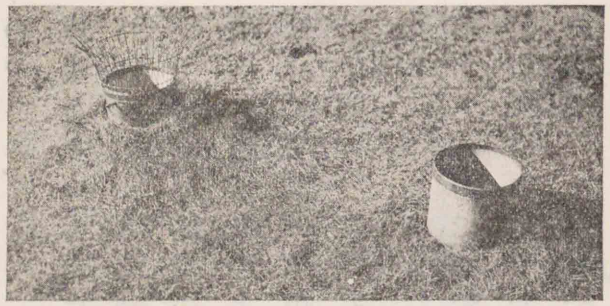
眞空管　電流が一方にだけ流れる樣に作られた眞空の電球。

露場（氣象觀測を行ふ場所）

入つてゐて、少しもわからないが、唯此所から日に三回豫報掛で出す氣象實況報を無線電信で放送し、暴風警報のある時はそれをも放送するといふ事を聞いて、更に測候掛へ行く。部屋へは入らずに、すぐ南側の芝生の廣い空地に連れて行かれる。所々に白塗の蜜蜂の巣箱の樣な物が立つてゐる。此所を露場と言つて、蜜蜂の巣箱は百葉箱と言ふのだといふ事を第一に敎はる。そして一つの百葉箱へと行く。中には普通の寒暖計と、球部を寒冷紗で包み、それを縛つた絲の先を水壺の中に垂して、球部が何時も水で濕つてゐる樣にした濕球寒暖計とが、並んで掛つてゐる。この二つの寒暖計の示度の差で、空氣の濕つてゐる度合、卽ち濕度がわかるのださうだ。この隣に寒暖計が二本横に



百葉箱

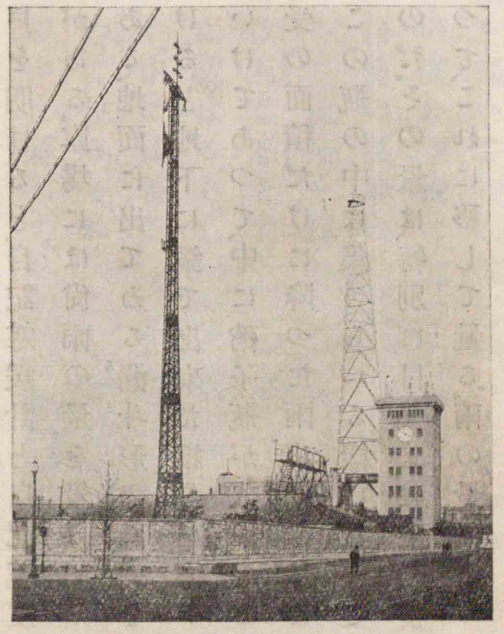


雨量計（右）と蒸發計（左）

して掛けてある。上のが最高寒暖計、下のが最低寒暖計で、その日の一番高い溫度と、一番低い溫度とがこれでわかるのだといふ。百葉箱の南側へ廻つて戸を明けると、自記寒暖計と自記濕度計とがある。露場には尙雨の量を量る雨量計がある。地面に出てゐる漏斗形の雨受を取除けると、地下に銅で出來た細長いバケツがいけてあつて、中に硝子瓶が入つてゐる。雨受の面積だけに降つた雨が、漏斗によつてこの瓶の中に集められる樣になつてゐるのだ。その量は、特別に目盛した硝子枡があつて、これに移して量る。雨の量はその雨水が流れずに地面に溜つて行つた時の深さを、粍で測つて表すのが正式ださうで、この枡にも、一〇粍まで目盛がしてある。これ

に隣つて蒸發計といふのが置いてある。これは定まつた量の水を容れ、一日放置して、どれだけ蒸發によつて減つたかを見るものである。

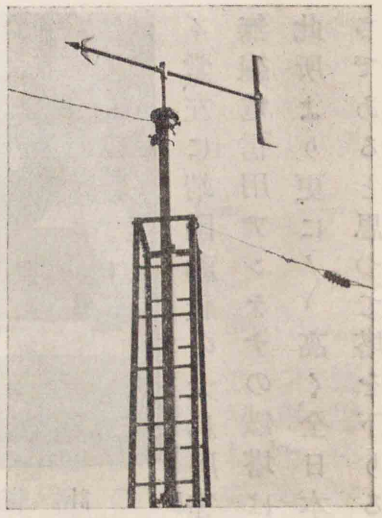
露場で見るものはこれだけで、次に大時計の附いてゐる七階建の塔へ案内される。この一階には、氣壓を測る水銀晴雨計の置いてある室があるが、これはなか〳〵むづかしいので、觀測する時以外には、めつたにはいらない事になつてゐるといふ。七階まで各階毎に色々珍しい器械、模型、寫眞、標本等が陳列してある。屋上には風の方向を見る風信器(一)と、風の速さを測る風力計とがあ



中央氣象臺全景

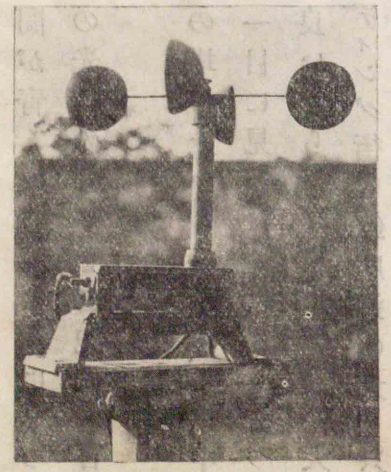
(一)俗に風見といふ。

る。お椀の四つ附いたのはロビンソン風力計(一)といふのださうだ。風信器や風力計の中には、屋上から天井のコンクリートを貫いて軸が七階の室に通じ、其所に据ゑられた自記裝置を働かしてゐるのもある。屋上には



風信器

尙この他日照計が二つ置いてある。一つは大きな硝子の球があつて、その蔭に細長い帶狀の厚紙を挾んだもので、日が照ると紙が焦拔ける樣になつてゐる。も一つは、細長い圓筒形のものに小さな穴を二つあけたもので、これは中に



風力計

(一)Robinson. 西紀一八五〇年英人ロビンソンが發明したもの。

日照計　日の照つた時間を測る器械。

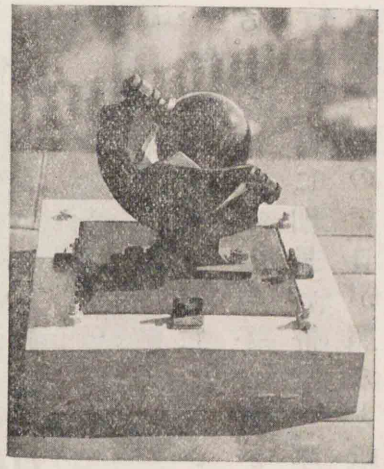
(一) department storeの略。(百貨店)

(二) 神田區駿河臺。

(三) 同所。日本ハリスト正教會の會堂。本堂はドーム形をなし、高さは約三五メートル。

(四) Antenna. (空中線)

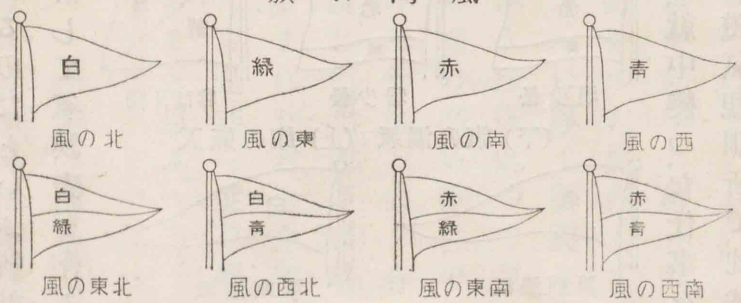
青寫眞の紙を入れ、日が照つた時間が青く燒き附く樣になつてゐるのだといふ。屋上には尙太陽の光熱の强さを自記する日射計が据ゑられてある。



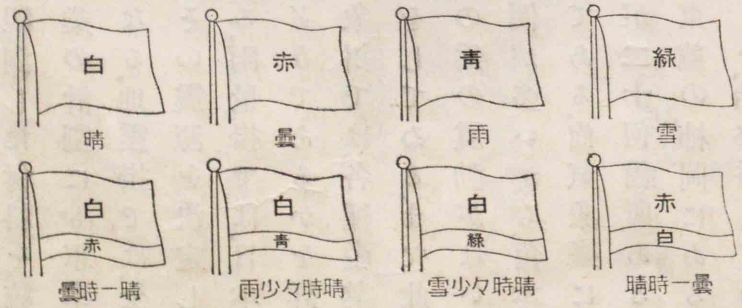
日照計

この塔の上から見ると、東京中殆ど一目に見わたされると言つても良いくらゐで、東京驛前の大ビルディング街(一)も、銀座邊の大デパートも、新たに建つた貴衆兩議院も一々指さゝれ、振返れば、本郷の帝大の建物、近くは明治大學(二)、ニコライ堂(三)、左に靖國神社の大鳥居等皆指顧のうちにある。傍に聳える無線電信用アンテナ(四)の鐵塔は、高さ七十メートルといふだけに、此所より更に〳〵高く、全日本に呼びかけるにはふさはしい高さであると思つて塔を下りる。

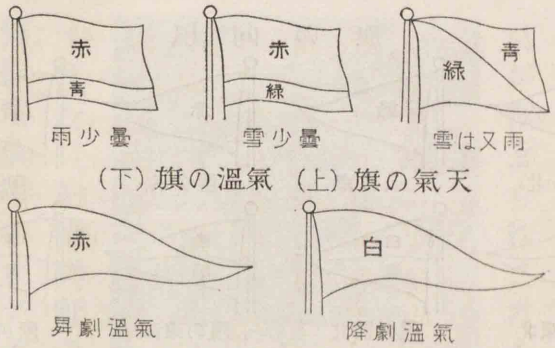
風向の旗



露場の傍にロビンソン風力計の澤山並べてある臺は何の爲かと質問したら、あれは檢定用のだとの事であつた。檢定掛では、寒天暖計や晴雨計等一切氣象用器械を檢査のして、その示度がいく旗ら違ふかといふ事をはつきりさせたり、氣象觀測用として役に立つかどうかを定めたりする事をやつて



ゐるのだといふ。統計掛といふのでは、各地で觀測した材料を統計して氣候表を作るのだが、これは種々の事業の計劃にも軍事行動にも第一に參考になる。地震掛では、全國に起る地震を調べてその震源を決定したり、統計を取つたりする。雨量掛では、日本に於ける雨量の分布がどうであるかを詳しく調べて居り、農業氣象掛では、各種産業と氣象との關係の調査をしてゐる。また此所では種々の交通機關の爲の震動がはいつて、地震の觀測には不便が多いから、舊本丸内に地震計室を置いてある。尚氣象臺には附屬の支臺や測候所が二十何箇所ある(一)が、就中變つた仕事をしてゐるのは、筑波山の東麓の柿岡にある地磁氣觀測所で、地球磁力の向きとその強さとを、始終番してゐ



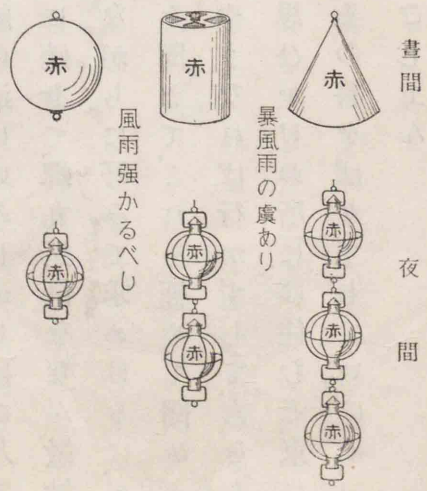
天氣の旗（上）　氣溫の旗（下）

(一)茨城縣（常陸國）新治郡柿岡町。

るのだといふ。

皆が見學し終へたのは晝に近かつた。案内して下さつた方々に厚く御禮を述べての歸り途、振返つて見たら、露場の端の高い鐵柱の白と青との三角旗と、白と赤との四角旗とが、「北西の風、晴一時曇。」と讀まれた。君も今度出京されたら、是非一度見學に行かれん事を御勸めする。確かに得る所があると思ふ。

暴風警報信號標



二七　博雅の三位

今は昔、(一)源博雅朝臣といふ人ありけり。延喜の御子の兵部卿克明

(一)第六十代醍醐天皇の皇孫。天元三年（一六四〇年）薨、年六十三。

いみじ　えならず
(一)第六十二代村上天皇。
(二)山城(京都府)と近江(滋賀縣)との國境。
雜色
あながちに好む

親王と申す人の子なり。萬づの事に勝れてありける中にも、管絃の道になんいみじかりける。琵琶をも微妙に彈きけり。笛をもえならず吹きけり。この人、村上の御時に四位の殿上人にてありけり。その時に、逢坂の關に一人の盲、庵を作りて住みけり。名をば蟬丸とぞいひける。これは敦實と申しける式部卿の宮の雜色にてなんありける。その宮は宇多法皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年ごろ琵琶を彈き給ひけるを常に聽きて、蟬丸琵琶をなん微妙に彈く。然る間、この博雅この道をあながちに好みて求めけるに、かの逢坂の關の盲、琵琶の上手なる由を聞きて、これを極めて聞かまほしく思ひけれども、盲の住家ことやうなれば行かずして、人をもて內々に蟬丸に言はせける樣、「など思ひかけぬ所には住むぞ。京に來ても住めかし。」と。盲これを聞きて、その答をばせずしていはく、

よの中はとてもかくてもすごしてん

中秋

宮もわら屋もはてしなければ。

と。使歸りてこの由を語りければ、博雅これを聞きて、愈、そのみやびの心に感じ、思ふ樣、「われ音樂の道を好むによりて、この盲にあはんと思ふ心深し。されどこの盲の命何時まであらんもはかり難し。我が命も知り難し。琵琶に流泉、啄木といふ曲あり。これは世に絕えぬべき事なり。唯この盲のみこそこれを知りたるなれ。かまへてこれが彈くを聞かん。」と思ひて、夜かの逢坂の關に行きにけり。されども蟬丸その曲を彈く事なかりければ、その後三年の間、夜々逢坂の盲が庵のあたりに行きて、その曲を今や彈く、今や彈くと密に立聞きけれども、更に彈かざりけるに、三年といふ八月の十五日の夜、月少しうはぐもりて、風少しうち吹きたりけるに、博雅「あはれ今宵は興あり。逢坂の盲今夜こそ流泉、啄木は彈くらめ。」と思ひて、逢坂に行きて立聞きけるに、盲琵琶をかき鳴して、もの哀に思へる氣色なり。博

雅これを極めて嬉しく思ひて聞く程に、盲獨り心をやりて詠じていはく、

逢坂の關のあらしのはげしきに
しひてぞわたる世をすごすとて。

とて琵琶を鳴したるに、博雅これを聞きて、涙を流して、哀と思ふ事限りなし。盲獨言にいはく、「あはれ興ある夜かな。若し我にあらぬ數寄者や世にあらん。今夜心得たらん人の來よかし。物語せん。」といふを、博雅聞きて聲を出して、「王城にある博雅といふ者こそこれに來たれ。」といひければ、盲のいはく、「かく申すは誰にかおはする。」と。博雅のいはく、「我はしかぐ〳〵の人なり。あながちにこの道を好むによりて、この三年この庵のあたりに來つるに、幸に今宵汝に會ふ。」と。盲これを聞きて喜ぶ。その時に博雅も喜びながら庵の内に入りて、かたみに物語などして、博雅、流泉、啄木の手を聽かん。」といふ。盲「故宮はか

かたみに

流泉啄木

齋藤弓弦筆

くなん彈き給ひし。」とて、件の手を博雅に傳へしめてけり。博雅琵琶を具せざりければ、唯口傳をもてこれを習ひて、返すがへす喜びて、曉に歸りにけり。

これを思ふに、諸の道は唯この如く好むべきなり。それに近代はげに然らず。されば末代には諸道に達者は少きなり。蟬丸いやしき者なりと雖も、年ごろ宮の彈き給へる琵琶を聽きて、極めたる上手にてありけるなり。それが盲になりければ、逢坂にはゐたるなりけり。それより後、盲の琵琶は世に始れるなりとなん語り傳へたるとや。

（「今昔物語」に據る）

二八　人生の味

大町桂月[1]

世の中は廣き樣にて狹く、狹き樣にて廣し。政治や、軍事や、商業や、工業や、學問や、文學や、技術や、人の活動すべき所は到る所にあり。そ

（一）文學者。名は芳衛。高知市の人。大正十四年歿、年五十七。

の中にて何か好む所、適する所あれば、百年の一生をこれに用ふるも、尙短きを感ず。死ぬるまでも常に希望ありて、浮世が面白く送らるゝなり。

好む所人によりて異同あり。金を得んと志す者あり。名を殘さんと心掛くる者あり。唯愉快に活動して止まんと欲する者あり。多く金を得る者が必ずしも偉き人にあらざれば、名を殘す者が必ずしも偉き人にもあらず。苟も不正不義なる事をなさゞる以上は、何にてもその好む所に從事して可なり。高位高官を博し得たる政治家が、窮境に學理を研究する學者を嘲るべきにあらず。名聲赫々たる文人が、算盤と首引して巨財を得るに餘念なき實業家を賤しむべきにあらず。

人、好んで適する事に身を委ぬれば、その心常に愉快なり。心愉快なれば、身體も健全なり。邪念兆さずして、安心立命も自ら

安心立命

天分

得らる。よそ目には、あの樣に骨折りては身體が續かざるべしと見ゆるも、本人はさばかり苦しまず。欲望大にして希望益、大に、希望大にして快樂愈、大なり。人生の要、實に茲に歸す。

この人生の要を得んとせば、先づ好む所なかるべからず。好みを生ずるまでには、學習を積まざるべからず。學習を積みて物事の味がわかる樣になれば、これ人生の味を解し始めたるなり。熱中して忍耐力に富まば、その人や必ず成功する所あらん。成功して小成に安んじ、根氣がなくば、最早進歩せず。その人は退歩せざるも、他は進歩する故に、他に比して退歩するなり。退歩する樣になりては、人生の味が減ずるなり。その人の生は苦痛なるべし。

その目ざす物は大なるに越したる事なけれども、人の天分により、性質により、また境遇によりて、大なる物を目ざすに由なき者多かるべし。かゝる人は失望して、人生を悲觀するが常なり。されど靜

毀譽褒貶

思せよ。植物は必ずしも松杉の如き大木が價あるものとも限らず。灌木となりて花をつくるも、また面白からずや。更に小さなりて菊となり、蘭となりて香を放つも、また面白からずや。貧家の少年少女大いに學ぶ能はずとて、落膽するを要せず。何か一事一能に趣味を有して、ひとかどの域に到らば、世の大いに學びたる者と同じく、人生の味を解するを得べし。美衣を纏ひて身體が始めて快きものにあらず。高樓に住ひて心が始めて樂しきものにあらず。世俗の毀譽褒貶以外に卓立して、我が適とする所に從へば、宇宙卽ち我なり、我卽ち宇宙なり。心常に融々として、唯人生の面白きを見て、苦しきを見ず。かくて始めて人生の味を覺るを得るなり。

國文　卷五　終

昭和六年二月十八日印刷
昭和六年二月二十二日發行
昭和六年十月九日訂正再版印刷
昭和六年十月十二日訂正再版發行

國文奥附

著者　冨山房編輯部
發行兼印刷者　東京市神田區神保町一丁目三番地　合資會社冨山房
代表者　同所合資會社冨山房社長　坂本嘉治馬
印刷所　東京市小石川區音羽町七丁目六番地　冨山房印刷部

版權所有

定價
自卷一　至卷八　各金六拾錢
卷九・十　各金五拾九錢

發行所　東京市神田區神保町一丁目三番地　合資會社冨山房
電話神田二七一―三六
振替貯金口座東京五〇一番